

令和5・6年度 新宿区教育委員会 研究発表校(2年次)

研 究 主 題

「学ぶ」をたのしむ教育活動の展開
～子どもが本気になる学びのビジョン～



令和7年2月
新宿区立柏木小学校



挨拶

新宿区教育委員会教育長 針谷 弘志

柏木小学校は、令和5・6年度の2年間にわたり、新宿区教育委員会研究発表校として、また令和6年度の1年間は新宿区教育委員会教育課題「教科担任制」モデル校としても、『学ぶ』をたのしむ教育活動の展開～子どもが本気になる学びのビジョン～」をテーマに、研究を進めてきました。この度、その成果を発表されますことを、心からお喜び申し上げます。

令和3年1月の中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」では、一人ひとりの児童・生徒が、自分の良さや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められているとされました。

本校は、新宿区教育委員会研究発表校及び新宿区教育委員会教育課題「教科担任制」モデル校として、中学年からの教科担任制とコース別学習を取り入れて研究を進めています。教科担任制では、教師の専門性を生かし、質の高い授業の展開や子どもの興味を喚起するとともに、複数の教員が関わることによる子どもの多面的な理解につなげてきました。コース別学習では、学び方の説明を受けた子ども自身が、單元ごとに学習コースを選択し、個々の特性や能力、意欲を踏まえた効果的な学習を進めることで、子どもが自らの学習の状況を把握し、学習が最適となるよう主体的に調整することを促しています。

また、実社会で様々な働き方や生き方をしている人と交流をもつ「まなびのマルシェ」での実践を通して、子どもたちは生き方や考え方の認識を柔軟にしてきました。そして子どもたち自身が社会とつながり、中核となって起業体験をする起業型探求プロジェクト「ライブ」の取組の開始は、今日的な課題の解決や急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力の育成のために、多様な他者と協働しながら、地域社会など様々な場面で体験活動を通じて学ぶことにつながり、大変意義深いものと言えます。

新宿区教育委員会では、変化の激しい時代を担う子どもたちが生涯を切り拓いていく力を伸ばしていくための教育を目指し、「新宿区教育ビジョン」に掲げる、教育目標の実現に向けて取り組んでいます。今後も、教育委員会として、関係機関と連携を図りながら各校を支援してまいります。

結びになりますが、2年間にわたり本研究を推進し、研究の充実に努めてこられました竹村 郷校長をはじめ、教職員の皆様の御努力に対し、心より感謝申し上げます。また、御指導、御助言を賜りました講師の先生方や学校の教育活動を支えてくださいました地域や保護者の皆様に厚く御礼を申し上げ、挨拶といたします。

本校では、これからの変化の激しい社会を、希望や期待をもってたくましく生きてほしいと願い、「生き生きとした学ぶを創る教育活動の展開」をテーマに、新宿区教育委員会「研究発表校」の指定を受け、昨年度より研究を進めてまいりました。私たちとともに生きる子どもたちには、多様な価値観をもつ人と、思いや考えを伝え合い、互いを認め合いながら、共に未来を創造していくことが必要であるという認識は、研究に限らず、本校の教育の理念です。

まず私たちが大切にしていたことは、子どもたちが生活することや学習することに意欲をもってほしいという願いです。主体的・対話的で深い学びを展開するのにも、まず、子ども自身の気持ちが向いていなければ思うように進みません。そこで、子どもたちにまずは任せてみようということを全教員と確認しました。ともすると教員は、「子どもにわかりやすいような授業」や「興味や関心が高まる授業」で子どもたちの意欲を高めようとしています。しかし、これらの主語は「教員」です。「子ども」ではありません。子どもが生活や学習を見通し、自らプランニングして臨むことができるのであれば、それこそ理想的です。ここで問題となるのが、「時間的にゆとりがない」とか、「かえって労力が多くなる」とか、「全員の子がそういったことができるわけではない」という反論です。その都度、私は「ゴールはどこにあるのですか」「あなた方はいつまでお膳立てをし続けるつもりですか」を繰り返してきました。

本校では、これらへの対応として、教科担任制(今年度からは中学年以上)と子ども自ら学び方を選択するコース別学習を3年生以上に取り入れた教育活動を展開してきました。これによって、教員は多くても国語、社会、算数、理科、体育の教科においては、指導する教科は2教科となります。コース別については、指導者の制限で必ずしもそうはなりません。基礎、活用、探究の3コースで取り組む方式が生み出され、単に教科書をなぞるだけの指導は禁止しました。教員が創意を発揮できなければ、本校のねらいには到達できないからです。もっとも、本校の中堅以上の教員の多くは、自らの希望や学校からの派遣で、中央研修や全国各地の先進校の視察で鍛えられてきたという経緯が下支えとなっはいます。

そのほかに本校では、子どもたちの自律を促す活動を、専門家の方々の力をお借りしてダイナミックに展開してきました。「まなびのマルシェ」や「ライブ」などをはじめ、放課後には放課後部活動「スタート」を始めて、子どもの意欲や希望に火をつけました。子どもたちの間でも、「柏木小学校では、自分の思いが実現できる」という認識が生まれ始めています。今年度、多くの全国から視察をいただきましたが、いずれの方々も「どうしたらああいう子たちが育つのですか」というお誉めの言葉をいただきました。

これからの社会を担う子どもの人間性・創造性を育む教育研究として、教職員一同、子どもたちといろいろな思いを分かち合いながら取り組んで参りました。まだまだ、明確な成果をお見せするには不十分な点が多くあると存じます。どうぞ忌憚のないご意見を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、本研究を進めるにあたりまして、新宿区教育委員会ははじめ、関係各位より、多くのご指導・ご助言を賜りました。心より御礼申し上げます。

目 次	
教育委員会 あいさつ	1
まえがき	2
I 研究の概要	5
1 本校が目指す子どもの学び	
2 研究の背景	
(1)社会的背景	
(2)新しい時代と社会に開かれた教育課程	
(3)未来を創る子どものために～これからの世の中に必要な資質・能力～	
3 柏木小学校の教育を創りなおす	
(1)本校の教育の指針	
(2)柏木小学校の教育の質的改善	
(3)指導方法の工夫と改善	
(4)「社会に開かれた教育課程」	
①「まなびのマルシェ」の実施	
②起業型探究プロジェクト「ライブ」の実施	
③躍動する生活科の推進	
④放課後部活動(課外)「スタート」の創設	
研究の概要	
II 柏木小のビジョン	13
1 正解のない時代のビジョンづくり	
(1)柏木小学校のビジョンをつくる5つのステップ	
(2)step1 自分たちらしさを検索する	
①私たちの学校が手がけはじめたこと	
②従来型授業のアンチテーゼとしての「まなびのマルシェ」	
③子どものニーズを引き出し、それら対応するシステムの変更	
④柏木小学校の現在を知る	
(3)step2 未来の社会像をイメージする	
(4)step3 未来の自分たちの役割を見つける	
(5)柏木ライブという試み	
(6)step4 未来の風景を描き出す	
III 研究の具体化	23
1 教師に求められている指導力	
2 ゴールから考える授業	
学び方を学ばせる学習への移行(教師の側から構築する授業)	
3 学びのプロセスの質を高める授業改善の視点	
(1)私たちが求める「主体的な学び」とは何か	
(2)私たちが求める「対話的な学び」とは何か	
(3)グラフィックレコーディングについて	
(4)創るノートへの移行	
(5)私たちが求める「深い学び」とは何か	
(6)私たちが求める「見方・考え方」とは何か	
IV 柏木小の教育	35
1 柏木小学校の学習活動	
2 柏木小学校が育みたい学力	
(1)学力は学校が提供できる最大の商品	
(2)「知っている・できる」を捉え直す	

(3) 柏木小学校の授業を変革する

①なぜ授業変革が必要なのかを論理的に説明する

(4) 先進的な考え方や実践に学ぶ

(5) 本校の目指す授業をループリックにまとめる

(6) 授業の質を上げるための取り組み

①チームで指導にあたるための教科担任制度の取り組み

②チームで指導にあたる教科担任制度の導入

③ミニ研究会とミニ協議会による研修

④保護者向けの通信「柏木ビジョン」の発刊

柏木ビジョン(サンプル)

3 柏木小学校の特別支援教育

(1) 特別支援教育の捉え方

(2) 校内体制の充実

(3) 柏葉学級の教育

(4) 柏葉学級の授業①

(5) 柏葉学級の授業②

V 教科の教育 各教科の単元構想図 55

1 社会に開かれた学習指導

2 「何を教えるか」から「何ができるようになるか」へ

3 本校における各教科の具体化

- ・国語科の指導
- ・社会科の指導
- ・算数科の指導
- ・理科の指導
- ・音楽科の指導
- ・図画工作科の指導
- ・生活科の指導
- ・体育科の指導
- ・総合的な学習の時間の指導
- ・生活単元学習の指導

VI 研究実践事例 77

・1年生 国語科

・2年生 算数科

・3年生 国語科

・3年生 社会科

・3年生 音楽科

・4年生 図画工作科

・5年生 体育科

・6年生 社会科

・特別支援学級 算数科

VII 起業型探究学習 ライブ実践事例 101

VIII 成果と課題 119

おわりに 122

I 研究の概要

1 本校が目指す子どもの学び

柏木小学校の教育の基本理念というべき考え方は、「子どもが学習の主体者となる教育」であり、それが子どもたちの未来へとつながっていることである。本校ではこれまで、子どもが主体的・創造的に自己を高めていくための学習指導や教育課程の在り方を研究してきた。つまり、子どもたちが本来もっている思いや願いを大切にし、その実現に向けて教師がどのような教育観をもち、カリキュラムを構想すればよいのかという点について様々な試みを行ってきた。たとえば、子ども自身が学ぶ価値を見いだすことのできる主体的な学習を目指し、与えられる課題から子ども自身で設定する問題へ、そして、与えられる方法に従う学びから、課題解決的な学びへと転換を図ってきた。この中で特に重視してきたのは、「子ども自身が自ら課題解決的に学ぶ」ということであり、子ども主体の学びを重視した教育である。こうした学びの場では、自ら問いかけ追究していくところにこそ、実感を伴った価値を創造できるチャンスがあると考えている。すなわち、本校においては、子どもたちが様々な問題をどのように解決していくのかという、追究の過程を重要視しながら、子どもの育ちを見つめ続けている。

2 研究の背景

(1) 社会的背景

現在の時代は、2010 年代に世界経済会議フォーラムで唱えられた VUCA（ブーカ）と呼ぶそうだ。VUCA とは、V（Volatility:変動性）・U（Uncertainty:不確実性）・C（Complexity:複雑性）・A（Ambiguity:曖昧性）の頭文字を取った造語で、「先行きが不透明で、将来の予測が困難な状態」を意味する。

今後の社会は、社会情勢、経済などが複雑さを増し、将来の予測が困難な状況になるといわれている。ここで問題とされているのは、「これまでの常識」に固執せず、想定外の出来事への対応が求められるという点である。現に、現在、社会のいたるところで、こういった事態はあちこちで実感できるところとなった。

こうした世の中の背景にあって、知識や技能だけにとどまらない、資質・能力やスキルの育成にも注視しなければならない。ここでは、VUCA（ブーカ）の詳しい解説やその対処方法について論じることではないため避けるが、実社会においては切実な喫緊の課題として取り上げられている。ということは、子どもたちが近い将来直面することであるし、学校現場は関係ないという立場でもないということである。今後は教育の質の改善にとどまらない、学校経営の意識改革が現在急速なピッチで求められている。

(2) 新しい時代と社会に開かれた教育課程

平成 27 年 11 月に文部科学省は、「2030 年の社会と子どもたちの未来」という提言の中で、15 年後の未来を見通して、「社会に開かれた教育課程」の必要性について述べている。

- ・子どもたちの学校生活の核となる教育課程について、その役割を捉え直していくことが必要である。学校が社会や地域とのつながりを意識する中で、社会の中の学校であるためには、教育課程もまた社会とのつながりを大切にする必要がある。学校がその教育基盤を整えるにあたり、教育課程を介して社会や世界との接点を持つことが、これからの時代においてより一層重要となる。
- ・これからの教育課程には、社会の変化に目を向け、教育が普遍的に目指す根幹を堅持しつつ、社会の変化を柔軟に受け止めていく「社会に開かれた教育課程」としての役割が期待されている。
- ・このような「社会に開かれた教育課程」としては、次の点が重要になる。
 - 1 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
 - 2 これからの社会を創り出していく子どもたちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓（ひら）いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。
 - 3 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活

用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

- ・このためには、教育課程の基準となる学習指導要領及び幼稚園教育要領（以下「学習指導要領等」という。）も、各学校が「社会に開かれた教育課程」を実現していくことに資するものでなければならない。
- ・さらに、こうした教育課程の理念を具体化するためには、学習・指導方法や評価の在り方と一貫性をもって議論し改善していくことが必要である。

教育課程企画特別部会 論点整理 「2030 年の社会と子供たちの未来」から引用

（３）未来を創る子どものために～これからの世の中に必要な資質・能力～

平成 27 年に出された「論点整理」の中で「学校教育において育むべきこれからの時代に求められる資質・能力」及び「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）」が示され、学習指導要領改訂の議論が重ねられる中で、この二つの視点についても整理・更新されてきた。そして、平成 28 年 8 月「審議のまとめ」を経て、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(平成 28 年 12 月 21 日 中央教育審議会)(以下、「答申」)において、以下のように示された。

ア 「資質・能力の三つの柱」

- 何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）
- 理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）
- どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）

イ 「主体的・対話的で深い学び」

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ② 子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

子どもたちの資質・能力は、各教科等における習得・活用・探究という学びの過程において、概念や知識を活用したり、思考力を発揮させたりすることによって、より伸長していく。そのための指導方法は、各学校や子どもの実態、教科等の特性、単元や題材の構成、学習環境に応じて限りなく存在する。「主体的・対話的で深い学び」の視点とは、この多様な指導方法を改善するための視点として示されたものである。

上記の論点整理が出されて、もうじき 10 年となる。これまで、本校においても傍観していたことはなく、様々な授業改善を行い指針を出してきた。しかし、根本的に小手先だけの授業改善では、とうてい資質・能力の育成にまで踏み込んだ議論をすることができなかった。そこで本校では、教育課程そのものを見直し、抜本的な改革を手がけ始めたのが 2 年前のことである。

3 柏木小学校の教育を創りなおす

（１）本校の教育の指針

令和 5 年度、私たちは何をめざして教育活動を展開しているのだろうかということについて話し合った。結論は「子どもたちを生涯にわたって幸せにすること」ということとなった。では、それを達成するために、現在の私たちの教育手法や授業でよいのであろうかというこ

とを考えた時に、圧倒的に何かが欠落しているということに気が付いた。それは、子どもたち自身が「教わる」存在であり、「学ぶ」存在ではないということであった。一部の教師の元では、自力で学ぼうとする子どももいたが、その手法なり考えが共有されていなかった。

そこで「学ぶ」主体者である子どもを、もっと前面に押し出すことで意欲を引き出し、学習の中核となるように仕向けることを主眼とした。そこで令和5年度に掲げた教育の指針は、以下である。

学びを愉しむ教育活動の創造

また、重点として、以下を掲げ、教育課程に示した。

子どもが、社会への**主体的な**参画者となり、知への**主体的な**創造者となり、自己の**主体的な**形成者となっていくための教育活動を展開する。

令和6年度には、学びを愉しんでいることを推し量ったり、評価したりするには抽象的であるなどの理由、そして、子どもと教師がともに同じことを目指すという意味合いから

生き生きとした学ぶを創る教育活動の展開

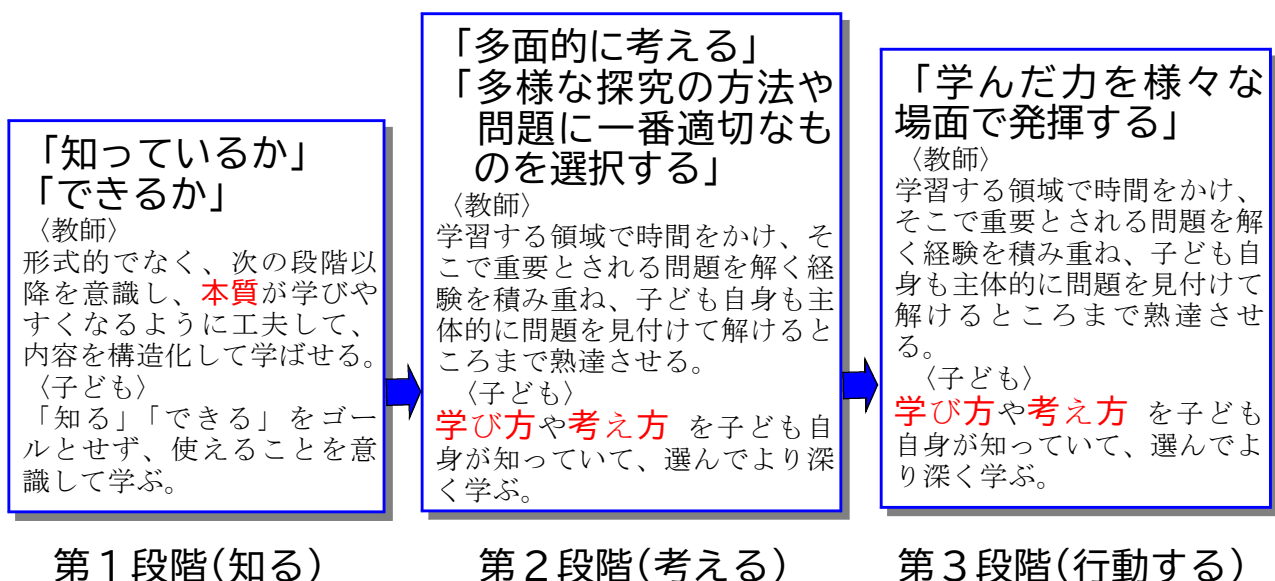
へと変更し、また教育課程に、教育の重点を以下のように示した。

子ども自らが**課題を発見し、他者と協働して解決に取り組み新たな価値を育む**教育活動を、以下に留意して展開する。

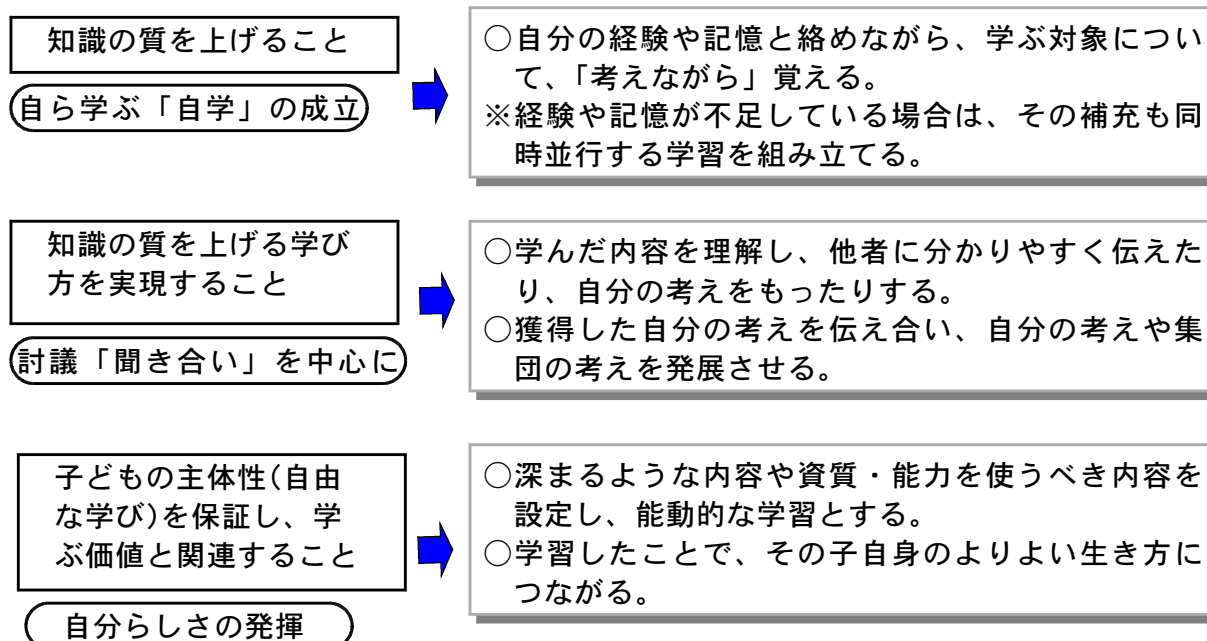
- ★自分で考え、自分で判断でき、考えを表現できる主体者であること
- ★考えの異なる他者とも対話できること
- ★対話を通じて自分の考えや社会を良くすること

(2) 柏木小学校の教育の質的改善

本校が教育の展開で考えたのは、コンピテンシーベースの学力である「知り、考え、社会の中で行動する」ところまでを、いずれの指導過程の中でも意識することである。教科書の内容をさらったらテストをしておしまいというような、意味の薄い教育を見直した。



また、資質・能力の向上に対応した教育を展開するために、以下の視点を示して、教育活動を全校をあげて改善していくこととした。



(3) 指導方法の工夫と改善

子どもたちに自律した学びの場を提供し、適切な指導や支援を行っていきたい。本校においてそのように考え、子どもたちに学ぶ楽しさや意欲を喚起していこうと考え、以下のように取り組んでいる。

1年	基本はクラス担任 音楽は教科担任(講師)
2年	基本はクラス担任 音楽は教科担任(講師) 図工は専科教員 コース別学習 算数
柏葉 ～ 2年	個別最適カリキュラム 基本はクラス担任 音楽は教科担任(講師)
3年 4年	専科及び講師による教科担任＋コース別学習 国語 社会 算数 体育 コース別の学習は実施しないが教科担任 理科 音楽 図工
5年 6年	専科及び講師による教科担任＋コース別学習 国語 社会 算数 体育 コース別の学習は実施しないが教科担任 理科 音楽 図工 家庭 英語
柏葉 3年～	個別最適カリキュラム 基本はクラス担任 音楽と生活単元の一部は教科担任(講師)

コース別学習のコースは、子ども自身が、学び方の説明を受けて、單元ごとに選択をしている。多くはブロックチームで指導を行っているため、子どもたち個々の特性や能力、

さらには意欲を踏まえた効果的な学習について、指導方法を討議したり教材を相互に開発したりするなど、協働して行うことで効果を上げている。

(4)「社会に開かれた教育課程」

先に挙げた文部科学省の、「2030年の社会と子どもたちの未来」という提言からも、子どもたちの学校生活の核となる教育課程について、その役割を捉え直していくことが必要である、と述べられている。要は、学校が社会や地域とのつながりを意識する中で、教育課程もまた社会とのつながりを大切にしなければならないということである。

幸いにして、本校においては、各機関の出張授業をはじめ、学習や子どもたちの視野の拡大に役立つプログラムをこれまで、共同で開発してきた経緯がある。ただそこで感じたことは、各機関の出張授業の類は、子どもたちの年代に合わせた児童向けプログラムであり、実社会との接続を視野に入れたものではないということだ。また新型コロナウイルス感染症の影響で、何年も校外での活動が止まっていたこと、ここ数年で職員もほぼ入れ替わり、地域との接続も新たにしなければならなかったことなど、問題が生じていた。さらには、地域の人と言っても、こちらもまた世代交代や、保護者世代はもともと地元の町会の活動とは無関係といった経緯も重なり、むしろ地域とのつながりは、学校が主導し、新たな関係性を創り出す必要性が生じていた。

①「まなびのマルシェ」の実施

本校では、子どもたちがこれからの先行きの見えづらい未来に、生き方や考え方の認識を柔軟にするという目的で、実社会で様々な働き方や常識にとらわれない生き方をしている方と交流をもつという目的で、「まなびのマルシェ」を企画した。ここに出演していただく方々を、本校では「冒険者」とお呼びし、生き方や考え方の話、挫折を感じたときどううまくいったときの話など、子どもたちに語っていただき、その「冒険者」が取り組んでいることを体験させてもらう機会とした。



当日は、1日3コマの時間枠を設定し、概ね15人～20人の公募で集まった方々に、1時間弱の講座を開いていただいた。この「まなびのマルシェ」は学期ごとに、2年目の1学期まで、合計で4回実施したところ、大いに盛り上がりを見せ、子どもも参観する大人も、興奮した状態でその時間をたのしむことができていた。認知度も上がり、子どもたちの発想も、冒険者の方からの影響が柔軟になってきている。本来であれば、2年目も2学期、3学期と展開したいところであったが、せっかく冒険者から伝えてもらった情熱（パッション）を、ただ受け止めるのみでなく、今度は子ども自身が沸き立ててほしい。さらには社会とつながり、自らの力や知恵で、自分たちが創るビジョンの達成に向けて、進んでもらいたい。そういった理由から、「まなびのマルシェ」は、いったんお休みすることとした。

②起業型探究プロジェクト「ライブ」の実施

「まなびのマルシェ」で社会で活躍する「冒険家」の方から様々な刺激やヒントをもらったということで、今度は、子どもたち自身が社会とつながり、自分たちが中核となって、起業してみようとするプロジェクトを企画した。子どもたちに名称を募ったところ「ライブ」という名前となった。このプロジェクトは3年生以上が自ら希望するグループに所属して、地域社会を子どもたちの手で豊かにしていくことをめざしている。

会社である以上、単年度では難しいが、どの部署も自らが営業や企画も行えたらと考えている。この夏に誕生する、7つの会社は、初年度ということで、まずは研修や仕事の概要を知るといった目的もあるので、トータルでの法人化は見送ったものの、近いうちに「柏木小ラ

イブ」で、法人化を図るとともに、地域や会社などとのやりとりを始め、都会とは言え、高齢化して独居率も高まっている学校周辺の社会の活性化も担うようにしていきたい。これについても後ほど、事例をあげて説明をしたい。

③躍動する生活科の推進

また、低学年においては、主に生活科を使って、学年を超えた交流や、近隣地域、子ども園や保育園、町内の方々との交流を通して、自分たちの取り組んできたことや伝えたいことを交換しようとしている。ねらいは、「一生懸命生活する子」の育成であり、それが新型コロナウイルス感染症禍、より地域での生活が希薄になってしまったつながりや子どもたちの生活を豊かにし、3年生になった時の「ライブ」につなげるという意図がある。

④放課後部活動(課外)「スタート」の創設

子どもたちの興味や関心を高める場を教育課程外にも時間をつくり、学校と保護者の有志で育てていこうとしたのが、放課後部活動の「スタート」である。これは主に外部講師をお願いして、毎日曜日ごとに内容を変えて、全部で9つの活動を行っている。この活動の管理は、主に応募していただいた保護者の方に見守りサポーターとしてお願いをしてお手伝いをしている。

本校においては、共働き世帯も多く、特に低学年などは、子ども一人で習い事に通わせることが不安な保護者が多い。学校内で、放課後に60分程度の習い事をできれば、施設も存分に使えるし、その分比較的安価で安全に子どもたちの発場の場を設置できると考えた。この活動の講師は、教員であったり、地域のバレーボールチームの講師や、新宿でJリーグ入りをねらうサッカーチーム、プロのダンサーにデザイナー等さまざまである。ほぼ教員以外の外部の講師から毎週教わることで刺激となって、どの活動も、子どもたちが夢中になって取り組んでいる。また管理は、保護者が中心であるため、教職員の負担はほとんどない。

この活動を通じて、子どもたちが熱中して取り組む関わり合いが、学年をこえて、または普段はかかわれない講師や保護者などの大人とできたことで、成長にもつながっている。

研究の概要

社会の状況	学習指導要領等の方向性	昨年度の研究成果と課題
VUCA と称される先行き不透明な激動の時代	資質・能力の3つの柱 主体的・対話的で深い学び	課題解決・課題探究学習への移行と教科担任・コース別学習の

研究主題

「学ぶ」をたのしむ教育活動の展開
～子どもが本気になる学びのビジョン～

研究のねらい

これからの変化の激しい社会においても、自信をもってたくましく生きていける資質・能力をはぐくむために、学習指導の改善に向けた「主体的・対話的で深い学び」の確実な実施と社会と連携した教育活動のダイナミックな展開

基礎研究	実践研究
○学習指導要領の内容と改訂の趣旨 平成 28 年 8 月「審議のまとめ」及び「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」の理解 ・「資質・能力の3つの柱」 ・「主体的・対話的で深い学び」 ○小学校の各教科等における「主体的・対話的で深い学び」の視点を踏まえた学習指導構想(「学びの地図」)の作成 ○教科担任制及びコース別学習の効果的な展開と意義について	○子ども自ら学びをつくり出すコース別学習を含めた課題解決型の授業実践 ・課題解決学習を通して、見方・考え方を働かせる学習の展開 ・新たな気づきや価値を生み出す対話の設定 ・自らの成長につなげる振り返りの設定 ○「主体的・対話的で深い学び」の視点を踏まえた学習指導の改善例の再検討 ○教科担任制及びコース別学習の効果検証 ○本校独自の学習プログラム(「まなびのマルシェ」及び「ライブ」等の社会と接続したプロジェクト)の進行とその成果検証 ○実践研究に係る授業者、子ども、関係者を対象とした効果検証の分析と改善

1 研究成果

- (1) 「主体的・対話的で深い学び」の視点を踏まえた課題解決型学習指導の改善例の作成
- (2) 教科担任制及びコース別学習の実証効果の提示
- (3) 本校独自の学習プログラム(「まなびのマルシェ」及び「ライブ」等の社会と接続したプロジェクト)の成果と実践例の提示

2 研究成果の活用

- (1) 研究発表を活用しての普及・啓発
- (2) 全国からの視察(学校、地方自治体、大学、企業等)への対応
- (3) 研究成果を取り入れた「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った学習指導、及び3年生以上の教科担任とコース別学習についての研修の実施
- (4) 「社会に開かれた教育課程」のさらなる開発と発信、さらに教育の可能性をひらくカリキュラムの開発

Ⅱ 柏木小の ビジョン

1 正解のない時代のビジョンづくり

私たちは、何に向かって教育活動を展開しているのだろうか。

最近の社会の状況からすると、従来からある教育の方法を「なぞる」ことでは、おそらくこれからの世の中には対応できない。資質・能力の育成を第一に掲げても、何を想定した資質・能力なのかを明らかとしなければ、単なる教科指導の一環として、話し合い活動を入れてみたといった具合のものとなって、やるべきことはやったというような形式的なものになってしまう。

まずは、「何のためにそれを行うのか」という理念、次に「何をするのか」という方針、「どのように行うのか」という施策が必要である。理念を中心にとらえ、その理念を実現するための方針があり、さらにその方針を実現するための施策があると考えている。

本校では、株式会社グラグリッドの三澤直加氏及びグラグリッド社の皆様のアドバイスを受けて、国や学習指導要領の指針に沿いつつ、これからの社会に対応するための教育ビジョンに乗り出した。

(1) 柏木小学校のビジョンをつくる5つのステップ

step 自分たちらしさを
1 検索する

自分たちらしいビジョンや戦略を具体化するため、「これは自分たちならでは」を客観的に受け止め、自分たちのアイデンティティと向き合う。

step 未来の社会像をイ
2 メージする

予想される未来像から、変化していく資質・能力を明らかとして、生活や社会の中で活用する力を精査していく。

step 未来の自分たちの
3 役割を見つける

未来の社会像と自分たちらしさを掛け合わせることで、さまざまな視点から自分たちの社会的役割を見つけ出す。

step 未来の風景を描き
4 出す

これまで検討してきた要素の関係性や意味を読み解きながら統合し、多くの人に伝わりやすいビジョンを提示する。

step 試しながらアップ
5 デートする

実現に向けて戦略的に計画し実行をし、さらに得られた知見をもとにビジョンをアップデートする。

「正解のないビジョンのつくり方」三澤直加氏著

私たちは、以上の段階を踏んで、研究に取り組もうとした。なぜこうしたビジョンをつくっていくのかという点については、そもそも各学校は、それまで今後の教育に向けて取り組んできた経緯が違い、また、子どもや保護者、地域の特性も違うことに起因する。やみくもに、これから求められている教育を指針としても、通る道筋も違えば、スピードも違うし、発揮される個性も違う。まずは自分たちの立ち位置を知ることから、ビジョンを組み立てていこうとする考え方である。ビジョンそのものに無理があったり、役に立たないものであったり、形式的だけで実を伴わないものであったりすることを避け、私たちにとって最適と言えるビジョンを構築していきたい。

(2) step 1 自分たちらしさを検索する

はたして自分たちらしさとは、柏木小らしさとは何であろうか。この場面でアドバイスを受けたのは、自分たちの情報を集めるということである。集めたい情報とは、「哲学」「歴史」「資産」の3点ということだ。

「哲学」というのは、柏木小学校が大事にしてきた考え方である。これまで大事にしてきた目標や考える基準になってきたこと、これだけは避けたいと考えていることなど、柏木小学校の教育課程の中に存在している「言葉」に注目する。対外的に「こんな風に見せたい」という言葉でなく、「こういう学校でありたい」という信念のようなものを見つけていくことが大切となる。

「歴史」とは、現在取り組もうとしている研究のターニングポイントについての情報であるということだ。これまでの取り組みや研究実践を思い返してみることで、自分たちの中にある経験や思いが見えてくる。

「資産」とは、柏木小学校にある価値あるもののことを指す。有形無形に限らず、特異性の高いものをあげることが必要である。具体的な取り組み自体もそうであるが、自分たちがもっている特別な技術やノウハウ、思考法なども資産と言えるらしい。さらには、施設や人脈、ネットワークなども資産となるということだ。

これらを踏まえて、まずは柏木小学校らしさとはどういったことなのかを、情報を集め、進むべき方向を見定めていきたい。

①私たちの学校が手がけはじめたこと

この点については、本研究を始めた令和5年度及び令和6年度の学校経営方針に答えを探した。令和5年度及び6年度ともに、子どもが自律して学ぶ主体者となることを柏木小学校では目指している。その中で最も重要視しているのは、子ども自身の意欲である。

前の頁でも示したが、令和5年度の教育活動の重点は、

子どもが、社会への**主体的な**参画者となり、知への**主体的な**創造者となり、自己の**主体的な**形成者となっていくための教育活動を展開する。

であり、教育の主導者は子どもでなければならないと主張している。また、教師側にも教育指導の変革が求められ、同学校経営方針に「学びの変革」として、

☆なぞる学びから創り出す学びへ

☆学び方を学び、自ら探究する自律する学びへ

という指針を示す同時に、具体的な授業プランとして以下を全校をあげて行うこととした。

- ・子ども個々が意図をもって学ぶ、自ら学ぶことを明確にした授業
- ・興味・関心と意欲を高め、知的好奇心を育てる授業
- ・友達と学び合い、自らの考えを広げたり深めたりする授業
- ・振り返りの時間をとり、学んだことを積み重ねる授業

本校がまず行ったことは、学習の主権を子どもにわたし、教師がファシリテーターとなることであった。「教え」から「学び」への構図の転換であるが、教師には、子どもに任せても道に迷うだけでうまく進展はしないとか、そもそもそういった能力に長けていない子も多いと感じている教員が多かった。「育てたように子は育つ」というような例えがあるように、自分では学習を組み立てられないように育ててきているのは、教師自身であるということに、まずは対面する必要があった。

②従来型の授業のアンチテーゼとしての「まなびのマルシェ」

そこで起爆剤として用いたのが「まなびのマルシェ」である。この取り組みは、いつもは小食であり食事には興味を示さない子も、ホテルのバイキング料理では、目を輝かせて自分か

ら食べてみたい料理に挑戦するのを見て、学習でも同じことができないかと思い、(株)グラグリッド社とともに、プランを練ったものである。

まず教科書に頼らないという特色は、モデルとなるものがないこと、過去の事象や経歴から学ぶのではなく、あくまでも人から伝わり、学び方や受け取り方の強制はしないこと、極端にお子様ランチ的に子どもにかみくだかないこと等を条件にしてもらった。運営をしていただく(株)グラグリッド社は、応募時に審査やウェブでの面接を行い、子どもたちの成長にそぐわない主義主張の入った方にはご辞退いただく等の配慮をしていただいた。

令和5年度には3回の「まなびのマルシェ」を開催したが、一日に3コマの冒険者(出演者を様々な人生の冒険をしてきた人ということでこのように称することになった)の授業を選んで参加をするスタイルをとった。1年生から6年生まで、各自が選びたい「まなび(冒険者)」を選び、参加をする。毎回一週間ほど前に、出演者のプロフィールと内容の予告が掲示物と配布物で案内を行う。それらには、QRコードが記されており、冒険者の活動やプロフィール等のリンク先とアクセスするようになっていて、子どもたちの多くは、事前に冒険者の選択をしていた。しかし、もともとは市場のようにぶらぶらしながら選ぶのもよしとしていたため、どこに行こうか決めかねているうちに、定員に達して入れないといったあぶれる場合もあった。それでも、予定調和なしに子ども自身が選んで学ぶことを大切にしたい。各教室では、冒険者によって、スタイルは違うものの、これまでの生き方の経緯と挫折、そして成功といった内容で、6年生の隣で1年生が同じ話を聞くという展開、その後には冒険者が設定した体験を行うという流れではあった。

はたして子どもたちは、普段の教員の授業とは全く違う表情と姿勢を見せた。子ども自らが選んだとは言え、冒険者のメッセージを受け取る子どもたちは真剣で、また体験の場面では心底たのしんでいる様子が見受けられた。冒険者は公募したが、名だたるデザイナーや陶芸家、元オリンピック選手や経営者やIT系企業の創業者等の方々が名乗りを上げてくださり、そのほとんどは令和6年度の「まなびのマルシェ」までご協力いただいている。教員ではないので、教え方や子どもとの接し方は慣れていないが、それでも伝えたいという情熱や自分が紡いできた生き方には迫力があり、子どもだけでなく、参観する教員や保護者にも強いインパクトを与えた。

教科書に頼らない学習、冒険者募集のちらしには、「ICTの高度発展と、AIの爆発的な進化に伴い、

「知識」はどこにいても検索し習得できるようになった。そしてこれからも、生き方もより多様化され、子どもたちは自分たち自身で自分の人生をつくり出していくことが求められるようになった。しかし、小学校ではその変化について行けずに苦しんでいる。教科書に載っていることを教え、それを評価していくスタイルから逸脱できないのだ。」

とある。これは、私たちの悩みを(株)グラグリッド社が引き受けたかたちとも言える。



まなびのマルシェタイトル



「まなびのマルシェ」の募集ちらし

③子どものニーズを引き出し、それに対応するシステムの変更

教師には教え方や学ばせ方に工夫があって、個性が認められるのに、子どもどうして同じ学び方を強制され、学び方に個別最適化が図れないのであろうかということが、常々疑問であった。少なくとも、子ども自身が学び方を選択して学習できる環境を整えたい。そのために、子どもたちが自身で学習法を選べるコース別学習を設定した。

本校では3年生以上の国語、算数、社会、体育でこのコース別学習を実施している。どのような学習でその単元を進めていくのかということ子どもにあらかじめ告知し、子どもはそれを選んで学習に臨む。従っていずれの学年も、これらの教科学習は、学級をまたいで同時に行い、教師による成績などでの区分けは実施しない。本来であれば、理科も実施したかったが、理科室が本校は一つしかないため、理科については通常の授業形式となっている。

こうしたコース別学習を計画し、子ども自らが学習計画や学習課題を立てて進めるコースと、教師とともに併走しながら進めるコースとに分けた指導では、従来の授業構想ではない独自なものが必要となり、教科担任制度を導入した。令和5年度は、5年と6年の中で、教科担任とコース別学習を併用した。さらには、令和6年度では、3年生以上に拡充した。

本校では全学年が2学級であるため、中学年及び高学年ブロックは4人の担任がいて、その他に算数指導工夫改善教員（算数のみ指導）の5人で正規教員を構成している。そこに家庭科のみ、英語科のみを担当する講師等、単一教科を指導する講師がいるため、指導教科を集約しやすい状況にある。中学年と高学年ブロックで話し合い、多くは2教科を担当して学級や学年をまたいで指導を行っている。以下に例を示したように、教科指導はブロックごとにチームで行っている。つまり、指導は自分の学年だけではなく、同じブロック内の子どもたちに対して

6年担任  国語 算数 社会 社会 ※道徳、学級活動は各担任	5年担任  国語 体育 体育 算数	算数 理科  正規教員	英語 家庭  時間講師
--	---	---	--

行っている。このような指導体制は、チームで同ブロックの子どもたちの指導を行うことで、専門性の向上にもつながっている。

④柏木小学校の現在を知る

ここまで主に本研究を始めた令和5年度のことを中心に述べてきた。それでは、本校の特徴的な取り組みについて、子ども及び保護者はどのように感じているのか、5月中旬に記述式のアンケートを実施した。結果のうち上位の多数あった回答は以下ようになった。

問い 柏木小学校の取り組みから、他校に比べて、強みや誇りととっていい部分は？	
子どもたちの回答	保護者からの回答
○まなびのマルシェや屋上農園など、他の学校にはない取り組みをしている。 ○マルシェや学習の場でいろいろな人と会える。 ○放課後部活動がある。 ○教科担任制がある。 ○コース別学習で、自分の力に合わせた授業を選択できる。	○まなびのマルシェや放課後部活動など、第三者機関を、授業の枠を超えた教育プログラム ○未来を見据えた学校教育 ○子どもたちの20年後、30年後につながる生きる力をつけることを目的とした授業

好意的な意見が上位で多数を占めた反面、これまでのイメージしやすい教育と乖離している分、柏木小学校ならではの取り組みが成果を上げているのかは不安であるとする保護者の声もあった。

(3) step 2 未来の社会像をイメージする

世の中には、たくさんの未来予測と呼ばれるものがある。20XX 年に宇宙旅行が一般的になるとか、20XX 年にコミュニケーションロボットが各家庭に普及し、家事や介護の代行をしてくれるなど、さまざまな現象の変化や技術の進化の傾向を分析し、未来の姿が割り出されている。これらは、過去の傾向から未来を予測したものである。しかし、変化が激しい現代においては、過去の傾向から未来を予測することには限界が生じる。では、私たちの教育現場では、どのような社会を予見し、それを教育に反映していけばよいのであろうか。2022 年 1 月 5 日に日本経済新聞社が、2030 年の近未来予測を以下のようにまとめている。

TOPIC 1 「もうひとりの自分」と生きる

「テクノロジーは『私たちが誰か』を変えるのではなく、私たちの良いところも悪いところも『拡大』する」(ティム・クック、米アップル最高経営責任者)

デジタルの世界と現実がつながり、行き来しながら生きる。30 年には SF 小説や映画で描かれた世界が現実のものになるかもしれない。そこで活躍するのはデジタルな分身である「もうひとりの自分」だ。メタバースと呼ばれる仮想世界で働き、買い物をし、イベントに参加する。ゲームなどで使われてきた仮想現実(VR)や拡張現実(AR)の技術を使った新しい世界は日常生活の一部となる。

TOPIC 2 「捨てない経済」がやってくる

「問題を引き起こしたときと同じような意識では、問題解決はできない」

(アルバート・アインシュタイン、米物理学者)

新しい資源を使わず、廃棄物を出さない「循環経済」への転換が急務だ。1970 年代に「100 年以内に資源が枯渇し成長は限界に達する」と指摘された懸念が現実のものになりつつある。未来を変えるカギは資源を使わずモノを作る技術、そして政府、企業、人々の意識と行動の変化だ。

TOPIC 3 社会を動かす「見えないお金」

「アイデアが歴史をつくる」(ジョン・メイナード・ケインズ、英経済学者)

「見えないお金」は社会や経済を一変させる。20 年に世界初の中央銀行によるデジタル通貨(CBDC)がバハマで発行された。30 年までにはさらに多くの国・地域が続く見通しだ。お金がデジタル化されると低コストで瞬時に送金できるようになる。個人情報もお金にひもづけられるため、国は課税や分配などの政策を迅速に打ち出せる。新興国など銀行口座を持たない人にサービスが行き渡る期待も出ている。

TOPIC 4 一生、学び続けよう

「21 世紀に重要なただ一つのスキルは、新しいスキルを学ぶスキルだ」

(ピーター・ドラッカー、米経営学者)

仕事や学びは大きく変わる。米マッキンゼー・グローバル・インスティテュートによると、30 年までに世界で 4 億～8 億人の雇用が自動化によって失われ、うち現役世代の 4 億人近くは新しいスキルを身につけ、新しい仕事に就く必要があるという。学歴や既存のスキルだけではなく、「一生、新しいスキルを学び続けられる」人材を育てる仕組みづくりが欠かせない。

TOPIC 5 夏休みは宇宙旅行で

「何が不可能なのかは簡単には言えない。昨日の夢は今日の希望であり、明日の現実なのだから」(ロバート・H・ゴダード、「ロケットの父」と称される米発明家)

宇宙はぐっと身近になる。21 年には米アマゾン・ドット・コム創業者のジェフ・ベゾス氏らが民間人による宇宙旅行に成功した。今後 10 年、さらに多くの企業や個人が旅立ち「宇宙の大航海時代」が幕を開ける。米スペース X を率いるイーロン・マスク氏はロケット打ち上げのコストについて「1 キログラムあたり 10 ドルまで下げられる」とみる。ブロッコリーや肉を買う値段より安い。宇宙を身近に感じる時代はそう遠くない。

引用：日本経済新聞社刊「2022 日本の論点」

以上のトピックからわかることは、よく言われているように、「学ぶと言うことは、覚えているか、知っているか、計算ができるかといった単純な能力ではなくなってきている」ということである。これらの中で、本校が力を入れるべきというか、直接的に関与できることは、

TOPIC 4 一生、学び続けよう

「21世紀に重要なただ一つのスキルは、新しいスキルを学ぶスキルだ」

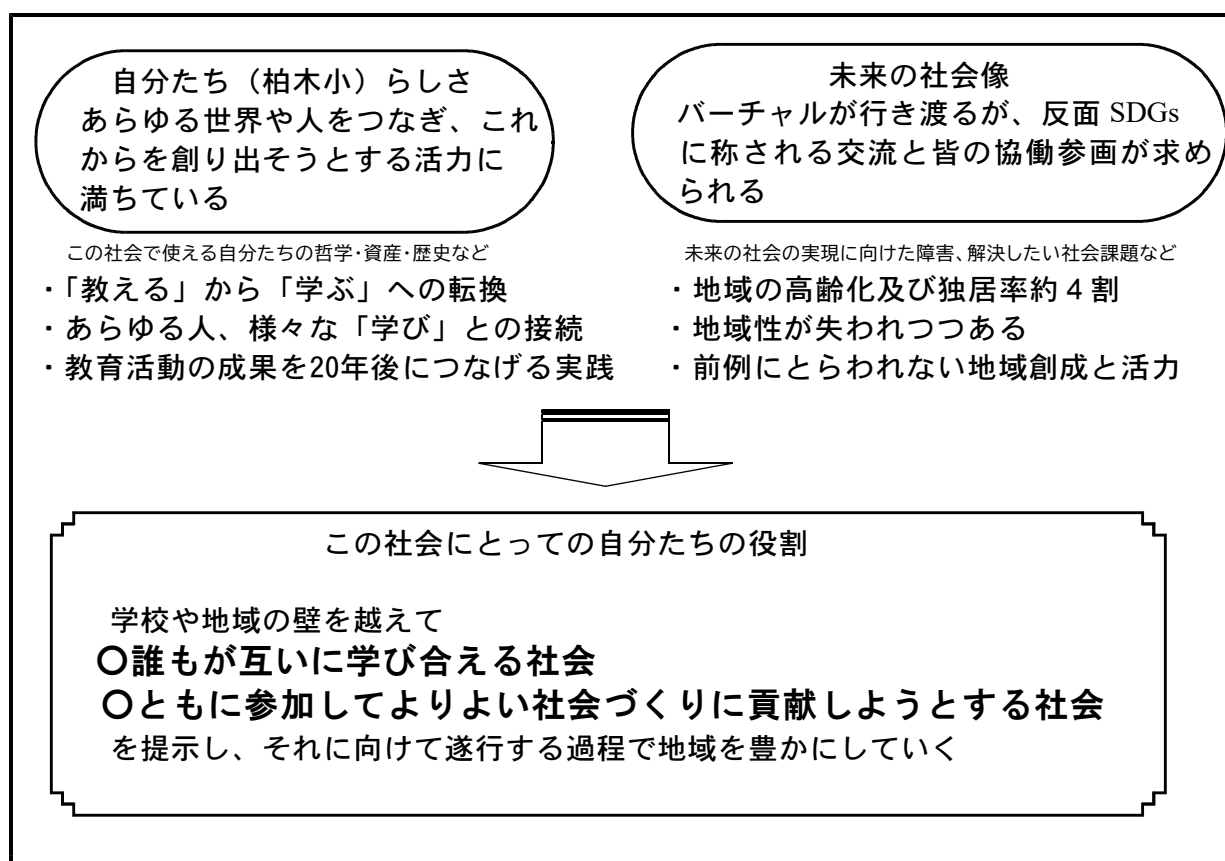
(ピーター・ドラッカー、米経営学者)

という結論につながった。現在の日本において、リスキリングといわれる学び直しは急務とされている。たとえばデジタルスキルをもつ国民の割合は、主要先進国の中でも圧倒的に少ないということだ。ただし、予測が困難な現代においては、現在の状況ですら変動の可能性が出てくる。要は、常に学び続ける意欲と能力をもたせ続けられる契機を小学校でもつくっていくことが必要であるということが明らかとなった。

(4) step 3 未来の自分たちの役割を見つける

むずかしい未来の予見ではあるが、私たちが教科指導を行う際にも、ただ単に教科書をなぞるのではなく、子どもたちが生き生きと未来を生活していくための資質・能力の育成に努めなければならない。何度か述べてきたように、ただ単に知っているというような検索できてしまう知識は、溜め込むことに意義を失っている。これまでのように、地域や保護者の助けを待って、定番の活動を繰り返すのみで、私たち学校の役割を果たしていると言っているのであろうかと考える。

そこで私たちは、ここ新宿の未来の姿をイメージしつつ、そこによりよく関与する自分たちらしさを見極め、この社会にとっての自分たちの役割を考えてみることにした。変化していく社会への対応だけでなく、私たち自身が社会にアプローチをしかけ、よりよい社会づくりの参画者となっていくことがねらいである。以下にまとめたのが、本校の役割発見シートである。柏木小学校の役割



(5)「柏木ライブ」という試み

社会にとって、私たち学校のできる社会貢献なり社会参画なりを考えた際に、令和5年度末に計画をしたのが、「柏木ライブ」である。もともとは、起業型探究プロジェクトという理念が先にあり、現在の6年生がネーミングをつけてくれたものである。本校では「まなびのマルシェ」がたいへんな盛り上がりを見せ、学校内外に周知もされた。このまま続けても、より好きな分野の開拓や深掘りにはいいかもしれないが、むしろ絶頂期となっている時点でいったん小休止して、マンネリズムを防ごうと考えたのである。その代わりに、「まなびのマルシェ」をはじめ、様々に本校で手がけてきた教育と社会とを接続して、学びの場を校内から一気に社会にまで広げてみようと考えたのである。幸いにして、様々な外部との連携した授業や「まなびのマルシェ」を通じて、本校の教育の考え方や指針に賛同してくださり、協力を申し出てくださった方も多く、保護者の中からも協力者が得られそうであったため、実施に移すこととした。

「柏木ライブ」とは何か。一言で言うと、子どもたちが中心となって会社をつくり、その運営を通して、町の人々を豊かにしようとするプロジェクトである。地方の特色のある実践をしている有名な学校を訪れると、生き生きした実践を見ることがある。ある地域では、町の産業が染め物で、それは近くを流れる川があってこそその産業で、その川を大切にしながら暮らしている人たちがいて、みんなが協力し合いながら暮らしている。子どもたちは低学年では、川や自然のことを体験から学び、中学年では町の人たちと関わり、町のことや産業のことを知り、高学年は自分の町をもっと生き生きした暮らしの町にしていこうと携わっている。産業などの特色のある町で暮らす子どもたちには、自分たちの暮らす町への愛情を呼び起こし、よりよくしていこうとする心情を育む、次代の人材の育成を担っている。ストーリーとしては、地域の特色を生かすという点でわかりやすく、納得のいく取組である。

柏木小に目を移したとき、私たちの特色って何だろうか。商業都市であり、国際都市であり、様々に流動する人材、何が正解で何が不正解なのかという判断も、個々の価値観によって大きく左右するのが現状である。私たちは、ここ柏木小学校で、様々なチャレンジを重ねてきた。大まかにいうと、未来との接続、学校と地域、さらには領域を超えた人材の活用によって、子どもたちの発想や生活を豊かなものとしてきた。その一つが様々な生き方をしてきた方から学ぶ「まなびのマルシェ」、もう一つは、地域も含めた人材を活用して、子どもたちの可能性を高める放課後部活動「スタート」である。

柏木ライブは、特別支援学級（柏葉学級）を含め、3年生以上で主に校外に営業や活動の拠点を置いて取り組む。また、1年生と2年生は、校内での活動を中心にして、校内や地域や保護者を巻き込んでの活動を計画する。ここでは、

★活動時期は2学期～3学期

- ・基本は、毎週金曜日の5時間目と6時間目（低学年は5時間目のみ）
- ・外部での営業や活動が土日にある場合もある。（保護者に引率を依頼。土日の活動については、参加は可能な家庭のみ。）

★ライブの起業は全部で7つを想定

- ・起業によって、社会や町を元気にしていくプロジェクトを企画、参画していく。
- ・一部は今年度法人化、可能であれば全部を法人化していき、柏木ライブとして登録と運営をしていくことをめざす。
- ・起業に伴い、さまざまな協力者や支援者を募集している。保護者や地元の住民の方、会社や自治体、研究機関等の協力を仰ぎ取り組んでいる。
- ・まずは、リーダーとなる6年生が、起業する分野を選定した。その後、会社運営のビジョンづくりや経営のスペシャリストから研修を受けて、8月下旬に3年から5年生を社員として募集、9月から活動を開始。
- ・各グループは短期的には利益を追わないが、準備が整ったグループから、収益を上げるような取り組みやスポンサーを取ることを推奨している。それについては、外部のアドバイザーや担当教員の間で調整を行っている。

アートプロジェクト



協力者 山口典子氏
(デザイナー、アート部講師)
○企業や団体の支援を受けて作品発表や海外を含めた交流を幅広く展開

新宿再開発プロジェクト



協力者 東京都建設局
(新宿駅西口再開発担当)
○新宿駅西口再開発に参画
○現場の視察、立体映像 XR を用いての、イベント参加と(10/18~20)参加者に向けた、絵等や XR 画像の制作
※絵は工事壁にプリント
○ 10/19 の小田急ハルク前でのマルシェに参入

野菜の森プロジェクト



協力者 奥田慎一郎氏
(起業支援、食とスポーツ)
○新宿区唯一の農家として登録
○野菜の栽培と販売を通して新宿を活性化
○販売先は、各種イベント、サブスク方式の飲食店
○目標収益 50 万

広告代理店プロジェクト



協力者 クリアソン新宿
(プロサッカークラブ広報部)
○広報や営業の手法をクリアソン新宿の広報宣伝の方から学ぶ。まずは、クリアソン新宿の知名度や愛着度の向上をめざす。
○サッカー場でのファン誘致やファンサービスのお仕事
○できれば宣伝企画等への協力

マスコミプロジェクト



協力者 武信 考氏
(映像ディレクター)
○柏木小学校の取組を取材
○ youtube、新聞、映像媒体等で発信や販売
○まなびのマルシェ冒険家の仕事や活動現場の取材(承諾済)
○柏木小学校や関係団体(クリアソン新宿等の PR 始誌や動画を制作)

エンタメプロジェクト



協力者 戸室 政勝氏
豊田 明氏
○ダンスや演劇等、パフォーマンスを通じて、町の人たちを元気に
○校内だけでなく、外部での発表、マスコミプロジェクトなどとのコラボ

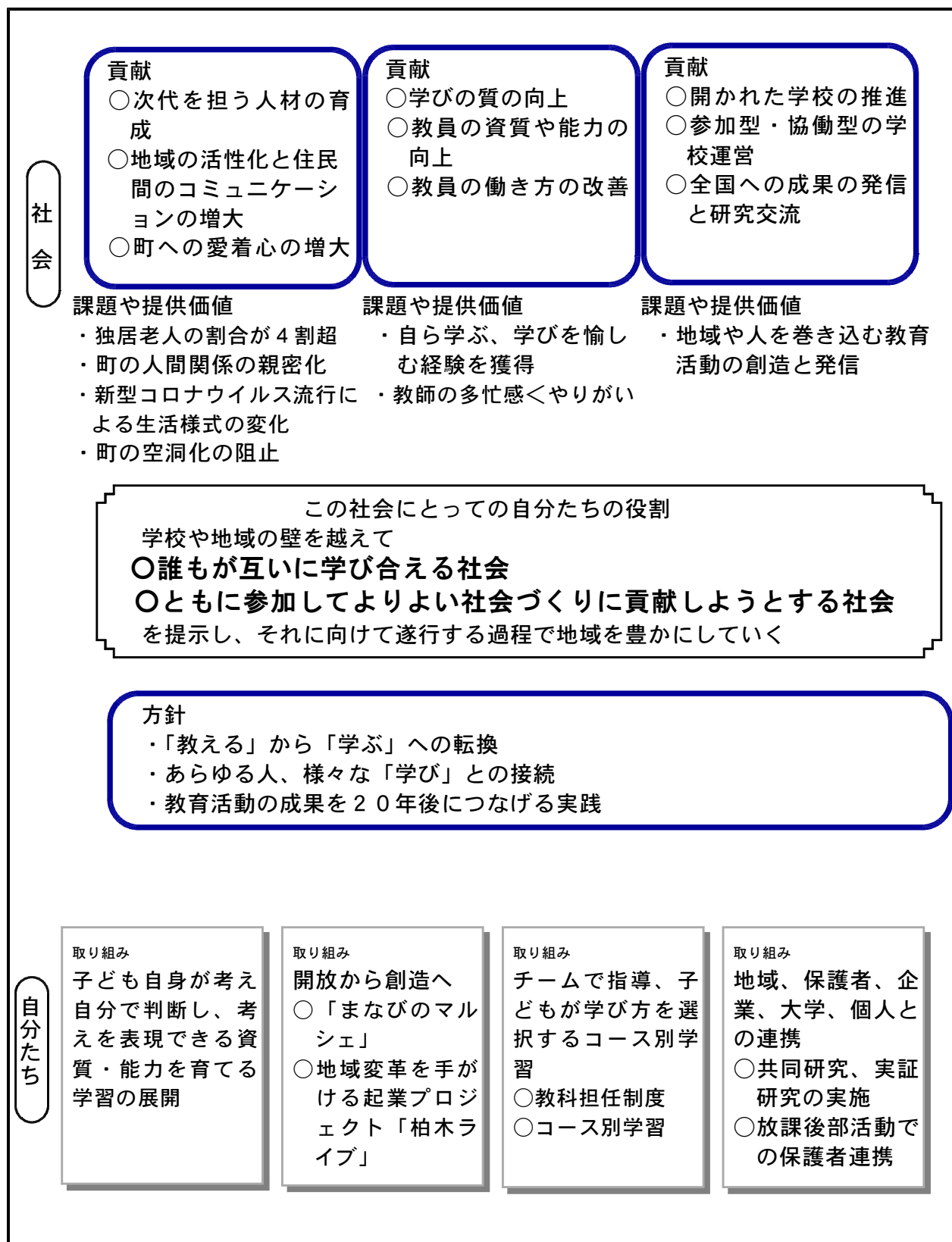
ガイドマッププロジェクト



協力者 柏木地区に暮らす人たち
○柏木地区に暮らす人たち取材しながら楽しい地図にまとめる。柏葉学級全員の取り組み

(6) step 4 未来の風景を描き出す

私たちの学校は、小学校の学習内容を身につけられるように尽力すれば、役割は終わりであるとは考えていない。むしろ、小学校を卒業した後に、本校で取り組んできた教育の成果が問われると考えている。そこで、「自分たちがつくりたい未来に及ぶビジョン」を以下にまとめてみた。



Ⅲ研究の具体化

1 教師に求められている指導力

今回の本校の取組で焦点となったのは、教科の指導の場合、各教科の本質的な内容を精選し、それを深く豊かに学ぶ学習を教師が見通して指導につなげるカリキュラムの構成という視点である。すなわち、「教科の本質とは何か」と言えば、「教科等ならではの見方・考え方」につながる道筋の学習を指し、また獲得した「見方・考え方」が発揮される学習を言うのではなかろうか。

とすれば、教師がゴールや行き先もはっきりせず、教科書に載っている順番に、「主体的・対話的で深い学び」を場当たりのにあてはめるだけでは到達は望めない。授業の前にあらゆる準備をしておかなければならず、その準備とは、「授業の設計(デザイン)」である。

これからの教師に求められている指導力は、子どもの学びを軸に授業を設計(デザイン)する力、それらを効果的に運営(マネジメント)する力にほかならない。

主体的・対話
的で深い学び
の授業をめざ
そう！



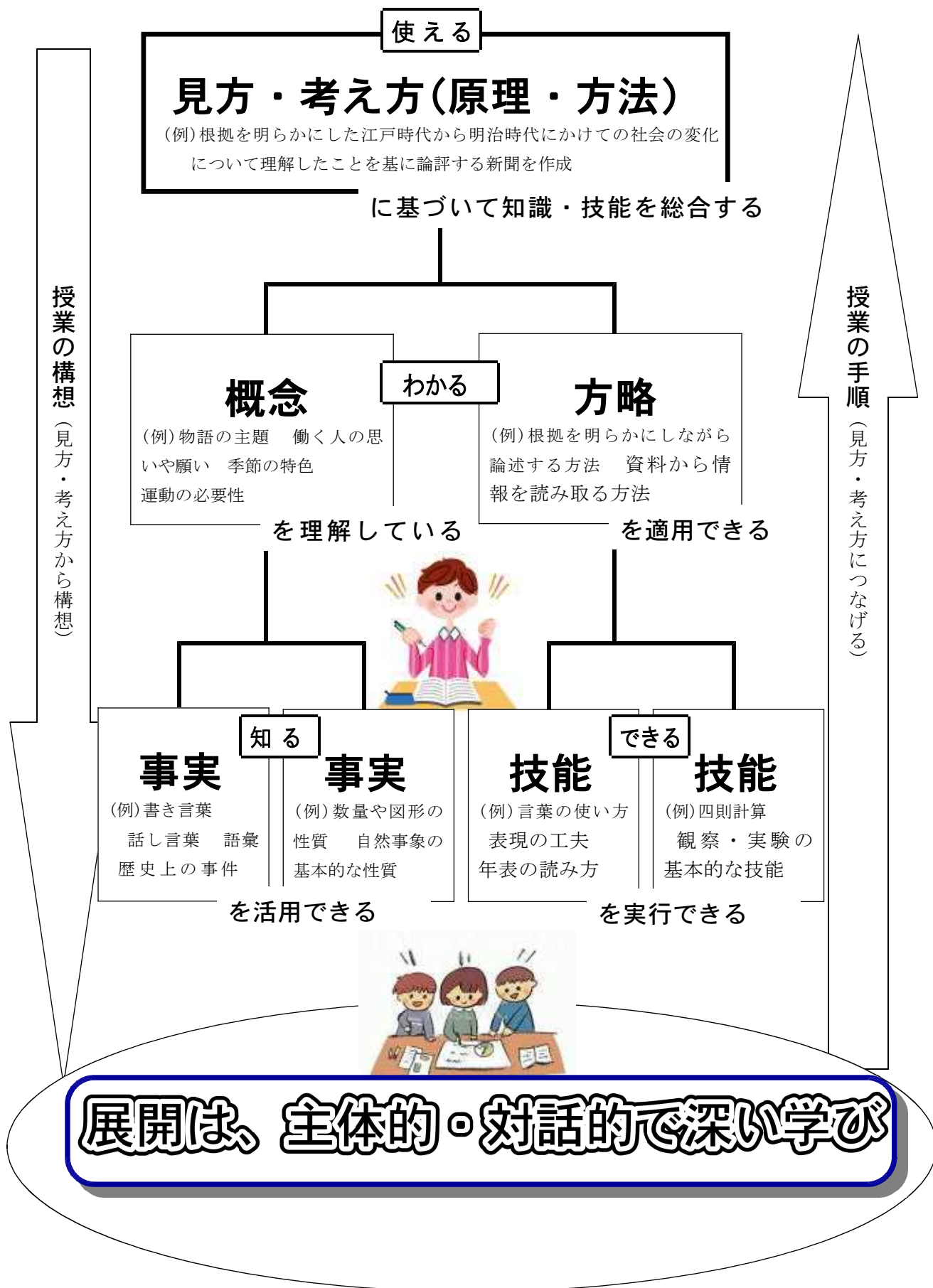
2 ゴールから考える授業

往々にして陥りがちなのが、まずは知識を覚えさせて、それから技能的な部分を指導することの繰り返しで、順番に授業を組み立てていこうとすることである。ところがこれでは、教科固有の「見方・考え方」まで届かずに時間切れとなる公算が大きい。形骸化した指導では、現状の毎時間断片的に教科書に例示された思考活動を積み重ねるのみとなって、学びを深める必然性や時間的余裕が生み出しにくい状況となってしまう。

教科の指導を進める上で大切なことは、本質的な内容(概念、方略、見方・考え方)を中心に、知識の類型(次頁の図)を念頭に置きつつ学習指導要領の目標・内容を整理することが重要となる。これらは、深く学ぶべき内容を精選する出発点となる。

とは言っても、知識や技能、そして学ぶ方法を指導せずに、子どもに丸投げにするということではない。また、「主体的・対話的で、深い学び」が直接的な目的となるわけではない。あくまでも先にくるのは、その教科において培った「見方・考え方」によって、「見方・考え方」を発揮する場面、「学んだことをどう使うか」ということを逆算して構造化を図る必要性があるということである。その目標に迫るには、どうしても学習の中心は、「見方・考え方の発揮」となるため、全てを手取り足取り教師が面倒をみるのではなく、子ども自身に「自ら学ぶ」意欲をもたせ、主体的に関わらせる学習が必要となってくる。子どもたちも、「深い学び」につながる「見方・考え方」が発揮される学習経験を楽しむことができれば、学習の意味や道筋も理解することとなる。

学び方を学ばせる学習への移行（教師の側から構築する授業）



3 学びのプロセスの質を高める授業改善の視点

これまで述べてきたように、教師が「見方・考え方」を発揮し合い、授業がどんどん盛り上がって深めっていくような見通しを教師がもち、意図的・計画的に授業を構想し組み立てなければ、本来の授業改善にはつながらない。しかし、一方で子どもはそれでは通じない。行き先もわからず、ただ教師の言うがままに連れて行かれ、その場で、考えや意見を求められてもそれは無茶という話である。そもそも授業は、教師のみがつくるものではない。教師と子どもが、授業というストーリーを共有する必要がある。そこでまず「主体的・対話的で深い学び」を分析し、職員で共有し、授業改善につなげることにした。

(1) 私たちが求める「主体的な学び」とは何か

授業に「主体的に取り組ませる」「主体的に考えさせる」などと、古くから私たちの現場では、常に耳にし、意識をして授業に取り組んできたつもりである。では、「主体的」とはどういう姿を言うのであろうか。

中央教育審議会では、「主体的な学び」について以下のように説明を行っている。

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び

ここからわかることを分解していくと、

主体的な学び実現の条件

- ①興味や関心をもっていること
- ②見通しをもっていること
- ③粘り強く取り組んでいること
- ④学びの振り返りができること



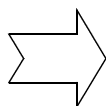
元文部科学省視学官の澤井陽介先生は、著書『授業の見方』の中で、「授業の冒頭、子どもたちは見通しをもつことが重要である」と述べられている。以下、重要と思われることをまとめてみた。

「主体的な学び」を実現するために…

キーワード1 授業ストーリーの共有

★教師の指示を待っている限り、子どもの思考は活性化しない

先生今日は何を教えてくださいのかな



「先生今日は～を調べるんですよね」
「今日は～について話したい」

- 指導計画(単元計画)は授業の設計図である。設計図に描かれた内容を子どもと共有することが大切となる。
- 指導計画そのものを共有するのではなく、それを作成する上で練り上げた授業展開を共有する。

教師側の視点

- 授業には学習問題がある。
- その学習問題を解決することが学習の目的である。
- それでは、学習の目的達成のために、何に着目し、どう学んでいけばよいか。

子ども側の視点

- 子どもたちの疑問が、みんなで解決していくべき『学習問題』となる。
- 学習問題の意味を自分なりに把握する。
- 予想を出し合って見通しをもてるようにする。
- みんなで力を合わせて調べたり考えたりする。

上記のような学習問題や学習計画(授業ストーリー)をと一緒に考え、子ども自身が見通しをもてるようにする。そこに学習の連続性が生まれる。のみならず、子どもたちは、自分の「学ぶべきこと」「考えるべきこと」を知ることができ、それが学習への主体性をもたらす。

キーワード2 振り返りの大切さ

★学習したことを振り返って、自分の学びの質と内容を自覚できるようにすることが重要
○振り返ることによって、子どもは「私たちは何を学べたのか」「どのように成長できたのか」「それでもなお、わからなかったことは何か」などをつかむことができる。こうした知識・技能が、次の学習に向けてさらに問い続ける「学びに向かう力」を鍛える。

毎時間の学習問題(課題)への振り返り

「なぜ～だろう」→「なぜなら～だからである」
「どのように～しているのだろう」→「～のように～している」
☆授業を通して獲得される概念的な知識(特色や意味などを説明する知識)やその理解状況を表現させたい。

毎時間の学び方への振り返り

「今日の話し合いで参考になった意見は～」
「今日は～を調べてみたから～がわかった」
「次は～を調べてみたい」
☆自分の学び方や学んだことの意味の自覚を促したい。

単元の学習問題やテーマへの振り返り

「今日の学びから単元の学習問題に迫るキーワードは～」
☆「私は…」という主語から、「私たちは…」「地域の人たちは…」「これからの日本の産業は…」と、個から全体へと、見る目線を上げる(ルックアップする)ような、多面的な視野で、多角的に社会を見つめたり、未来を考えたりする子どもを育てていきたい。

…子どもたちが「学んだことで成長できた」「もっと学んで成長しよう」と背伸びをしている姿が、私たち教師が求め続けてやまない

「主体的な学びの姿」なのである。

(2) 私たちが求める「対話的な学び」とは何か

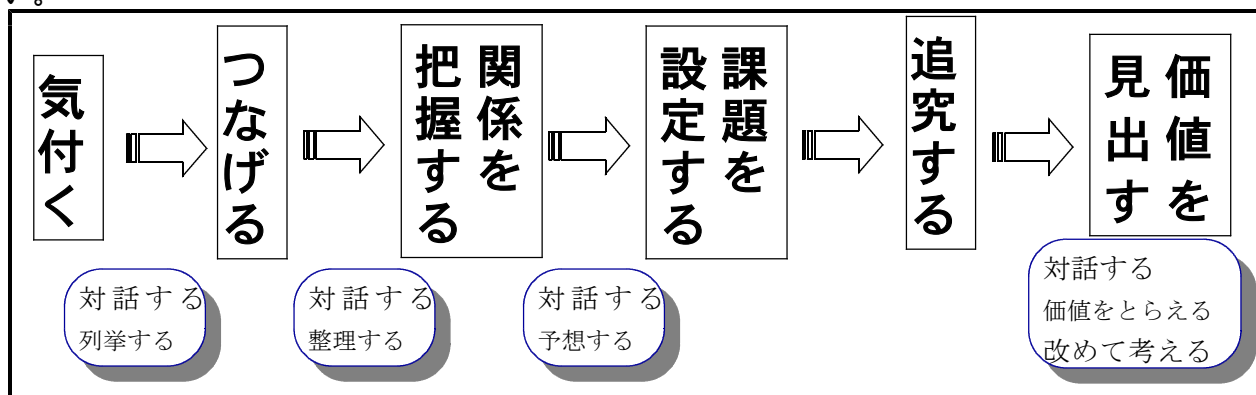
学習指導要領においても、教科の縦割りを越えて、論理的に思考したり議論を重ねたりといった言語活動は重要視されてきた。また、本校をはじめ各校においても、「どのように学ぶか」ということに、長らく焦点が当てられてきている。アクティブ・ラーニングの手法が論ぜられる以前から、対話、グループ学習、討論といった学習活動の外形のみが一人歩きしていることに警笛が鳴らされている。「教え込み」はいけなくて、「話合っていればよい」という視点は、当然のことながら間違いである。肝心なのは、子ども自身がアクティブ・ラーナーとなっているかどうかということである。クラスにおいて、ただ座っているだけの「お客さん」が一人もいない授業、全ての子どもがそれぞれの観点や力量に応じて集中して考え、取り組んでいく授業にしていくことが重要である。アクティブ・ラーニングという言葉が出る以前から、力量のある教師は習得・活用・探究という学習プロセスを見通して授業をしたり、子どもたちに必死に考えさせる機会をつくったりしていた。そして何より、教員自身がアクティブ・ラーナーであり、子どもとともに、あるいは子どもから多くのことを学んできた。こういったことを、個人芸にとどめず、縦横に展開する必要がある。

中央教育審議会では、「対話的な学び」について以下のように説明を行っている。

子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手がかりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学び

ここで大切にされていることは、価値のある「協働」「対話」「学び」の実現であると思われる。たとえば、教科書に載っていることや数値のみを答えることに、あまり価値はない。少なくとも子ども自身が学習を自分のものとして、考えたことや予想したことなど、オリジナリティのあるものとして、それを価値付けて対話を成立させたいと考えている。

本校では、「思考を磨き、判断を的確に、表現は豊かに」というフレーズを用いて授業改善を進めている。これらをうまく機能させるための学習の手順を例示したので、ご覧いただきたい。



上記の対話は、当然のことながら授業の進展に伴って質が高まっていくこととなる。

本校においては、さらにより活発で効果的な対話を促すために、ICT機器やディスプレイ型大型電子黒板やミニホワイトボードの視覚にうったえた活用、グラフィックレコーディングや学び方を変革するノートの活用等を通して、学びや対話を「見える化」している。対話を視覚化することは重要で、その手段としては、グラフィックレコーディングは教師だけではなく、子どもたち自身が学習の場で、「ノートをつくりだす」活用を行い、自己内対話の促進に役立てている。これらの取り組みと成果については、後で述べるが、教師が発問を工夫し、対話をコントロールする他にも、子どもたち自身が対話をリードする場面を数多く設けている。要は、「なぞる学び」から「創り出す学び」への転換を全校をあげて取り組んでいる。

(3) グラフィックレコーディングについて

グラフィックレコーディングは、人の思考をわかりやすいイラストで表現するビジュアルシンキングがベースになっている。活用すると、物事を正確かつわかりやすく説明することが可能となる。

■話し合いの全体像の整理

授業では、いつ・誰が・何を発言したのかがわかりにくくなる側面がある。そもそも、正解に近い、または教師の意図することと違う意見や考えは、最悪の場合無視され、板書もされないケースはまま見られる。その結果、子どもたちはやる気を失い、同じ子どもだけが発言を繰り返す光景はありがちとなる。しかし話し合うということの意味は何だろう。様々な意見や考えが多彩に出され、もともとの予想を塗り替える展開は、筋書きのない授業となり、盛り上がり、また深い学びへとつながるはずである。

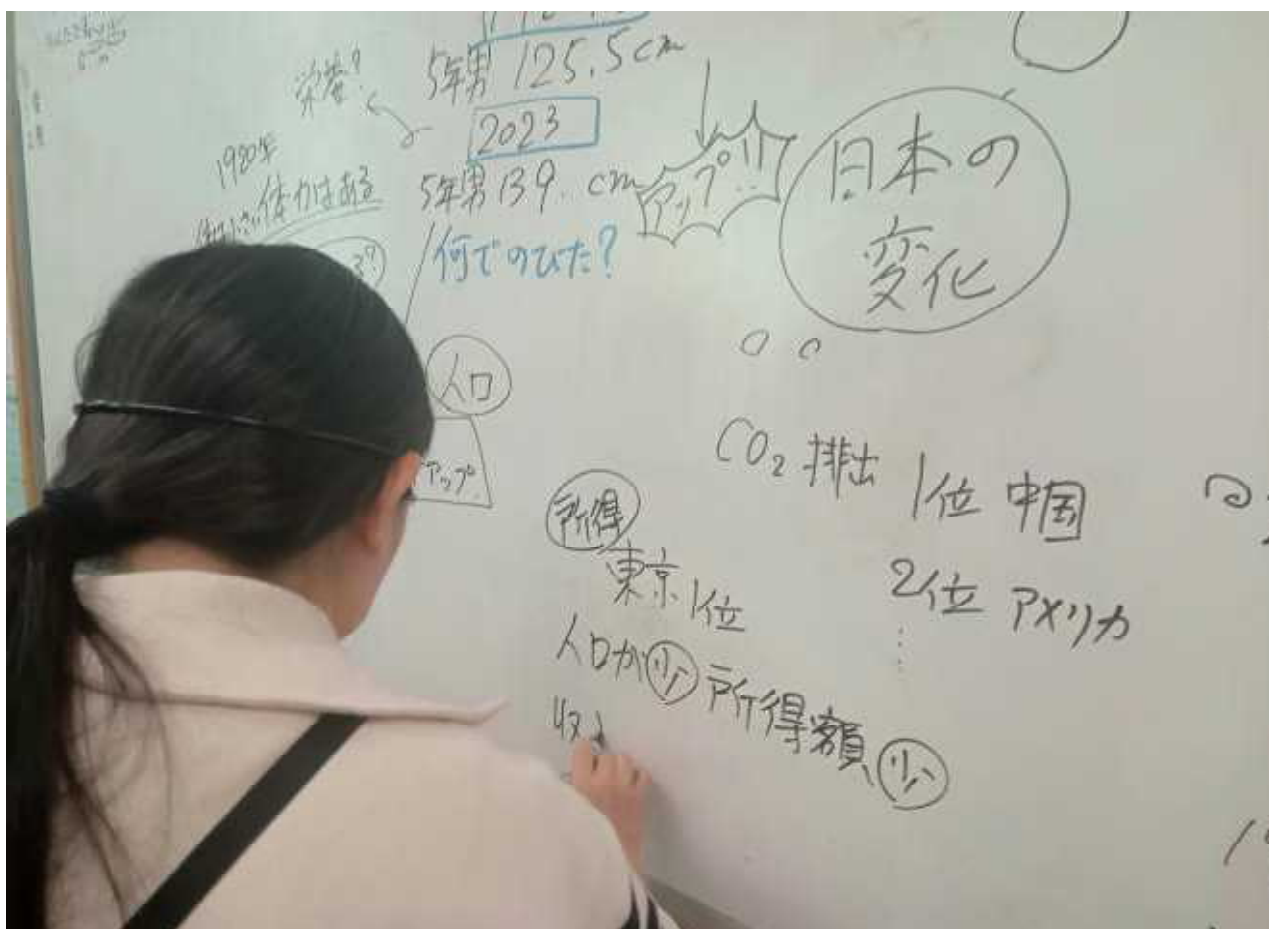
グラフィックレコーディングを活用すると、話し合いの進行に沿って要点をビジュアル化できる。どのような意見が出たのか、どのように議論が進んでいるかなど、話し合いの全体像を把握できるようになる。

また、グラフィックレコーディングには、授業記録としての機能を持たせることも可能である。ポップなグラフィックで要点がわかりやすくまとめられているため、テキストだけの授業記録に比べて直感的に伝わりやすくなる。

■議論の活性化（子どもとともに創る授業）

グラフィックレコーディングを活用すると、重要なポイントを直感的に理解できるため、参加者が意見を出しやすい環境を作ることが可能となる。

また、イラストを添えて発言をまとめると、まだ発言していない子の誘導にもつながる。みんなで創り出す一枚の絵のような思いが募るかららしい。すべての子どもたちに意見を求めることで、新たなアイデアの創出につながる可能性がある。



グラフィックレコーディングを活用した板書

(4) 創るノートへの移行

元々は「授業で板書を楽しむ技術が必要なのではないか」と考えたのがきっかけであった。板書の方法を変えるために、教師にグラフィックレコーディングを教えてもらおうと(株)グラグリッドに頼んだのが契機だった。というのも授業では、順番に子どもを指して発言させていくことがあるものの、その際、一人ひとりの子どもの発言を書き残していくやり方はあまり見られない。正答が出てようやく板書がされる。正答が出るまでの子どもたちの発言は残らない。

この状況が繰り返されると、「何を言っても結局は正しい答えしか板書されない」、「板書されるような答えを発言すればいいんだろう」と思う子どもが出てくる。そういった状況を変えるために目を付けたのがグラフィックレコーディングであった。板書にグラフィックレコーディングを導入することで、教師が一人ひとりの子どもの発言を受け止めながら可視化できる。そうなれば児童も授業に引き込まれるんじゃないかと考えた。

このことを思いつき、実践に移したのは、校長が前任校の時であったが、本校においても(株)グラグリッドとの協力と手法は続けられることとなった。当初は、グラフィックレコーディングを子どもたちとすることを依頼し、体育館いっぱいに長いロール紙を配置し、子どもたちに思う存分、テーマに合わせて描いてもらった。

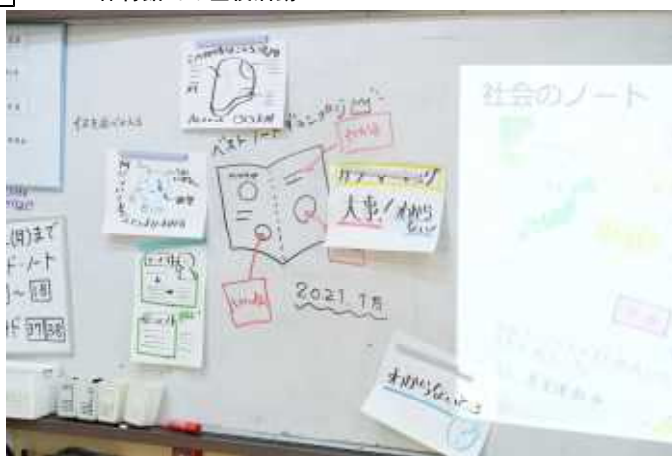
当時のことを振り返り、(株)グラグリッドの三澤直加氏は、こう語った。

一番初めに開催した「参加型体験授業」では、体育館にロール紙を敷き詰めて子どもたち一人ひとりが思い思いに絵を描いていくプログラムを実施しました。選ばれた誰かがペンを持って代表として何かを描くのではなく、皆がペンを持つことで、子どもたちが夢中になって模造紙に描いていく熱量のある状況が生まれました。それが本質的にはどういうことなんだろうと考えていく中で、「1人1本の自由」ではないかと気付いたんです。



体育館での全校活動

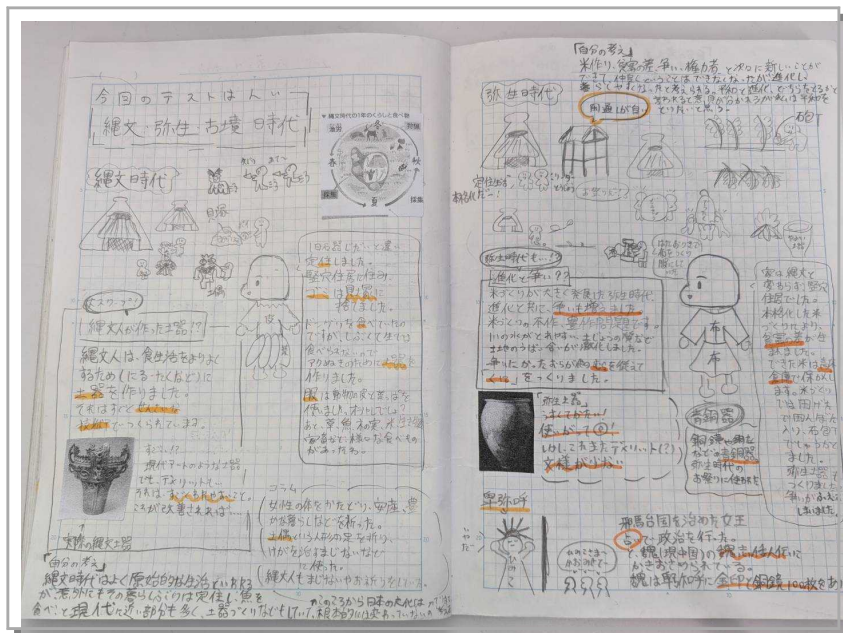
この当時、約10年前となるが、子どもたちにはグラフィックレコーディングではなく、おえかきシンキングとした。そもそもが、なかなか授業が硬直化してしまい、変革を手がけようとしたことが契機であった。少しずつ、こういった考え方に応じる教員が増えたこと、そして何より子どもたちが劇的に変わり始めたことなどにより、(株)グラグリッドの方々がミーティング内容をリアルタイムで、グラフィックレコーディングにしていく過程を見て、これを子どもたちのノートに応用できないだろうか考えたのが、後に「ノート学」という発想が生まれた。



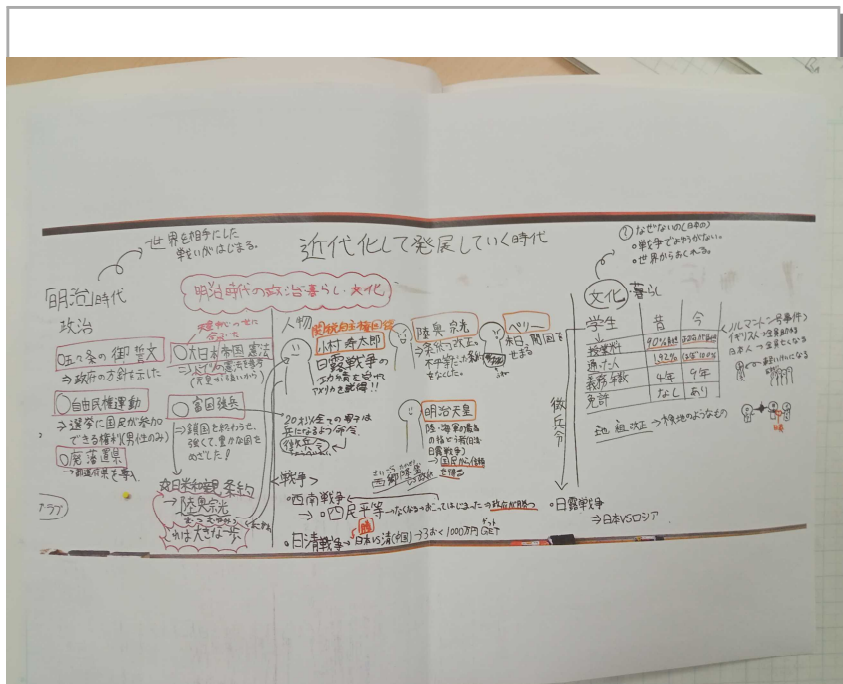
当初の取り組み

ただ書き写すだけのノートから、発想や考えを書き出し、学んだことに自分の足跡を残す「自分だけのノート」が誕生し、それを見た教師や保護者、場合によっては教科書会社の社員までもが舌を巻いた。それと同時に、とてつもない可能性を見いだした。次に示すノートを、子どもたちが次々に編み出し、授業は子どもたちの創意を生かす、学びの場となっていた。

★子どもたちのノートと反応



社会科のノート



子ども自らがまとめた板書

子どもたちのノートは、実にユニークだ。イラストが入るのは当たり前で、時には4コマ漫画も登場する。授業の中で気付いたことや考えたこと、わかったことまで、どんどん記述していく。担任が書く板書とは似て非なるものがそこには展開される。誰一人として、同じノートはない。

授業中は、友達が発表している内容も教科書に載っている事柄も、資料集の内容やインターネットを使って即座に調べたことも、その場で書き留められていく。授業は気付きの場であり、知識を確かなものとするための取材の場なのである。

子どもたちに、ノートづくりのことを聞くと、我先にとノートを開いて見せてくる。あたかも自慢の作品であるようだ。楽しいかと尋ねると、「なぜ、今まで気付かなかったのだろう。どんどんわかるようになってきた。」
「授業が退屈の場ではなくなった。成績も上がってきている。」

と評判は上々である。

ある学級では、ついに子ども自身が友達の考えや発表を聞いて板書を行うまでとなった。その板書は他の子たちの参考とはなっているが、またそれを参考として違うノートがつくられている。

もはや本校において、少なくとも高学年では、黒板を書き写す

子どもはほとんどいない。ノートづくりは、子どもたちにも我々教師にも確かな成果として実感できるまでとなっている。

本校並びに、校長の前任校（新宿区立落合第六小学校）の実践は、（株）グラグリッドが記事に多数掲載してくれています。グラグリッド+学校名で検索をしてくだされれば、多数の記事が出てきます。参考までに。

（５）私たちが求める「深い学び」とは何か

本校では、これまで述べてきたように、「主体的・対話的な学習」への授業の質的改善に努めてきた。しかし「主体的・対話的な学習」のみでは、資質・能力の育成につながる「いい授業」にはつながらない。

中央教育審議会答申では、「深い学び」について次のように説明されている

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び

ここまで本校が取り組みたい「主体的・対話的な学習」について説明をしてきたが、これらは視覚や聴覚でも確認でき、比較的教員にとってはイメージしやすいものである。ところが、「深い学び」となると、質を問われる分野である。

本校は、「深い学び」を職員共通で理解して取り組むために、中央教育審議会答申「深い学び」の論点整理の分析を行った。ここではむずかしい言葉が使われているが、要するに「見方・考え方」「深い理解」「問題解決の思考や構想」などの要素が組み合わされた説明であることがわかる。このうち、「深い理解」とは「概念的な知識の獲得」と言い換えることができる。

元文部科学省視学官であり、現行学習指導要領の策定にも尽力された、國學院大學・田村学教授は、個別の知識が関連付けられて構造化したものが、今求められる「知識」について次のように述べられている。

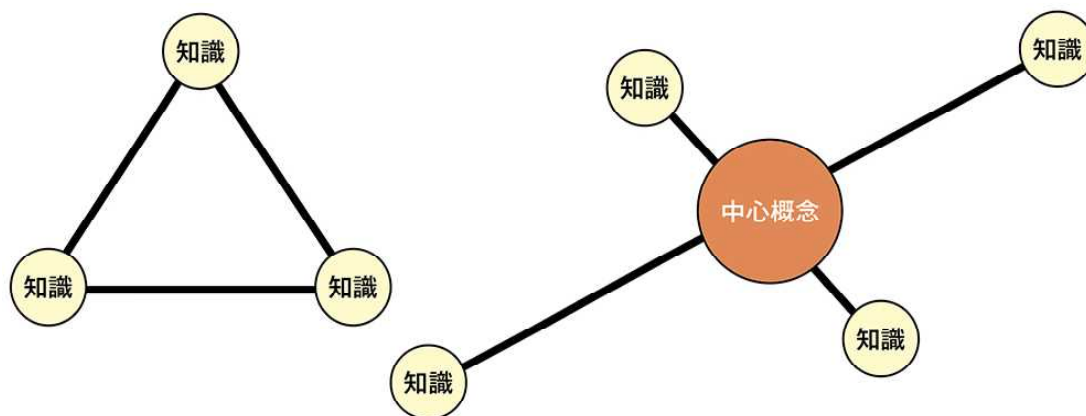
子どもたちは各教科等を通じて多様な知識や技能を習得していくわけですが、それらが相互に関連付けられ、子どもたちが社会に出たときにも、生きて働くものにしていくことが大切です。これまでの学校教育でも大事にされてきた、具体的な事実に関する知識や個別的な手順に関する技能は、もちろん、それ自体もとても大切です。しかし、複数の事実に関する知識や方法に関する知識が関連付けられ、統合されるようにすることで、概念化されより活用しやすいものにするのが大切なのです。

知識と呼ばれるものには、「〇〇は△△である」「〇〇ならば◇◇である」という事実に関する知識があります。例えば「日本の首都は東京である」とか、「江戸幕府の最初の征夷大將軍は徳川家康である」というものがそれです。この事実に関する知識は測定しやすく、言語化しやすい認知系の知識で、専門的には宣言的知識と呼ばれます。この事実に関する知識が構造化されたものが、資質・能力としての「知識」なのですが、そのつながり方のタイプは大きく分けてふた通りあります。

。

「知識及び技能」における知識の構造化（知識）

【ネットワーク化】事実に関する知識がつながるタイプ



（左）知識が構造化し概念化するイメージ図 （右）中核となる知識（中心概念）に知識がつながって概念化するイメージ図

一つめは、事実に関する知識がつながり合って概念的知識へと構造化されていくものです。二つめは、中核となる知識（中心概念）に、事実に関する知識が結び付いたりつながったりして、さらに構造化されていくものです。

このように事実に関する知識がつながり合って、概念的知識になっていたり、中心概念に事実に関する知識がつながって、さらに構造化されていたりする例を見てみましょう。

ある学級の子どもたちが、それぞれ好きな夏野菜を育てています。「私のキュウリはもう黄色い花が咲いたよ」「僕のナスはまだ花が咲いていない」と、日々の成長を記録しながら話し合っています。

やがて子どもたちのキュウリやナス、ミニトマトなどに花が咲き、キュウリやミニトマトは黄色い花、ナスは紫色の花が咲いたと話し合っていきます。

その後、それぞれの花が萎んで、実がなった後、子どもどもたちは互いの育成記録を伝えます。それを聞いていた子どもたちが、「キュウリもミニトマトもナスも、ぜんぶ花が咲いたところに実がなるんだね」と気付く、「野菜はみんな、花が咲いたところに実がなるんじゃないかな」と話し合っていきます。

そこで一人の子が、「リンゴも花が咲いたところに実がなるってテレビで見たよ」と言うと、別の子が「私のおじいちゃん、おばあちゃんはみかんを育てているんだけど、みかんもやっぱり花が咲いたところに実がなるんだよ」と体験を話し始めます。

そこで子どもたちは、「野菜だけじゃなくて、果物も同じで花が咲いたところに実がなるんだね」と、新たな気付きを話し、さらに「他の果物もそうなのか調べてみようよ」と話していきます。

このお話の前半は、キュウリ、ミニトマト、ナスという個別の野菜は、花が咲いたところに実がなったという事実に関する知識が関連付けられて、「野菜は花が咲いたところに実がなる」という概念的な知識へと構造化されていく過程です。

後半は、「花が咲いたところに実がなる」という中心概念に、リンゴやみかんといった果物の事実が結び付き、他の植物へも拡張されていく様子です。

このように個別の事実に関する知識の粒が関連付けられて塊になり、階層が高まっていく様子がイメージできると思います。このような階層が何層にも重なり、構造化した状態になったものが概念的知識であり、このような知識こそが今、求められている資質・能力としての「知識」なのです。そして、このような状態に向かっていくことこそが、「深い学び」と言えるのです。

田村学氏 みんなの教育技術「田村学流 単元づくり 授業づくり」

このように、知識を単体で問うような学習は、「深い学び」につながらず、知識を網羅的につなげて関係性に気付かせ、事実を、抽象的に捉えなおさせ、自分と関連付けて理解する学習が求められる。「ということは・・・」というような発想の転換が必要となり、事実を生きて働く知識、子どもが後々使える知識(概念的な知識の形成)につなげることが必要である。子ども自身が、「つまり・・・」というように、関係性や関連づけから、新たな次の次元での学びが展開できることが求められている。

（６）私たちが求める「見方・考え方」とは何か

次に「見方・考え方」はどういったことであるかについて考察したい。

まず、概念的知識をもてるようになると、汎用性がある知識をもつということになる。これは、いったん知識が体系化「構造化」されると、他の単元の学習に取り組む際にも「学び方や概念化までの道筋のたどり方」がわかっているの、ある程度自力で応用が利くようになるということである。「見方」とは「視点」であり、「考え方」とは「思考」なのであるから、子どもたちが「気付いた」ことを出し合って、それを元に「思考」が活性化されれば、「見方」や「考え方」はその過程で鍛えられていくこととなる。「見方・考え方」は「知識や技能」と同様で、それらを獲得したり、保有したりするのみではさほど意味をなさず、実社会や実生活の場で活

用できることこそが重要となる。

我々が各教科や領域で育てていく「見方・考え方」とは、自己を取り巻く「ひと・もの・こと」に対して、何をどのように見て、どのように考えていくのかという、見る方法や思考の道筋を言うのである。すなわち学習して知識や技能を獲得し、それらを活用して「わかったこと」(概念)をもとに 問いを創りだし、改めて学んだことを問い直して「考えたこと」につなげる過程で発揮される力であるということが言える。

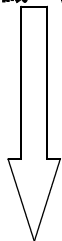
見方・考え方の具体例

社会科「わが国の農業と食糧生産」

学習問題

日本の農業は、それに携わる人々によって、国民の食料を確保するために、どのような工夫や取り組みをしているのでしょうか。

知識・技能



- 我が国の食料生産は、自然条件を生かしていること・国民の食料を確保する重要な役割果たしていることの理解
- 食料生産に関わる人々は、生産性や品質を高めるよう努力したり輸送方法や販売方法を工夫したりして、良質な食料を消費地に届けるなど、食料生産を支えていることの理解
- 地図帳や各種の資料で調べる技能

調べて気付いたこと

考えられる視点

- 生産物の種類や分布 生産量の変化 外国との関わり
- 食料生産が国民生活に果たす重要性
- 生産の工程 技術の向上 価格や費用(経費)と食料生産に関わる人々の工夫や努力

見方

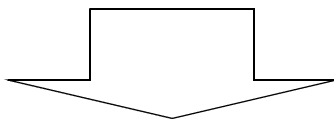
社会的事象の特色や意味など

を考えるための「問い」

概念化

考え方

- 安心・安全を優先する農業は、どうして困難なのか。
- 日本の農業従事者が高齢化している要因は何か。また、その対策はどんなことが考えられるか。
- これからの農業を考える上で、大切な視点は何か。
- 消費者として、食料生産に従事する人と、どのように関わっていけば、共に生きていく社会が実現するのか。



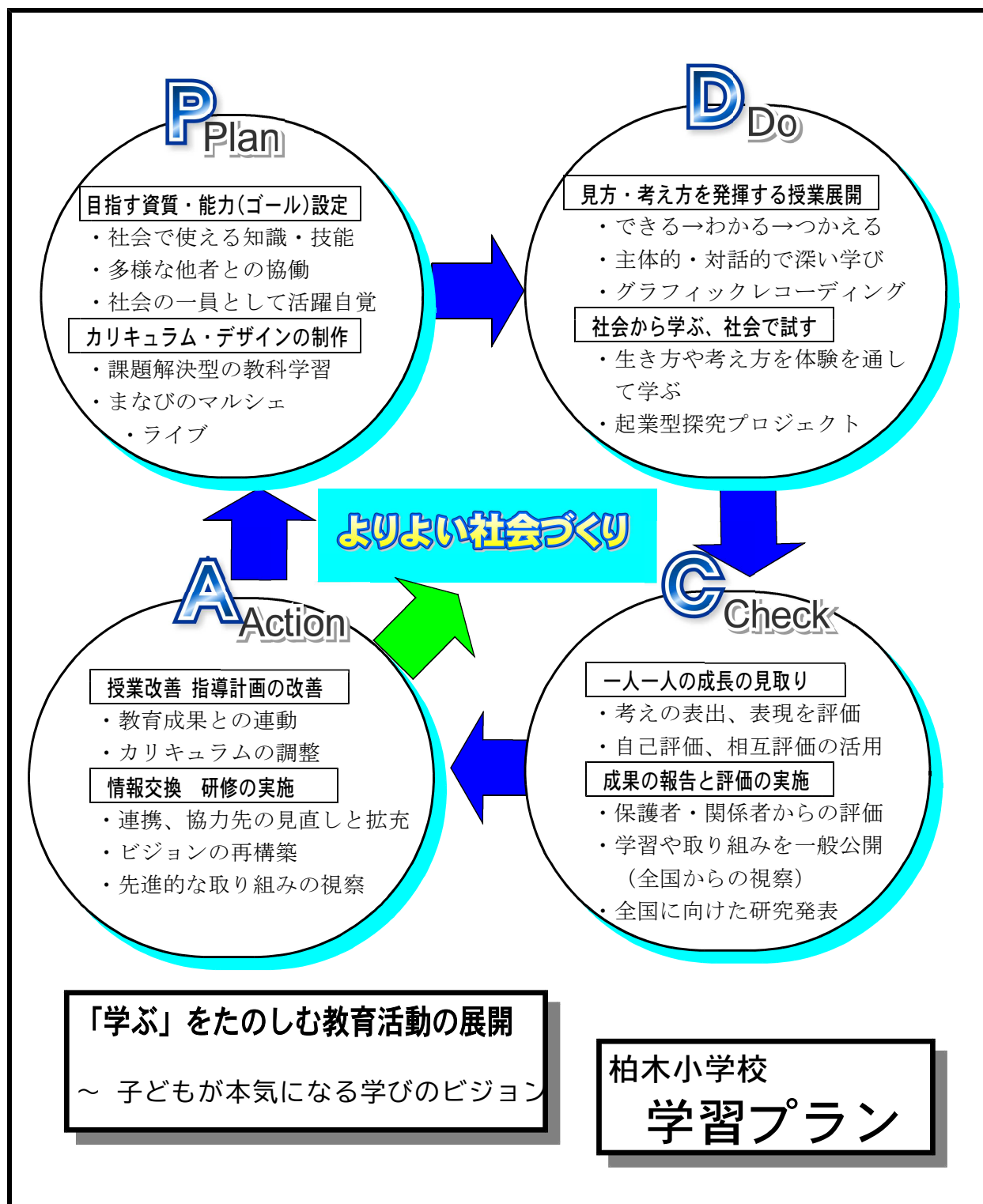
世の中を豊かに捉え直す学び

一人一人の個性が発揮され、一人一人にとって意味のある知への発展

IV 柏木小の教育

1 柏木小学校の学習活動

本校においては、子どもたちの資質・能力を高めていく学習過程を明らかとし、「学ぶをたのしむ教育活動の展開」を掲げ、子ども自身が意欲をもって学習に取り組むことを第一の目標とした。その上で必要な見方・考え方を発揮させる学習展開をめざし、教科学習ならびに生活科と総合的な学習の時間で展開する「ライブ」（起業型探究プロジェクト）を位置付けている。この際、個々の見方・考え方が伸びていくだけではなく、地域や保護者、それらを飛び越した実社会と連動して、共に生きるよりよい社会を展望し、学習を生かす場を創り出している。

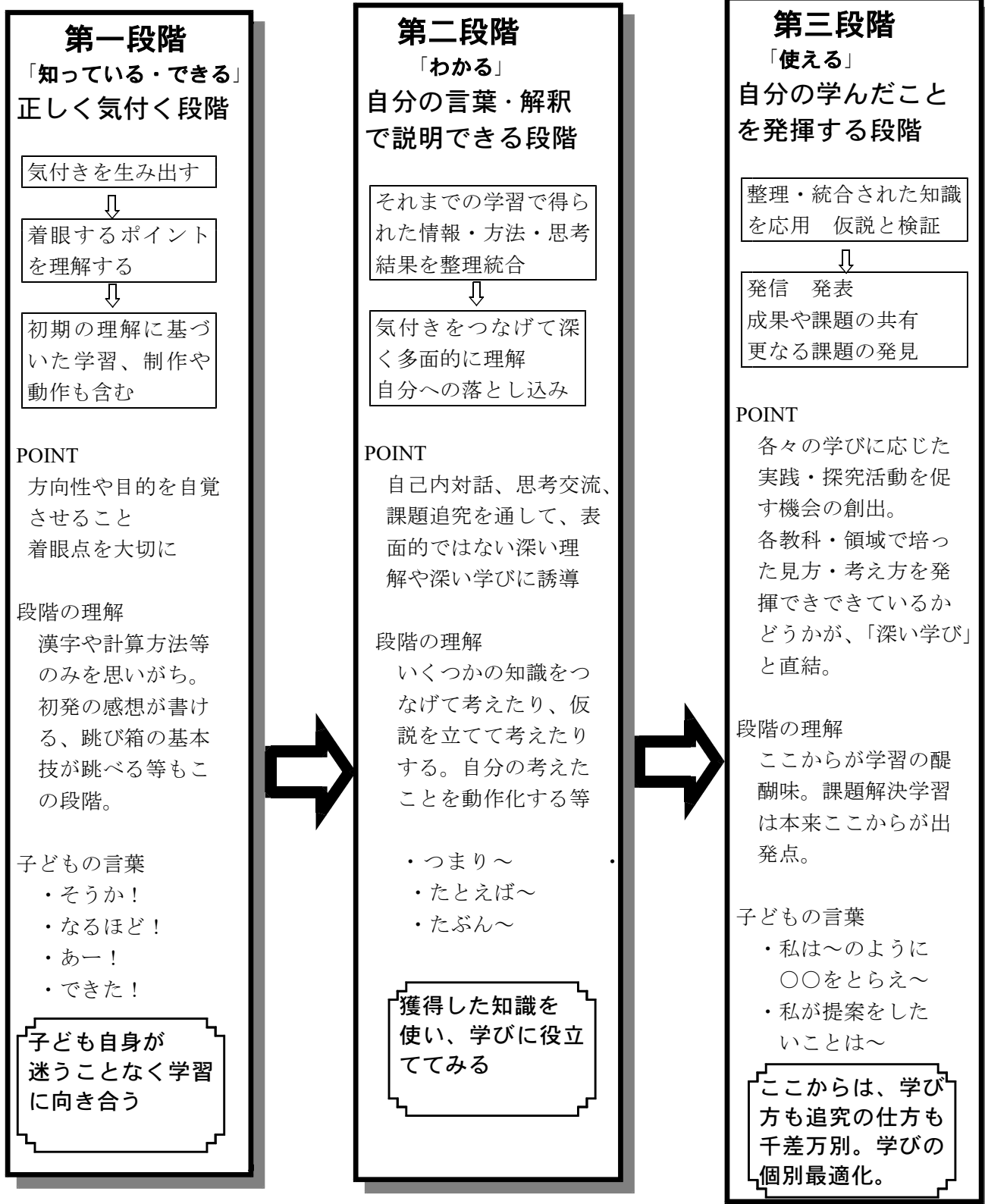


2 柏木小学校が育みたい学力

(1) 学力は学校が提供できる最大の商品

本校では、教職員や保護者をはじめ、本校の教育に関わる全ての人に、本校がめざす教育の方向性を理解していただき、共有し合うことで、教育効果がより高まることを期待してカリキュラムをデザインしていくことが大切であると認識している。

そのために、本校では学習の過程を次の三段階に区分けした。



(2)「知っている・できる」を捉え直す

「知っている・できる」は、規定のことを整理し、覚えるというよりは、視点を磨くことに重きをおかねばならない。事項を覚えること、やり方を覚えることを強調しすぎて、それができなければ先には進ませないと様々に不具合を及ぼす。たとえば子ども時代に遊んだ遊びの類いや、トランプの遊び方は、それをしながら覚えていったはずである。まちがえたら、周りがそれをサポートし、当人もルールややり方を覚えていった。

一例をあげれば、右図の昔遊びであるが、第一段階である「知っている・できる」は、遊びのルールを知っていることだけではなく、ある程度みんなといっしょになって遊べることをさす。また第二段階の「わかる」は、何回か遊んでいくうちに、効率よく勝つことにつながる技や作戦を考え出すこととなると思う。さらに第三段階の「使える」は、さらに遊び方を改良して盛り上がるものにしたたり、みんなが楽しく遊べるようにハンデなどを考え出したりと、目的性をもって遊びのリメイクを考案して楽しむといったこととなると思う。

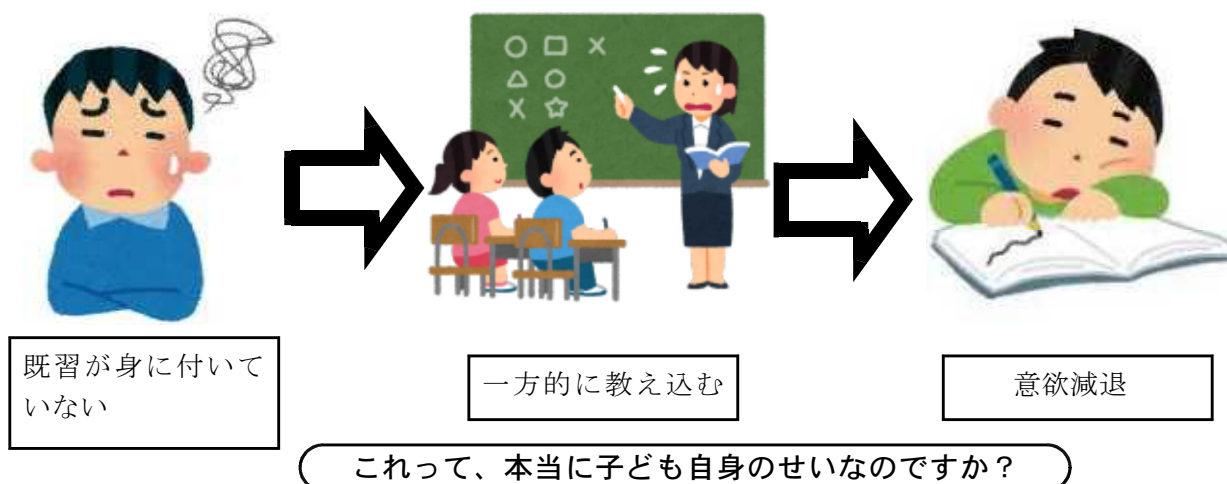


みんなで教え合った昔遊び

こうした一連の流れを学習に置き換えようとする、状況や考え方は同じはずであるのに、うまく機能しない。理由の一つには、教科書や指導書の区切りに問題がある。若手を中心とした教師は失敗しないために、料理で言えば調理本のように、書かれている手順通りに授業を進めたがる傾向にある。書かれている材料が揃っていない、料理手順の指示通り(○分ゆでる△ccの調味料など)に従わなければ、完成品までたどり着けないと考えている。レシピ通りの材料や調味料が揃わなければ料理は完成しないのか。よく著名な料理人が冷蔵庫の残り物を使用して美味しい料理を作ることがあるが、工夫次第でどうにかなるのではなかろうか。

視点を変えるのなら OJT という言葉がある。遊びを覚えるのは、まさにこの考え方と同じで、行いながら、楽しみながら覚えることのほうがより効率的であるということは、誰しもが自覚することであろう。学習指導要領の資質・能力の中にも、学びに向かう力が要素の中に盛り込まれている。子どもたちの学習も同じで、共に参加しながら、楽しいと感じさせながら行う必要がある。むしろ、ここを育てなければ、これからの世の中に対応していくことができない、むしろ学習の目的地に向かうのには、意欲の向上は欠かせないと本校は考えている。

こういった方向性の障壁となっているのは、学力の捉え方によるものではなかろうか。「先生が教えなければいけない」「子どもは管理しなければいけない」「子どもは全然わかっていないということを前提としている」「子どもにいろいろな学び方の自由を与えてしまうと、かえって収拾がつかなくなる」などの認識によるところも大きい。

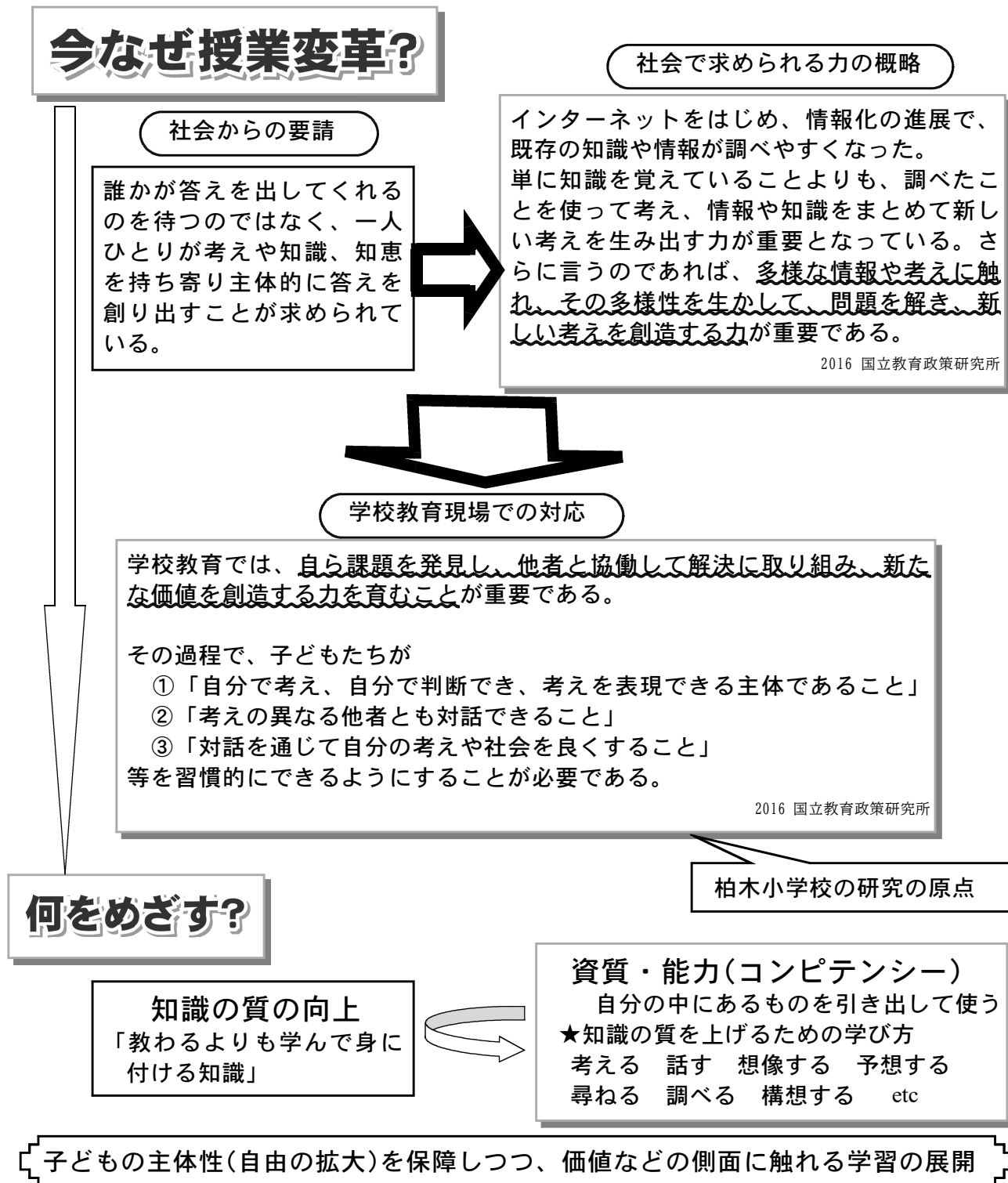


（３）柏木小学校の授業を変革する

授業の変革について、本校においても何度か研修などを通して、呼びかけてきた。しかし、近年、若手や経験の少ない教員の増加等で、同じ内容を協議しているつもりであっても、ほとんどが通じていないといったケースが見られた。

これは、ていねいに、しかも具体的に説明を行い、授業の進め方がわかっている教員とそうでない教員がチームとなり、指導を進める必要があると感じ、その対策を講じてきた。

①なぜ授業変革が必要なのかを論理的に説明する



（４）先進的な考え方や実践に学ぶ

本校では、これからの教育のあり方について、自校内での研修や書籍からの研究だけでなく、管理職を含め、外部に研修に出て、実践や研究に生かしている。アンテナを張り、今後の教育の展望を見通しているのである。

ここ数年であるが、中央研修には約 10 名を派遣、香川大学附属高松小学校と奈良女子大学教育学部附属小学校に合わせて 10 名程、また都内の国立附属小学校の研究授業にも何人かが参加している。

一例として、本校の今年度の研究に役立てている奈良女子大学教育学部附属小学校の研究について紹介をしたい。

「令和の日本型学校教育を体現する学校」に学ぶ

① 奈良の学習法(個別最適な学びの「源流」について)

学校や生活を「やらされたり教えられたりするものでなく、存分に自分らしさを発揮して自分の考えを進めるもの」と、当たり前につえられる子どもに育むことを重視している。

子どもたちは自分で学ぶ力をもっている。にもかかわらず、教師は「教えなくては子どもは学べない」との考えに縛られ、教えよう教えようとする。このような考えの教師は、自分の計画通りに学習を展開しようとする。そこでは、教師の考えた筋には沿わない子どもたちの素朴な疑問や奇抜な発想、新たな学習の創造へ繋がる考え方などは捨て置かれる。教師が自分の立てた計画に沿って進行する上での妨げになるからだ。こうなると、子どもたちはいつしか教師の求める一つの正解を追い求めるようになる。そこに主体的に学ぼうとする意欲は生まれるのだろうか。学習の個性化は図れるのだろうか。計算や漢字のドリルのような一つの正解を求める学習はどんどんできるが、自分の思いや考えをもち、他者との協働によって新たな創造を生み出すことは苦手という、多くの学校で見られる姿は、これまで多くの学校で行われてきた「教え伝える教育」によるものだと考える。

現行の学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」や「個別最適な学びと協働的な学び」を実現するためには、もっと主体的に、個性的に、子どもたちが自分の思いや考えを自由に生き生きと表現できるように育てる必要がある。そのためにも「教えねば学べない」という教師の奢りは捨てねばならない。

「令和の日本型学校教育を体現する学校」 奈良女子大学教育学部附属小学校

② 奈良の学習法の特色「めあて」と「ふりかえり」

★学習に「めあて」と「ふりかえり」が位置付けられていて、子ども一人一人も意識して学習を進めている。

★「めあて」は、その子がその時間に「何をどのように学習しようとするのか」ということが具体的になっていなければならない、「いつでも使える抽象的なものでなく」「誰でも使える一般的なものはない」ものを意味する。

「めあて」のだめな例…「いつでも使える抽象的」「誰でも使える一般的」

- ・「算数の時間では間違えないようにがんばりたい」
- ・「物語文で、主人公の心情を読み取って、物語の主題に迫りたい」

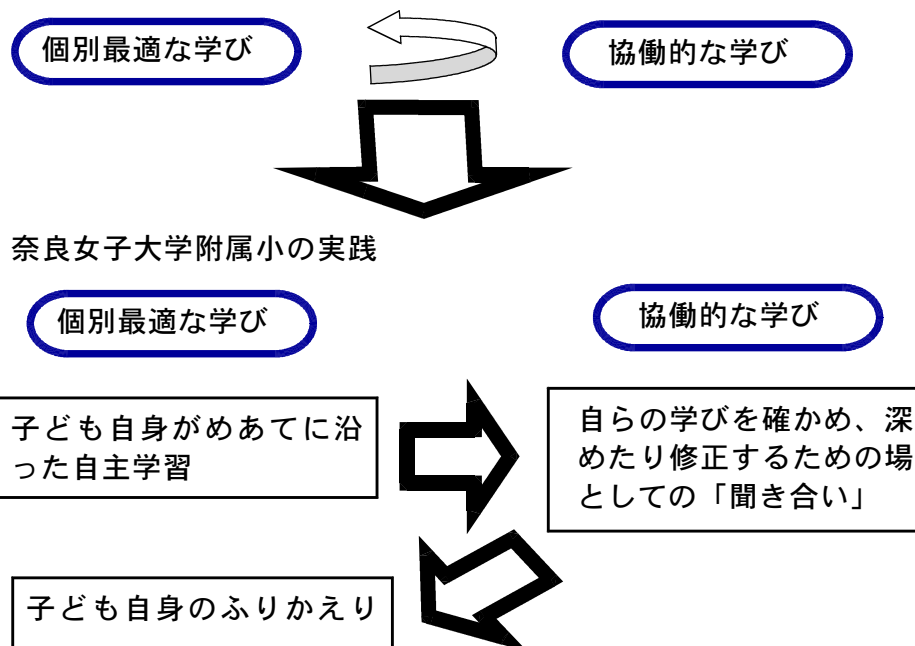
「めあて」の良い例…「自分はその時間にどのように学習しようとするのか」
「これから学ぼうとすることについて、自分がどのような状況であるのかを見つめた上で、どう学びたいのか」

- ・「今日は2けた＋2けたの筆算の仕方を考えます。前の時間は一の位が繰り上がっていたけど、今日は十の位が繰り上がることが違うと思うので、繰り上がりの仕方を確かめたいです」
- ・「ごんが兵十に撃たれてまで伝えたかったことや、兵十とどういう関係になろうという気持ちであったのかを考えます。この物語は、とても悲しい物語だと思うので、何が悲しさの正体なのかを明らかにしたいです」

「ふりかえり」の例

- ・自分が学び取ろうとしていたことについての「ふりかえり」であり、そのことで学習をより自分のものとしていくことが可能となる。

★令和の日本型教育の構想



このように、個別最適な学びと協働的な学びは、対をなして形成していくものであるものの、教師が意図的にルールを敷き、その上をあたかも子ども自身が取り組んでいるかのように見せる形骸化した学びは、子ども自身の育ちにはつながらない。子ども各自が意思をもって、学習を形成していくことこそが、この学校の奥深さであり、的を射ているところである。

こちらの学校に限らず、これからの学びは、「何を知っているか」ではなく、「何を考え、何を指向し、何ができるようになるか」ということを、子ども自身の学びに問わなければならない。教師が段階的に指示をし、団体旅行のように誘導し、観光地でのガイドのごとく一生懸命大切なところを説明して、あたかも良い学習を行ったというような「アクティブティーチング」からは、脱皮しなければならない。目的をもった自学自習ができること、学んだことを通して授業という公益の場で、取引（取材）をしながら、自分の学びをより確かなものとしていくことが重要である。そして、改めて自分の学んだことをふりかえることで、学びは確立されていくのである。

(5) 本校の目指す授業をループリックにまとめる

はたしてよい授業というのはどんな授業であるのか。様々な、子どもの学びが息づいている授業を参観してきて、何がそこでは行われているのか、それに反して、全くこれからの授業や学習とはかけ離れた授業になっているものは、どんな授業であろうか。本校では、授業のループリックを管理職が示し、教員に提示をし、これに基づいて、各教員の授業の観察や指導を行っている。あくまでも私見であるため、ご容赦願いたい。

柏木小学校 授業の指針（ループリック）

段階	教師	子	授業の様子 学びの基準 教師と子どもがどのような学びをかたちづくっているのか
S	○	○	・ 子どもと教師、それぞれが時に各々に、時に協力をして、様々な方法で情報を集め、それを材料に考察をし、これまで自分の自分の認識を超える価値の追究や新たな発見に挑んでいる。
	○		・ 子どもたちの学びを尊重するとともに、学ぼうとする子どもたちを尊敬し、授業の場を教員自身が子どもから学ぶ場と捉え、その機会や時間を愉しむ。
		○	・ 学習内容の本質や価値を見だし、それぞれがその追究する活動を愉しんでいる。
		○	・ 友達や教員の考えや説明を建設的に捉え、積極的にそれを評価する。また足りない情報や考えがあれば、批判をするのではなく、相手から訊きだすようにして、学びを協働してより確かなものとしていく姿勢で臨んでいる。
A	○	○	・ 授業が、子どもと教師の双方が力を合わせて創り出すものとなっている。双方向（教師が問いかけ、または子どもが問いかけ、みんなで考える）の場 となっている。
	○		・ 教師が指名せずとも、授業中に、相互指名や子どもの司会進行などでやりとりをして、授業が進み、学びが深められるように仕向けている。
		○	・ 授業のめあてやねらいが、子ども一人一人が認識できている。願わくば、本日進められる学習が、子ども自身の言葉で表現できている。ふりかえりについても同様に、自分の言葉で表現できている。
		○	・ 授業全体のめあてや目標の他に、その時間に子ども自身が「追究したい」自己課題が設定できており、それに基づいて学習が進められている。
B		○	・ 授業を通して視野が広がったり、新しい考え（認識）を得られたりする機会となっている。
	○		・ 授業の目標は子どもと共有している。ただし、教師が読み上げたのみ、ノートに書かせたのみといった、子ども自身がこれからの学ぶことへの認識がされていない場合は除く。
	○		・ 授業の内容自体が、子どもにとって全くの初見で構成されることがないように、これまでの学習経験を想起させたり、同様の内容につながることを

B		疑似体験させるなどの導入の工夫を行い、学習の見通しを子どもにもたせている。
	○	・ 子どもの発言内容を取り入れた板書づくりを工夫している。また発問については、単語や事実のみで終わることがないように意識したもので構成され、気付きや各自の予想や考えがふんだんに出される授業構成にしようとしている。また、それらが板書で生かされている。
	○	・ 子どもの発言は多少的を外しても、授業のネタとして授業に取り込んでいくように配慮し、子ども自身の参加意欲を高めている。そのために、子どもの発言や意見を面白がったり感心したりと、有名芸人が司会する番組のように「まわす」構成を意識している。
	○	・ その時間に自分がこだわりたい内容や追究したいことが、子ども自身に想定することができる。
	○	・ 板書してあることをノートなどに書き写すだけでなく、授業の中で気付いたことや分かったこと、大切だと思うことや思い起こしたことなどを、絵や言葉にして書き加えている。
	○	・ その時間の学習のふりかえりは、その時間に考えたことや新たに気付いたこと、理解が深まったことなどを表出でき、願わくば次の学習で学びたいことの指針を示すことができる。
C	○	・ 今日教えるべきことを明確にして授業をしている。ただ、教育活動のほとんどが指導中心で、教師の指示によってのみ展開されている。
	○	・ 板書は、教科書に載っていることの整理が中心で、子どもに説明するためのものとなっている。
	○	・ 教師の一問一答のみに答える。主に「答えは○○だと思います」といった単語で終わる事実で形成され、オリジナリティは発揮できていない。
	○	・ 板書されていることを、コピーするようにノートに書き写すことが中心のノートづくりを行っている。

(6) 授業の質を上げるための取り組み

① チームで指導にあたるための教科担任制度の取り組み

本校では、令和4年度から高学年で、さらに今年度からは中学年でも、チームで教科の指導にあたる教科担任制度を実施している。これには本校の求める授業形態を理解いただき、すでに正規の教職をリタイアされた力のある方々にも時間講師として指導をお願いしている。それぞれが各ブロックごとにチームとして、学年をまたいで同一教科の指導にあたっている。たとえば3年1組の担任が社会科と国語科を指導するとなったら、中学年の授業づくりから実際の教科指導、評価までもを行うのである。ちなみに本校では、子どもたちが一人ひとりの学び方を選んで学習を進める主体性を重視するため、子ども自身が選ぶコース別学習を行っている。ただ単に均等分割で授業を行うのではなく、主なコース分けとしては、各自が課題設定をして、追究活動を行い、協働的な学びの場で学びを深めていくコースがある。また一方で各自が追究していく学びには抵抗があったり自信がなかったりする子どもに

は、教師と一緒に伴走をするように、ともに意見や考えを出し合いながら、学習を形成していくコースがある。双方のコースともに、教師が意図的に分けするのではなく、各単元ごとにどのように学習を進めていくかについて教師側がオリエンテーションを実施して、子どもに学習の見通しをもたせて選択をさせるのである。能力に合わないコースを選択してしまうのではないかと教師の不安もあり、そういうことも当初はあったが、子ども自身が学び方を理解し、適合していったケースや友達に左右されることなく自分で選択できるようになったケースもあり、着実な成果を上げている。

教科担任＋子どもが選択するコース別学習（柏木小学校）

1 年 2 年

基本はクラス担任 一部教科担任（音楽と 2 年生以上図工）

柏葉（2 年まで）

個別のカリキュラム 一部教科担任（音楽等）

3 年 4 年

☆ 教科担任で子どもが選択するコース別学習

国語 社会 算数 体育

☆ 教科担任でクラスごとに授業

理科 音楽 図工

5 年 6 年

☆ 教科担任で子どもが選択するコース別学習

国語 社会 算数 体育

☆ 教科担任でクラスごとに授業

理科 音楽 図工 家庭 英語

柏葉（3 年以上）

個別のカリキュラム 一部教科担任（音楽等）

適性に応じて通常学級での交流学习

②チームで指導にあたる教科担任制度の導入

よくコース別学習を行う上で、空き時間がなく、打ち合わせが放課後になってしまい、超過勤務となってしまうたり、打ち合わせる時間自体をとることが難しく、ただ単に分けているだけで、同一の内容を指導していたりするということが耳にする。本校では、力のある方々にも時間講師をお願いしているため、正規の教員の指導時間のコマが多少緩和されている。また、全て同じ時間に指導のない時間があるわけではないものの、週に何回か、通常の授業時間で同じ教科を指導する教員同士が、空き時間となるように設定をしている。これによって、日々の授業の様子を意見交換したり、現単元の形成的評価を行い分析にあてたり、次の単元の指導について打ち合わせをする時間を生み出したりしている。

指導者別時間割表例 (3年～6年) 正規教員のみ

	月曜日						火曜日						水曜日					木曜日				
指導	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
3-1 担任	空き	国語 3コ	国語 3コ	体育 3コ	国語 4コ	国語 4コ	英語 ク	空き	国語 3コ	国語 3コ	国語 4コ	国語 4コ	体育 3コ	道徳 ク	空き	空き		空き	空き	国語 3コ	国語 3コ	体育 3コ
3-2 担任	算数 3コ	空き	空き	体育 3コ	算数 3コ	空き	体育 4コ	理科 ク	空き	空き	算数 3コ	算数 3コ	体育 3コ	理科 ク	社会 4コ	社会 3コ		算数 3コ	社会 3コ	空き	空き	体育 3コ
4-1 担任	空き	空き	空き	学活 ク	空き	空き	体育 4コ	道徳 ク	算数 4コ	算数 4コ	算数 3コ	算数 3コ	算数 4コ	算数 4コ	空き	空き	クラブ	算数 3コ	社会 3コ	空き	空き	算数 4コ
4-2 担任	理科 4-1	理科 4-1	理科 4-2	理科 4-2	理科 6-1	理科 5-1	空き	理科 4-2	空き	空き	空き	空き	理科 6-2	理科 6-2	理科 6-1	理科 6-1		空き	理科 5-1	理科 5-1	理科 5-2	理科 5-2
5-1 担任	空き	道徳 ク	算数 6コ	算数 6コ	体育 5コ	体育 6コ	算数 5コ	算数 5コ	空き	空き	空き	空き	空き	空き	算数 5コ	算数 5コ	委員会	体育 5コ	算数 6コ	算数 6コ	道徳 ク	空き
5-2 担任	国語 6コ	国語 6コ	道徳 ク	空き	体育 5コ	体育 6コ	空き	空き	国語 5コ	国語 5コ	空き	空き	空き	空き	空き	空き		体育 5コ	空き	道徳 ク	国語 5コ	空き
6-1 担任	国語 6コ	国語 6コ	道徳 ク	空き	社会 5コ	空き	空き	空き	国語 5コ	国語 5コ	社会 6コ	社会 6コ	空き	社会 5コ	空き	空き		国語 6コ	空き	空き	国語 5コ	社会 6コ
6-2 担任	空き	道徳 ク	算数 6コ	算数 6コ	社会 5コ	空き	算数 5コ	算数 5コ	空き	空き	社会 6コ	社会 6コ	空き	社会 5コ	算数 5コ	算数 5コ		空き	算数 6コ	算数 6コ	空き	社会 6コ

※
3コ…3年コー
ス別学習
4コ…4年コー
ス別学習
ク…担任が指
導する授業

※
4年2組担任は4
年生以上の理科
を指導
4-1…4年1組の
授業

上記の時間割は、あくまでも指導者の側の時間割である。子どもたちの時間割とは違う。ご覧いただいてわかるように、学年をまたいで指導を行っている。ということは、子どもたちは、担任から教わる教科の時間数はそれほど多くなく、教科によって選ぶコースによっては、朝の時間と給食の時間、帰りの時間しか顔を合わせないという日も出てくる。また、コース別の学習は、必ずしも自分の教室で授業を受けるとは限らず、教室移動の機会も多い。さらには、子どもが選んだコースに子どもの数が集中した場合には、教室内の机と椅子が足りなくなるため、子どもたちは自分の机と椅子を運んで授業を受けることもある。当初は戸惑っていた子も、現在は、その授業ごとに指導者が変わるため、切り替えが必要となり、授業姿勢も良くなっている印象である。また概ね子どもたちに好評である。

③ミニ研究会とミニ協議会による研修

本校では、教員が自分の授業を職員に公開をし、それをもとに、放課後に 30 分程度のミニ協議会を度々実施している。空き時間の教員だけでなく、授業中であっても子どもたちが自ら課題追究や探究学習を進めている合間の時間を抜けて参加するなど、管理職を含め、皆が授業を観察しあっている。授業者は、事前 A4 1 枚程度の略式指導案を全教員に配布し、授業への参加を促している。こういった取り組みは、経験年数の少ない教員にとってはとても有意義でミニ研究会でなくとも、お互いの授業を行き来して、授業の質の向上に努めている。



放課後のミニ協議会

また 2 学期以降は、学校公開でなくとも、保護者にも授業を公開していくようにした。授業の意図やねらいは、教師だけが精通すればいいものでなく、保護者にもわかりやすく、賛同しやすいものであれば、理解も得られやすく、また関心をもってもらうことがたいへんに意義のあることだと思われたからである。

④保護者向けの通信「柏木ビジョン」の発刊

本校では、保護者から学校の様子や子どもたちの様子が知りたいという要望や、学校公開等の子どもたちの様子を知る機会を増やしてほしいという要望が度々寄せられていた。柏木小学校が、子どもたちの未来を見据えた取り組みを様々に模索し、改善を図ろうとしているという発信は、学校側から度々しているが、その内情がよく理解されていないということをも反省した。ちょうど区内の学校メール配信システムが入れ替わり、学校だよりや学年通信では掲載できないような授業の姿や、本校ならではの取り組みを保護者に知っていただくために、「柏木ビジョン」という名の広報誌を作成し、PDF で添付して配信を行い始めた。教員がどんなことを意図したり願いをもったりして授業を行っているのか、子どもたちはどんな姿で授業を受け、感想をもっているのかということをもレポート状にまとめていく。子どもたちの授業に入って取材を始めると、「また柏木ビジョン」と子どもから言われるものの、子どもたち自身、授業を取材されることにはまんざらでもなさそうである。授業は、先進的な取り組みやチャレンジしたい授業があるなどの教員からのリクエストを主として出かけて行って取材している。授業に入るときは、観察者ではなくて、新聞記者になったような面持ちである。授業は、教師の指示や指導、子どもの発言や反応をほぼ全て記録し、象徴的な写真を撮影して、「柏木ビジョン」に入れて構成している。教員だから読み取れる展開や子どもたちの良さ、本来教師が期待している展開や意図を読み取って、授業の行間をわかりやすくまとめたレポートにするように努めている。

一方で保護者の反応は、「授業と一口に言っても、様々な意図や配慮がされていることがわかった」とか、「子どもたちがどのように学んで成長につながっているのかを知ることができてよかった」等の感想が聞かれるようになった。その分、6 月に実施した学校公開では、授業への関心度が高まり、いつもは授業に対して散見する疑問や批判的な意見も、ほとんど見られなくなった。また、学校関係者評価の前期の結果は、前年度のものに比べて大幅に向上した。

一方で、「柏木ビジョン」は教職員にも配信しているため、職員の授業研究にも役立っている。本来ならば、校内で時間をつくって参観をしたいところではあるがままならないときに、授業レポートとしての「柏木ビジョン」を読み、研修に役立てている。

以下に実際の「柏木ビジョン」を掲載したのでご覧いただきたい。

柏木ビジョン

新宿区立
柏木小学校

2024.5.24

3年生 国語『もっと知りたい 友だちのこと』(聞く 話す) コース別学習

スポーツテスト後の4時間目、授業も終わろうかという時間に子どもたちに、「国語って好き? それはどうして?」とたずねると、聞いた全員が「好き、たのしい」と答えました。

「みんなとかかわりがあるから」(基礎コース)

「みんなと意見が共有できるから」(基礎コース)

「みんなの意見が聞けるから」(基礎コース)

「ほめられるし、間違えても怒られないから」(基礎コース)

「いろんなことを学べるから」(発展コース)

「友達に自分のことを伝えたい」(発展コース)

「みんなの意見を聞いたり質問したりすること」(発展コース)

「自分の意見を発表するのが苦手だから、相手の意見を聞くと勉強になる」(発展コース)

3年生から始めた国語のコース別学習。コースは、授業の進め方の説明を受けた後に、各自が自分に合った学び方を選択して授業に臨みます。スポーツテストに頑張りすぎたせいか、出だしはどちらのクラスもゆっくりでしたが、途中からボルテージが上がってきました。

それぞれの先生方に、国語のこの単元でめざしていることを訊いてみました。



国語大好き

基礎コース 田中先生の実践と思い

本校で昨年度から3年生と4年生の国語をコース別学習で指導してくださっているのが、田中先生です。

田中先生の授業に出会うと、子どもたちは、文章の読み取りや分析を喜々として行い、友達に対して自分の仮説や証明を展開する姿が見られるようになり、めざましい成長をしていたのが印象的でした。

そんな田中先生が出会ったのは、基礎コースを選択した3年生の子どもたち。そもそもこの子たちの特徴をあげると、

- ・国語が嫌い(苦手だから)
- ・文が書けない
- ・人の前で話ができない
- ・国語がつまらない
- ・授業は黒板を書き写すだけ



田中先生

というような、総じて自信がないという状態でした。この子たちに、「国語っておもしろい」「自信をもってもらいたい」という思いで、指導を始めたのが4月だったそうです。

「この単元では、一個ずつ教えて、ゆっくり育ちを待とうと思います。教師の思いはいっぱいあります。基礎コースの子のほとんどは、手を上げたことがなかったり、自分から自発的に考えたことがなかったりしたようです。そもそも自分に自信がない子たちなんです。」と、話してくれました。小さなステップをほめて、はげまして、自信をつけることなど、積み重ねを大切にしているということでした。

「4月の物語の学習で、読んだことから、感想を話し合いました。感じたことをノートに書きましょう。」

このように投げかけたところ、ノートに何も書き出せない子、何を言われたのかが想像がつかない子たちが続出したそうです。子どもたちにとって、文章から直接想像したり、考えたりすること自体が、どういったことなのかをイメージすることが難しかったようです。そこで田中先生は、文章ではなく単語に焦点をおいて、そこからイメージをわかせるようにしました。

5月となり、現在の単元になりました。「自分の好きなこと」を相手に「話して」「考えて」「質問に答える」という内容のものです。ところがここからいくつかのステップが必要となりました。

①自分の好きなことがわからない

→とにかく全部書こう。そのまま文にすればいいんだよ。

思いが初めて文に

②書いたものを恥ずかしくて読めない

→少しずつ声に出そう

→声の出し方をつかもう

読めてきた

③何を質問していいのかわからない

→質問とは？質問の簡単なポイントは

④どう答えたらいいのか？

→答え方の簡単なポイント

ちょっと言えたかも

⑤お互いのいいところやがんばりをほめ合おう

うれしい！

基礎コース 田中先生の授業

時間の目標

質問をして答えてみよう

発表者が発表をして、質問係が質問をします。その他にお助け係というのがあって、話し合いをサポートしています。答える係や質問する係となった子がうまく出せないときには、お助け係が登場するようです。

発表は1周で終わるのではなく、役が順に進み、同じことで2回目以降も発表し、質問者が変わっていく方でした。ある子は発表を聞いて、びっくりしたことをノートに工夫してまとめていました。「自分があたり前と思うことも、みんながびっくりすることがある。」

「1回目よりも2回目のほうが声が大きかった。」

子どもたちそれぞれの育ちを感じた1時間でした。



発展コース 菅野先生の授業

「発想を柔軟にして、様々な見方や考え方を育てていきたい」と話すのは、菅野先生。本校4年目で、今年度は3年生と4年生の国語のコース別学習を田中先生といっしょに指導しています。様々な気付きをもたせるのに、大谷翔平選手で有名になった「曼荼羅チャート」を子どもたちにつくらせてみたり、指導方法を工夫改善して子どもたちに提示したりと、意欲的に取り組んでいます。

この單元では、「自分が好きなことを表現すること」とともに、「話したいことを整理して表現すること」「話すために書いて表現すること」など、いくつかのポイントをあげています。

まずは、モニターに向かって、菅野先生のところで飼われていた犬の発表を例示して、子どもたちが質問をして、発表の仕方やメモの取り方を確認します。その上で子どもたちが用意した発表がそれぞれの班で展開されていきます。聞いている側は、発表された内容をメモにとってまとめていきます。メモの取り方として、できるだけ短くという指示が出ていました。

ふと、子どもたちが発表の時に使用しているのは、活字になっていることに気がきました。前のノートをめくってみると、同じ内容の手書きのノートが出てきました。

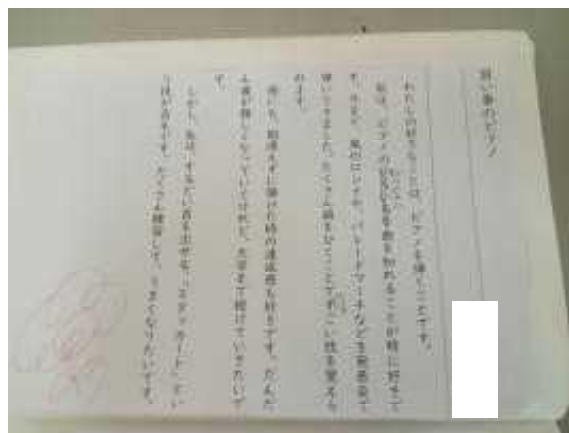
菅野先生に尋ねてみると、タブレットの打ち込みや操作にも慣れてほしいとのこと。子どもによっては、発表が複数になっているのも見受けられました。「自分が進めたい学び方や発表の仕方に任せてみるのも、個別最適化学習では大切だと思います。」と答えてくれました。学ぶことが分かりそれぞれの子が認め合う学習となっている印象です。



発表者以外はシートにメモ



手書きのノート



タブレットに打ちこんだシート

なお、「柏木ビジョン」については、柏木小学校ホームページにもリンクを貼ってあります。その他の号も合わせてご覧ください。

3 柏木小学校の特別支援学級「柏葉学級」

(1) 特別支援教育の捉え方

子どもたちの多様性を認め、尊重していくことが求められるこれからの社会において、特別支援教育が果たす役割は大きいものがある。本校においては、柏葉学級という知的に遅れのある子どもたちを対象とした固定学級としての特別支援学級を併設している。ここ数年で、中途転入をはじめ、子どもの数は激増している。それだけ、特別支援教育のニーズは高まってきていると言える。

また、この柏葉学級だけでなく、日本語を母国語としない子どもが、毎年数名入校してくる。この子たちへの配慮や日本語指導も必要となってくる。この子たちには、週に数時間取り出しで、日本語や日本の習慣、礼法などの指導を日本語加配教員が行っている。その他に、通常の学級内に、何らかの支援が必要となる子どもは、相当数いる。このように特別の配慮が必要となるのは、もはや特別な障害を有している子どもだけではない。真の意味でインクルーシブ教育を実現するには、あらゆる事情を抱えた子どもへの支援ができる制度を構築する必要がある。学習指導要領の中では、資質・能力に関する三つの柱が一つのセットになって示されており、これらをバランスよく伸ばすことで「人格の完成」をめざしている。しかし、「人格の完成」に向かうポテンシャルはどの子どもにもあるとしても、障害によっては「知識・技能」に対してハンデを抱える子どもが特別支援学級に在籍しているかいないかにかかわらず、ある程度いる。問題は、学習姿勢による影響なのか、それともディスレクシア（学習障害）によるものなのか、専門的な検査を介さない限りは見極めが困難であるということである。

とりわけ、日本の学校では、学力について全体が同じ基準で結果を求める傾向があり、障害のある子どもを含めたすべての子どもを、この三つの資質・能力により評価するのは難しい。それぞれの子どもが個別の目標を立て、その達成度が評価される必要がある。他の子どもと比べるのではなく、その子の中で立てた目標に対してどれだけ伸びたのかという部分を見られるようになっていくべきであるとされている。

通常の学級でともに学ぶ中でも、あらゆる子どもが理解できるユニバーサルデザインな授業が実現できれば、個々に対応しなければならない場面は減らすことができる。その上で、必要に応じて個別の配慮や指導をしていくという考え方で授業づくりに取り組むべきである。すべての子どもが活躍できる、という視点からは、間違えることを躊躇しないで自由に発言できるような空気をつくることが重要となる。発言が活発なクラスでは、子ども同士の学び合いも促進される。本校が、子どもの自律を促し、ともに学び合う教育を推進しようとしている理由は、むしろユニバーサルデザインな授業に根ざしている。

子どもたちがインクルーシブな考え方をもつようにするには、教員が姿勢で示す必要がある。子どもたちは、予想外の事態に教員がどう対処しているかをよく見ている。障害の有無に関係なく、必要に応じて支援をするということを伝えることが重要である。声掛けひとつをとっても、子どもからどう見えているかを意識するようにしていきたい。教員が適切な支援を実践できている学級では、課題を抱える子どもに対して周囲の子どもがサポートしている姿が見られるようになってきている。本校では、特別支援学級に在籍している子どもが、その子の適性に応じて通常学級に出かけていき学習を行っている。そこでよく目にするのは、周りの子たちが、ごく自然にサポートや相談に乗っている姿である。

また、特別支援学級で長く指導をしている教員が、現在在籍している子どもたちの特性や指導方法について、全教員に向けての講習や積極的に授業公開を行っている。さらには、特別支援学級の担任が通常学級の担任となったり、またその逆があったりと、特別支援学級との柔軟な交流があることによって、開かれた学級経営がなされている。こうした取り組みからか、実に子どもたちは自分らしく、のびのびと個性を発揮して学んでいる。

(2) 校内体制の充実

校内の特別支援教育の取り組みを具体的に推進するのが校内委員会である。つまりきや困難さを示す子どもを把握するとともに、校内の協働体制づくりや関係機関との連携を図りながら、効果的な支援を実現していく役目を担っている。

校内委員会の主な役割としては、

- 実態把握○担任への支援○校内の支援体制の検討○関係機関との連携
- 校内での研修会の計画・実施○保護者との相談○通信による保護者への啓発

などがある。校内委員会を組織するにあたっては、各学校の実態に応じて、現在の組織を見直し、無理なく支援できる校内組織をつくっていくことが大切となる。

新宿区においては、特別支援学級とは別に、校内において、特別に支援が必要な子どもを取り出して、コミュニケーション力の向上など、通常の教室の学習や生活に必要な資質・能力の育成を図っている。この教室を「まなびの教室」と呼んでいる。区内の何校かあるまなびの教室拠点校から、まなびの教室巡回指導教員が週に数回本校に来て、指導を行っている。

また他にも、各学級で学習状況に支援が必要な子どもについて指導する特別支援推進員、全体の学習の補助を行う学習指導支援員など、担任とチームでフォローアップの体制は整っている。あとは、全教職員が、情報の交換をしつつ個別の支援を具体化していくことが重要である。

（３）柏葉学級の教育

本校においては、子どもたちの発達段階や適性を踏まえて、個別に指導計画を立て、年齢や学年も加味しながら指導を行っている。その中で、特別支援学級の子どもが通常学級に出かけて通常の子どもと一しょに学ぶ交流学习を実施したり、様々なかたちで特定の学年や保護者と交流する学習プログラムをつくっている。

その一つが和太鼓の交流である。柏葉学級では、年間を通じて和太鼓の練習に取り組んでいる。そのなかで、和太鼓を通じた通常学級との交流を設定している。年間を通して取り組んでいる柏葉学級の子どもたちがリードして、和太鼓をたたき合う機会を設定している。学校公開の場では、地域や保護者とも一しょになって取り組むことを通じて、自信をもち、いきいきとした表情を感じられる機会となっている。

また本校ならではの取り組みとして、柏葉学級が中心となってポッチャという競技を楽しんでいる。NHK が主催する競技大会が令和５年度から本格実施となり、柏葉学級の子どもたちと通常学級の３年生たちがチームを組んで挑戦した。結果は令和５年度には優勝という結果であった。その後テレビ取材を受けたり、大人の大会に小学生チャンピオンチームとして何度も招待されるなど、たいへんな盛り上がりを見せている。

今年度は参加チームを２チームにして、夏休み前から夏休み中を通じて練習を積み重ね



都内の強豪校に

た。チームとして意思が通じ合わなければならなかったため、当初はうまくいかないときに、ひどく落ち込んでしまうことなどもあったが、そういった課題を乗り越えてチームワークを発揮した成果が出た。指導する担任も、柏葉学級と通常学級の担任が相互に力を合わせて、子どもたちの指導とフォローに多数が参加をした。そして普段はあまり関わり合うことのなかったそれぞれの保護者も、練習のサポートから応援までを一しょに行い、お互いの子どもたちの成長をたたえ合い喜び合った。

こうした交流の場においては、どちらが優位でどちらが尊重される立場であるかということではなく、同じ目線で教師も保護者も子どもたち同士も捉えていた。柏木小学校のインクルーシ

ブとは、同じ視点で子どもたち自身を理解し、未来を拓いていくことにほかならないと感じている。

(4) 柏葉学級の授業①

柏葉学級 1組 国語 絵本「あつちゃん あがつく」

柏葉学級では、教科書の進度に合わせての学習というより、その子の状況に応じた学習が展開されている。個別最適化学習である。したがって同一学年でも取り組んでいる内容や方法が違うことがあることが通常となっている。この授業は、学年に違いのある3人の国語の学習である。

★体験を通じて学ぶ 連想する

水筒を出して「かんぱーい」と、水筒を先生と子どもたちで乾杯の真似をする。みんなにこにこ顔で授業が始まった。教師はカードを出して子どもたちに見せる。カードにはニンジンの絵が描かれている。

「では、これを料理します。」

一人ひとり指名をして、包丁で切る真似を子どもは行う。

「トントントントン」

ニンジンのカードの裏側をめくると、細切れになった状態のニンジンが出てきた。次は玉ねぎ、ジャガイモ、お肉と順番に材料を切る真似を、机の上で子どもが行う。

一通り終わると、

「それでは、お鍋でいためてぐつぐつ煮ましよう。」

料理をしましょう

すると、お鍋の絵が登場して、裏返すとカレーライスの絵が出てきた。

「では、食べてください。」

と言われると、カレーライスの絵を渡された子どもたちは、大きな杯をあおるように、顔を上に向けて鍋ごと食べる真似をする。

「おいですか」

「お、い、し、い」

この学級には、発語の練習をしている子がいるため、先生といっしょに、1音1音言う練習をしている。終始笑顔だ。昨年度からいる子たちは、全く発語がなかったところから、1音ずつ声を出そうとしている。もちろん、先生や介助員が、応援をして、声を出し終わったところで、すかさず笑顔でほめている。ほめられた子どもたちもにこにこ顔である。

★冷たいのはどっち？

次に登場したのはアイスクリームの絵だ。そして、2つのカード、一方には「あつい」、もう一方には「つめたい」と書いてある。

「〇〇ちゃん、アイスクリームはあついですか？ つめたいですか？」

発語がもう少しの子は、カードを指さし、発語ができる子は「つめたい」と答えるとともに、カードを指さす。一巡したところで、先生が別室から取り出してきたのは二本の缶コーヒーだ。一方は温めたもので、一方は冷やしたもののらしい。それほど熱いものではないようだが、びっ



料理をしましょう



この缶コーヒーは「あつい」それとも…

くりしないように、一方の缶コーヒーは布で巻いてある。それぞれをじかに触らせ「つめたい」か「あつい」のカードを指させる。

言葉を口頭だけで教わるのではなく、実感と言葉をつなげて覚える学習法である。一人ひとりアイスクリームの絵から「つめたい」を選ぶ学習、二つの温度の違う缶コーヒーから「つめたい」と「あつい」を選ぶ学習を実施している。

「今回は「あつい」「つめたい」という言葉が何を表しているのか、体験を通して獲得させていきたいです。でも、今回の学習は、きっかけにすぎません。言葉の獲得は、これからの普段の生活の中での指導が欠かせません。」

と話す小熊教諭。

実体験と言葉を結びつける作業は、知らず知らずのうちにに行われているものだと思っていたが、少しずつ積み上げていくものなのだと実感した。

★アイスクリームを完成させましょう

アイスクリームの輪郭がかかっている学習シートが一人一枚渡された。

「アイスクリームの絵ですが、色がついていけませんので、色をぬるか、シールを貼ってアイスクリームを完成させてください。」

子どもたちが選んだのは、全員シールだ。ピンクのシールを、アイスクリームの輪郭が記されている中に、薄く丸が書かれていて、そこにシールを貼っていく。思った以上にはやく、見る見る間に三人ともアイスクリームの絵は、ピンクで彩られていく。手先の作業は、知育でも大切とされている分野なので、どの子も相当なスピードで仕上げているのを見て、成長が順調に伴っていることを確認できた。

授業の最後の残り時間は、タブレットを出して、「ひらがな」をなぞってかたちを覚える学習だ。まだまだ握力が足らずに、筆圧が思い通りにならないお子さんにとって、タブレット端末に書かれたひらがなをなぞる学習は有効である。タブレット端末のひらがなの学習には、ひらがなの書き順ごとにひらがなを書いていくものや、なぞった部分は色が変わるものもあり、わかりやすくできている。

一時間を通して、笑顔や笑い声が絶えず、楽しみながら自然と学ぶ学習活動が展開されていた。ある程度、障害の重い子どもには、単なる座学ではなく、特別支援学校のような配慮やトレーニングと学習を組み合わせる必要がある。



アイスクリームの絵づくり



タブレット端末を用いた学習

(5) 柏葉学級の授業②

柏葉学級 3 組 算数 「時間」

柏葉学級の子が学ぶ算数は、数値をただ学ぶということとはできない。数の認識が通常の子どもたちと違って、理解しづらいためだ。したがって、今回の「時間」の学習についても、数を用いたゲーム的な体験を通して学ぶ学習となった。

子どもたちはめいめいに紙飛行機と計測記録用の用紙をもっている。ペアとなって、一方が紙飛行機を飛ばし、もう一方がストップウォッチを用いて計測する。

「せーの、3、2、1、0。」

紙飛行機が教室内を飛び回る。

「2 秒」

「3 秒、やったー」

「1 秒」

「えー」

思い思いにたのしんでいる。

「それでは記録を発表してもらいましょう」

「1 回目は 3 秒、2 回目は 2 秒」

「全部 1 秒」

発表することも、友達の話聞くことも大切な学習である。

「今回勉強したのは秒」でしたね。そのほかに時間、分もあります。」

「それでは、1 分は何秒でしたか」

「60 秒」

「2 分は」

「120 秒」

数に関心のある子が矢継ぎ早に答える。

「3 分は 180 秒」

「7 分は 420 秒」

数への反応が、思ったよりも素早い子たちがいて、びっくりさせられる。

「ちょっと意地悪な質問をするね。180 秒は何分何秒ですか」

「えっ、まって、1 分…20 秒」

先ほどは、すらっとでていたことも、聞き方が変わるとわからなくなる。

「では、次回は時計の計算の仕方を学習しますね」



紙飛行機を飛ばして飛んでる時間を計測

柏葉学級の担任によると、子どもたちの成長と理解度の進み具合は行きつ戻りつだという。でも思いがけないときに、急激な成長を認められることもあるそうだ。大切なのは、一人一人に寄り添い、適切な指導を心がけなければならないということである。まさに、特別支援教育は、教育の原点と言っているかもしれない。

V 教科の教育

各教科の単元構想図

1 社会に開かれた学習指導

まず押さえておきたいのは、現行の学習指導要領は、前述したように、変化する社会の中で学校が社会と連携・協働する「社会に開かれた教育課程」であり、実際の学習指導要領の前文では次のように表現されている。

教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。

(学習指導要領／前文より引用)

学校の教育が学校の中だけに閉じたものにならないようにする、というこの方向性は、指導要領全体で貫かれている。

2 「何を教えるか」から「何ができるようになるか」へ

現在大切にされている教育の視点は、教師が何を教えるか、だけではなく、学習する側の子どもの視点に立つことが必要となる。「何ができるようになるのか」という観点で、育成を目指す資質・能力を整理し、それを育成するために「何を学ぶか」指導内容を検討する必要がある。さらにその内容を「どのように学ぶか」を構成し、その際は「子ども一人ひとりの発達をどのように支援するか」を重視する。「何が身に付いたか」を評価で見取り「実施するために何が必要か」を併せて検討する。

以上の流れで、学習指導要領の枠組み自体を見直し、総則も抜本的に組み替えることを求めている。

学習指導要領等では、以下の6点に沿って改善すべき事項をまとめ、枠組みを考えていくことが必要となる。

「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)
「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)
「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)
「子供一人ひとりの発達をどのように支援するか」(子どもの発達を踏まえた指導)
「何が身に付いたか」(学習評価の充実)
「実施するために何が必要か」(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)

3 本校における各教科の指導の具体化

今回の学習指導要領の改訂は、たいへんな変革であった。それは今回の改訂が特に日本の社会が進んで行くであろう方向、そして2030年頃の日本そして世界のあり方を想定しようとして、学校教育をとらえ直しているところにある。そこで学校教育が意味をもつには、子ども自身は言うまでもなく、その保護者や世の人々が学校の教職員とともにあって学校のあり方を考え、さらに家庭・地域さらに社会全体のあり方を連動させていくべきことである。

当初、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)」は、そのための指導の方法等を充実させていく必要性とともに、がぜん注目を集めた。しかし、その代わりに中核となっているのが、「主体的・対話的で深い学び」である。このため重要なのは、「主体的・対話的で深い学び」の授業改善となる。改めてポイントを見ると、『学び』の本質として重要となる『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指した『アクティブ・ラーニング』の視点から、授業改善の取り組みを活性化していくことが必要」となっている。一般にアクティブ・ラーニングは、子どもたち自身に調査や討論、発表をさせるといった、学習活動を「アクティブ」にすることだと受け止められてきた。しかし、「形式的に対話型を取り入れた授業や特定の型を目指した技術の改善にとどまるもの」ではない、幅広い「資質・能力」を身に付けさせるような授業を行うことだ。ただアクティブ・ラーニングを行うだけでなく、それが本当に「主体的・対話的で深い学び」になっていて、着実に資質・能力

を育てているものになっているのかどうか問われることとなる。

これからの社会においては、学校において基礎・基本を学び、社会に出てから、改めて学んできたことを応用して仕事に生かす術を学び直すといった、学校教育と社会現場が連続しない状況は求められていない。本校の様々な学習活動が、地域の担ってきた地域社会で子どもを育成する役割を担おうとしているのと同じく、もはや区分けをして「座学としての学問を学ぶ」学校の役割を限定して考えるのでは事足りていない。予想がつきがたい社会変動の中であって、たくましく、自分の力を発揮し、さらに学び続けて、難しい課題に挑戦していくことことを課せられる社会であって、そのための学力を捉えなおすとともに、それが発揮される場面も想定して教育に生かしていくことが重要となってくる。

社会に開かれた教育課程とは、そういった未来社会のあり方を皆で考えつつ、改めて学校のミッションとは何かをとらえ直し、その実施のために教職員は言うまでもなく、いわば社会総かがりで取り組み、学びの主体者としての子どもを育成しようというのである。

そこで本校では、今一度教科の指導を見直し、各教職員が、おのこの担当する教科を、学習指導要領に合わせた教科ごとの「構想図」にまとめてみた。まだまだ荒削りであるが、学校全体で各自が研究して学んだことを共有することに意味があると考えている。今後は、これを保護者や地域、さらには子どもにもわかりやすいかたちで伝えていくことを目指していきたいと考えている。

国語科の指導

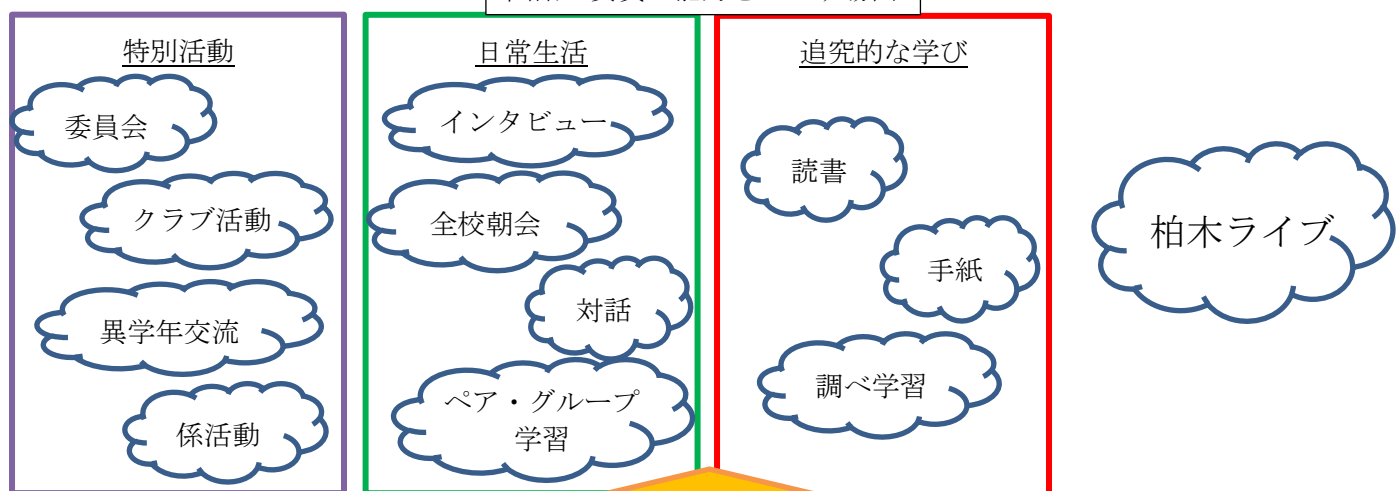
子 ど も	① 何ができるようになるか（資質・能力の整理）		
	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
	日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うようにする。	日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。	言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。
教 師	② 何を学ぶか（見方・考え方） 「言葉」による見方・考え方 言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉え、その関係性を問い直して意味付け、そのことを通して、自分の思いや考えを形成し深めること。		
	③ どのように学ぶか（学習指導の改善・充実）		
	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
	子ども自らが学習の目的や必要性を意識するために見通しを立てて振り返り、自身の学びや変容を自覚し、説明したり評価したりする。	子ども同士、子どもと教職員、子どもと地域の人々が、互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりすることや、本を通して作者の考えに触れ、自分の考えに生かすなどのことを通して、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う。	自分の思考の過程をたどり、様々な側面からどのようにとらえたのか問い直して、理解しなおしたり、表現しなおしたりしながら思いや考えを深める。さらに活性化させるために語彙を豊かにする活動を行う。
教 師	④ どのように支援するか（子どもの発達を踏まえた指導） ・ 学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場面を設け、児童が主体的に取り組める学習過程、実社会や実生活との関わりを重視した学習課題を設定する。 ・ 互いの知見や考えを広げ深める言語活動を設定する。 ・ 言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設ける。		
	⑤ 何が身に付いたか（学習評価の充実） ・ 日常生活において言葉の特徴や使い方、話や文章に含まれている情報の扱い方、我が国の言語文化に関する知識及び技能を適切に使うことができる。 ・ 言語を通して正確に理解したり適切に表現したりして伝え合い、言語を手掛かりとしながら論理的に思考したり、豊かに想像したりすることができる。 ・ 言葉がもつよさを認識するとともに、相手、目的や意図、場面や状況などに応じて、どのような言葉を選んで表現するのが適切であるのかを直感的に判断したり、話や文章を理解する場合に、そこで使われている言葉が醸し出す味わいを感覚的に捉えたりすることができる。		
	⑥ 実現に何が必要か（資質・能力の実現に向けて必要なもの） ・ 自分の意見や考えを話したり、必要な情報を集めたりして報告する活動をする。 ・ 考えたことや伝えたいことを書く学習活動を多くする。 ・ 説明や解説などの文章を読み、分かったこと考えたことを、話し合ったり文章にまとめたりする学習活動の充実。 ・ 学校図書館を利用し、調べたり考えたりする学習過程の設定。		

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で
正確に理解し適切に表現する資質・能力を育む

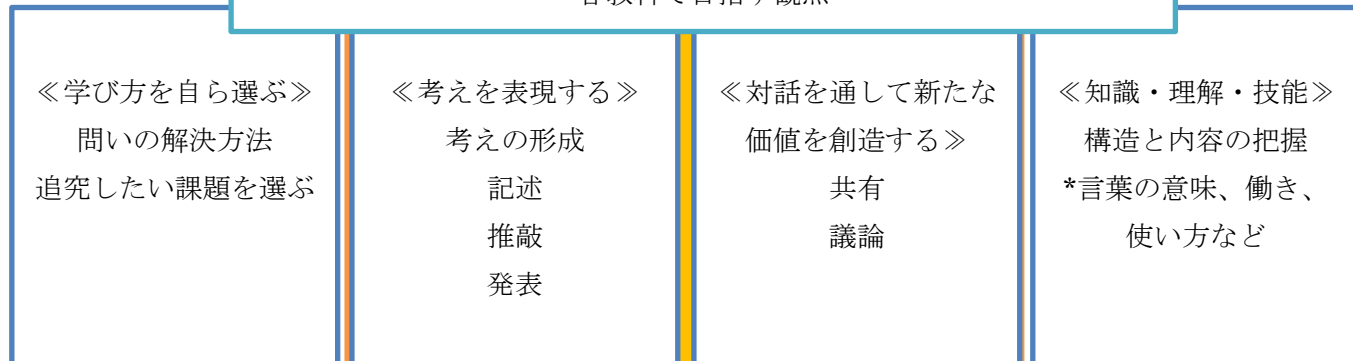
教科で目指す姿

学びと学び、学びと日常生活・他教科を関連付け、生かすことができる。(関連付け・振り返り)
自分の思いを正しく伝え、相手の思いを読み取ることができる。(話す・聞く、書く、読む)
自分の言語感覚を養い、対話を通して自分の言語感覚を広げる。(言語感覚の育成)

国語の資質・能力を生かす場面



各教科で目指す観点



学習計画・解決方法を考える

テーマ・話題の選択

問いをもつ・つくる
(感覚的、論理的、共感的、納得的、追究的)

なぜその活動をやするのか自分なりに意義をもつ
(単元の終わりでどうなっていたいのか)

学習材に出会う

話すこと・聞くこと

書くこと

読むこと

社会科の指導

子 ど も	① 何ができるようになるか（資質・能力の整理）		
	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
	社会的事象等に関する理解などを図るための知識と社会的事象等について調べまとめる技能を身に付ける。	社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力、社会に見られる課題を見出し、社会へのかかわり方を選択・判断する力や、選択・判断したことを適切に表現する力を身に付ける。	主体的に調べ、意欲的に追究しようとする態度、より良い社会を考えて学んだことを社会生活に生かそうとする態度、多角的な考察や理解を通して涵養される地域社会や我が国の国土・歴史等への愛情などを育てる。
	② 何を学ぶか（見方・考え方） 社会事象等を見たり考えたりする際の視点や方法 時間・空間・相互関係などの視点に着目して事実等に関する知識を習得し、それらを比較・関連付けなどして考察・構想し、特色や意味などの概念等に関する知識を身に付けること。		
教 師	③ どのように学ぶか（学習指導の改善・充実）		
	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
	学習過程の中で動機付けや方向付けを重視し、社会生活や社会的事象等にかかわる学習内容・活動に応じた振り返りの場面で自分の考えを表現する。	実社会で働く人々が連携・協働して課題を解決している姿を調べたり、実社会の人々の話を聞いたりして調べたことや考えたことを深い学びとのかかわりに留意して話し合う。	「社会的な見方・考え方」を用いた考察や説明、議論等の学習活動が組み込まれた課題を追究したり解決したりする活動を行う。
	④ どのように支援するか（子どもの発達を踏まえた指導） ○発達段階に応じ、「公民としての資質・能力の基礎」の育成を目指した学習過程を組む。 ○主権者の育成、防災・安全への対応、海洋や国土の理解、グローバル化、産業構造の変化、持続可能な社会の形成等に対応した学習内容を充実させる。 ○「社会的な見方・考え方」を用いた考察、構想や説明、議論等の内容を充実させる。 ○社会とのかかわりを意識して課題を追究したり解決したりする活動を重視する。		
教 師	⑤ 何が身に付いたか（学習評価の充実）→上記の3観点で、単元を通して評価する。 ○社会的事象等の意味、特色や相互の関連を多角的に考察できる。 ○実社会の課題を把握し、解決に向けて学習したことを基に社会へのかかわり方を選択・判断できる。 ○社会事象等についての自分の考えを論理的に説明や主張ができる。		
	⑥ 実現に何が必要か（資質・能力の実現に向けて必要なもの） ○現行指導要領の伝統・文化への理解を深めつつ、将来につながる現代的な諸課題を踏まえた教育内容の改善・充実を図ること。 ○児童が社会に見られる諸課題を切実にとらえ、その課題を追究したり解決したりする活動（問題解決的な学習）を単元を通して構想すること。 ○動機付けや方向付け、情報収集や考察、まとめや振り返りなどを充実させること。		

【社会科の目標】 課題を追究したり解決したりする活動を通して、社会的な見方・考え方を働かせて、習得した知識技能を活用して調べたり思考・判断したり表現したりしながら課題の解決をする

教科で目指す姿

- ・社会事象に興味関心をもち、主体的に学ぶ子
- ・社会的な事象から学習問題を見出し、問題解決に必要な知識・情報を集め、よりよい社会について考える子
- ・社会の中で自分は何ができるのか考え、地域・社会に参画しようとする子（意識・態度）

課題に対する自分の結論をまとめる

他者との
話し合いで
深める

他者との話し合
いで深め、新た
な課題を見出す

学び方を自ら選ぶ

考えを表現する

対話を通して新たな
価値を創造する

知識・理解
・技能

課題追究

ひと・もの・ことから
アプローチの仕方を選ぶ

情報収集
資料の整理・分析

事実や理解したこと
を小グループで対話

社会生活に必要な知識
を調べてまとめる

学習課題をつかむ

気付いたこと、知っていることを
ノートに書き出す

単元の目標（地理歴史・公民）←教師から提示

社会的事象

子ども	① 何ができるようになるか（資質・能力の整理）		
	知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性等
	数量や図形などについて基礎的・基本的な概念や性質などを理解するとともに、日常の事象を数理的に処理する技能を身に付けるようにする。	日常の事象を数理的に捉え、見通しをもち筋道を立てて考察する力、基礎的・基本的な数量や図形の性質などを見出し統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表したり、目的に応じて柔軟に表したりする力を養う。	数学的な活動の楽しさや数学のよさに気づき、学習を振り返ってよりよく問題解決しようとする態度、算数で学んだことを生活や学習に活用しようとする態度を養う。
教師	② 何を学ぶか（見方・考え方） 事象を数量や図形およびそれらの関係などに着目して捉え、根拠を基に筋道を立てて考え統合的・発展的に考えること。		
	③ どのように学ぶか（学習指導の改善・充実）		
	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
	子ども自らが問題の解決に向けて見通しをもち、粘り強く取り組み、問題解決の過程を振り返り、よりよく解決したり、新たな問いを見出したりする。	事象を数学的な表現を用いて理的に説明したり、よりよい考え考えに高めたり、事柄の本質について話し合い、よりよい考えに高めたり、事柄の本質を明らかにしたりする。	数学に関わる事象や、日常生活や社会に関わる事象について、「数学的な見方・考え方」を働かせ、新しい概念を形成したり、よりよい方法を見出したりするなど、新たな知識・技能を身に付けてそれらを統合し、思考、態度が変容する。
教師	④ どのように支援するか（子どもの発達を踏まえた指導）		
	・数と計算の意味について理解させたり、自分の考えを表現させたりするために、発達段階に応じて、具体物や半具体物などの教具を適宜用いる。 ・低学年から計算の結果に見通しをもつ、およその大きさや形を捉えることの素地を培うための指導を工夫する。 ・数学の用語・記号については指導学年以降において、それら用語・記号を用いる能力を次第に伸ばしていくよう配慮する。		
	⑤ 何が身に付いたか（学習評価の充実）		
	・日常の事象を数理的に捉え、見通しをもち筋道を立てて考察する力 ・基礎的・基本的な数量や図形の性質などを見だし統合的・発展的に考察する力 ・数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表したり目的に応じて柔軟に表したりする力		
教師	⑥ 実現に何が必要か（資質・能力の実現に向けて必要なもの）		
	・数学的活動を楽しめるようにする機会を設けること ・算数の問題を解決する方法を理解するとともに、自ら問題を見だし、解決するための構想をたて、実践し、その結果を評価・改善する機会を設けること ・具体物、図、数、式、表、グラフ相互の関連を図る機会を設けること ・友達と考えを伝え合うことで学び合ったり、学習の過程と成果を振り返り、よりよく問題解決できたことを実感したりする機会		

自ら学び、考え、判断し、行動し、社会で自立する力

算数科で目指す姿

事象を、数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、根拠を基に筋道を立てて考え、統合的・発展的に考える姿。

教科の目標

日常生活で遭遇する問題を数学的に解決する能力を身に付ける。

- ・わかりやすくするために、具体物や具体例に置き換えたり、図や表、グラフなどに整理したりする力
- ・複数のデータから法則や関係性を見出す力
- ・友達の考えや提案を理解し、対応を考える力
- ・根拠を明確にして説明する力

試行錯誤

判断

協働

知恵

経験

学び方を自ら選ぶ

考えを表現する

対話を通して新たな
価値を創造する

知識・理解
・技能

既習事項を使って新たな知識や考え方を習得する。

解き方が定まった問題を効率的に解いたり、定められた手続きを効率的にこなしたりする力

子 ど も	① 何ができるようになるか（資質・能力の整理）		
	知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力、人間性
	・ 自然事象に対する基本的な概念や性質・規則性の理解・理科を学ぶ意義の理解 ・ 科学的に問題解決を行うために必要な観察・実験等の基本的な技能	6 年自然事象の変化や働きについて、その要因や規則性、関係を多面的に分析し考察して、より妥当な考えをつくり出す力 5 年手段や説などをもとに質的变化や量的変化に着目して解決の方法を発想する力 4 年見出した問題について既習事項や生活経験をもとに根拠のある予想や仮説を発想する力 3 年自然事象の差異点や共通点に気付き問題を見出す力	・ 自然に親しみ、生命を尊重する態度 ・ 失敗してもくじけずに挑戦する態度 ・ 科学することの面白さ ・ 根拠に基づき判断する態度 ・ 問題解決の過程に関してその妥当性を検討する態度 ・ 知識・技能を実際の自然事象や日常生活などに適用する態度 ・ 多面的、総合的な視点から自分の考えを改善する態度
	②何を学ぶか(見方・考え方)		
	自然の事物・現象を、質的・量的な関係や時間的・空間的な関係などの科学的な視点で捉え、比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えること。		
	③どのように学ぶか(学習指導の改善・充実)		
	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
	・ 問題から、課題や仮説につなげ、観察・実験の計画を立案する学習場面の設定 ・ 観察・実験の結果分析、解釈から学習を振り返り検証 ・ 得られた知識や技能を基に、新たな視点で事物・事象を把握	・ 課題の設定や検証計画の立案、観察・実験の結果の処理、考察・推論する場面では、あらかじめ個人で考え、その後意見交換・議論を通して、自分の考えをより妥当なものにする学習場面の設定	・ 自然の事物・現象について、「理科の見方・考え方」を働かせて、探究の過程を通して学ぶことにより、資質・能力の獲得に接続 ・ 学習内容の発展、応用によって、次の問題や日常生活などの問題発見と解決への接続
	④どのように支援するか(子どもの発達を踏まえた指導)		
教 師	○子ども自らが実感する「考える楽しさ」の共有 ○指導体制の強化(理科支援員等の活用) ○教員研修の充実（校内研修や予備実験の実施） ○ねらいを踏まえた指導法の共有 ○ICT環境の整備		
	⑤何が身に付いたか(学習評価の充実)		
	○学習過程を明らかにし、形成的評価を用いて、学習者の誰もが、学習結果から考察や結論にまで到達できるようにする。		
	⑥実現に何が必要か(資質・能力の実現に向けて必要なもの)		
	○各教員が改訂の趣旨を理解し、指導計画等を作成すること ○教員が、観察・実験を中心とした探究的な学習への転換		

自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を育成することを目指す。

教科で目指す姿

- ・ 自然事象に興味関心をもち、主体的に学ぶ子
- ・ 自然事象から学習問題を見出し、問題解決に必要な学習計画を立て見通しをもち観察・実験に取り組む子
- ・ 社会の中で自分は何ができるのか考え、地域・社会に参画しようとする子（意識・態度）

解決方法を自ら選ぶ

考えを表現する

対話を通して新たな
価値を創造する

知識・理解
・ 技能

問題に対する結論をもとに

他者との
話し合いで
深める
(中学年)

他者との話し合
いで深める
新たな課題を
見付ける
(高学年)

観察・実験

計画

予想・仮説

学習課題をつかむ

気付いたこと、知っていることを

単元の目標（エネルギー、粒子、生命、地球）

↑ 教師から提示

自然の事象・現象

子 ど も	① 何ができるようになるか（資質・能力の整理）		
	知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性等
	・曲想と音楽の構造との関わりについて理解し、音楽活動を通して、音楽用語の意味や働きについて理解する。 ・自分で、また友達と一緒に音楽表現をしたり、自分の思いや意図を音楽で表現するための技能を身に付ける。	・感性を働かせて、音楽を形作っている要素を聴き取り、要素相互の働きが生み出す音楽のよさや、面白さを感じ取りながら、知識や技能を活用して、以下の能力を身に付ける。 ・音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図を見いだす力 ・楽曲や演奏の良さを味わい、自分にとっての音楽の良さを見いだす力	・リズム感、旋律感などの音楽の特性を感じ取る感性や、美しいものや優れたものに接して感動する情感豊かな心、音楽を愛好する心情を育てる。 ・協働して音楽活動する喜びを実感し、音楽の学習に主体的に取り組む態度を身に付ける。
教 師	② 何を学ぶか（見方・考え方）		
	音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を形作っている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などに関連付けて考えること		
	③ どのように学ぶか（学習指導の改善・充実）		
	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
	体を動かす活動を取り入れて、音楽のよさを感じ取れるようにし、音楽によって喚起されるイメージや気持ちの変化に気付く。	音楽表現・鑑賞の過程において、「音楽的な見方・考え方」を働かせて、互いの気付きや思いを交流したり、共有したり、共感し合う。	音楽に出合う場面を大切にし、「音楽的な見方・考え方」を働かせて、音楽と立体的に関わる。また聴き取ったことを言葉や体の動きなどで表現・比較・関連付けし、音楽との一体感、要素の働きなどを共有・共感する。
教 師	④ どのように支援するか（子どもの発達を踏まえた指導）		
	○各学年に応じた「音楽的な見方・考え方」を身に付けさせるため、題材のねらいと、それを実現する学習過程を明確にする。 ○学習過程において「知識・技能」習得のために、個に応じた手だてをもつ。 ○一人で考える、または友達と考えたり演奏したりする試行錯誤の時間を確保し、音楽を作り上げる感動を共有させる。 ○学年発表や音楽会等を通して、成功体験を十分に味わわせることで、音楽を楽しむ心情と豊かな感性を育む。		
	⑤ 何が身に付いたか（学習評価の充実）		
	○鑑賞領域の学習では、音楽のよさや美しさについて自分なりの考えをもち、味わって聴くことができる学習過程を組み、学習活動を工夫する。 ○指導と一体となる評価にするために、明確な指導の目標を設定し、学習活動のどの場面で、子どもの姿をどう評価するか明確にする。 ○題材のねらいは学習指導要領の言葉をより具体的に表し、活動のプロセスの中で子どもが音楽の要素に気付き、音楽に対する価値観がどう変容したかを評価する。		
	⑥ 実現に何が必要か（資質・能力の実現に向けて必要なもの）		
	○表現領域の学習では、音楽表現についての創意工夫や、思いや意図をもって表現できる学習過程を組み、学習活動を工夫する。		

教科で目指す姿

- 課題意識をもちながら「音楽的な見方・考え方」を働かせて主体的に音楽活動に関わる子 【主体的】
- 他者との学び合いを通して、自分の音楽表現や考え方、感じ方を広げて音楽活動を楽しむ子 【対話的】
- 音楽での学びを、次の学びや生活に生かそうとする子 【深い学び】

教科の目標

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1)曲想と音楽の構造との関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。
- (2)音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。
- (3)音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。

自分にとって 価値のある かけがえのない音楽

《学び方を自ら選ぶ》

- ・音楽表現についての思いや意図を表す方法（発言・記述・図形）
- ・創作活動や記譜の方法（タブレット端末・記述・録音）

《考えを表現する》

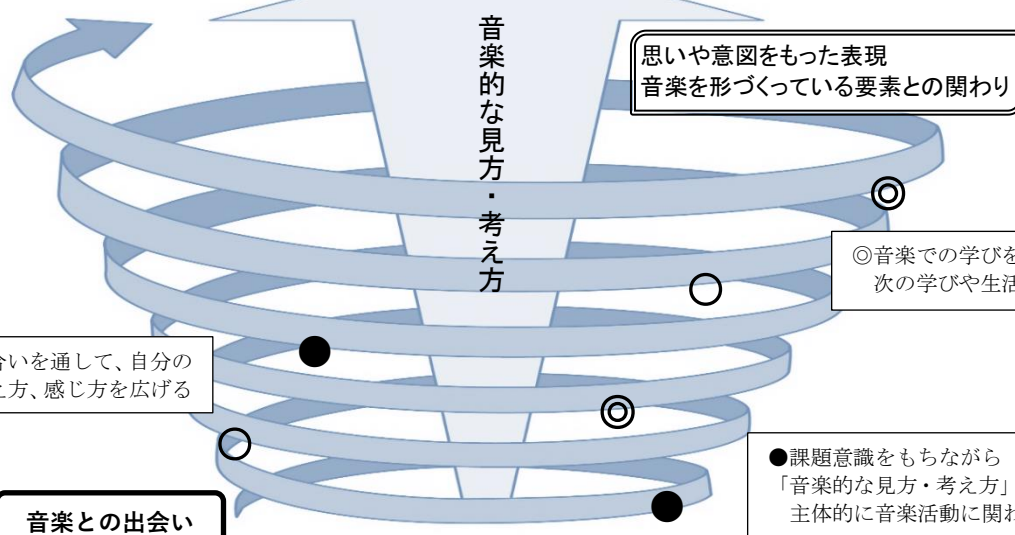
- ・音楽を形づくっている要素の働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取り、要素の関わりについて考え、どのように表すかについてもった思いや、音楽を聴いて見いだした曲や演奏の楽しさを音で表そうとしたり発言したり記述したりする。

《対話を通して新たな価値を創造する》

- ・他者の気づきや考え、表現に触れ、自分の表現や考えに生かす。
- ・共に音楽表現を創造する活動を通して、協調しながら試行錯誤を繰り返し、自分にとって価値のあるかけがえのないものを創り出す。

《知識・理解・技能》

- ・曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解する。
- ・表したい音楽表現をするために必要な歌唱、器楽、音楽づくりの技能を身に付ける。



子 ど も	① 何ができるようになるか（資質・能力）		
	知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性等
	対象や事象を捉える形や色などの造形的な視点について理解することなど	感性や想像力を働かせて、形や色などの造形的な視点で対象や事象をとらえ、造形的なよさや美しさ、表したいことや表し方について考え、創造的に発想や構想する力など	・様々な対象や事象を心を感じ取る感性 ・感性を働かせながら味わう、つくりだす喜び ・造形的な創造活動に主体的に取り組む態度
	② 何を学ぶか（見方・考え方）		
	感性や想像力を働かせ、対象や事象を形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと。また身体を通して知性と感性を融合させながら学び、多様で柔軟な発想、他者との協働、自己表現ともに自己形成していくこと。		
	③ どのように学ぶか（学習指導の改善・充実）		
	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
	表現・鑑賞の場面で形や色などの造形的な視点に意識を向けて考えることや、自分の表現・鑑賞を充実し、振り返ることによって次の学びにつなげていくこと。	作品を見合い話し合う機会を設け、形や色などについて他の見方や感じ方の違いを理解し、自分の見方、感じ方を広げるなどの言語活動を充実させること。	表現の能力と鑑賞の能力、造形に関連する他の学習活動などを相互に関連して働くようにし、交流を密にすることで資質・能力を確実に身に付け、積み重ねていくこと。
	④ どのように支援するか（子どもの発達を踏まえた指導）		
教 師	○学習活動や表現方法に幅をもたせる。 ○表現や鑑賞の指導を通して子どもが共通事項の内容の関わりに気付くようにする。 ○共通事項の指導にあたっては、内容に配慮し、必要に応じてその後の学年で繰り返し取り上げる。 ○表現したい思いを大切にしながら活動できるようにし、自分のよさや可能性を見だし、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養う。 ○各活動において互いの良さや個性を認め尊重し合うようにする。 ○材料や用具については必要に応じて初歩的な形で取り上げたり、繰り返し取り上げたりする。 ○版に表す経験や土を焼成する経験ができるようにする。 ○子どもや学校の実態に応じて地域の美術館などを利用したり連携を図ったりする。 ○言語活動を充実させる。 ○コンピュータ、カメラなどの情報機器の利用は必要性を十分に検討して利用する。 ○創造することの価値に気付き創造性を大切にする態度を養う。		
	⑤ 何が身に付いたか（学習評価の充実）		
	○一人一人が感じ取りながら考え、自分なりに理解し、表現したり鑑賞したりする。 ○変化する状況や課題に応じて主体的に活用できる技能を習得する。		
	⑥ 実現に何が必要か（資質・能力の実現に向けて必要なもの）		
	○感性や想像力を働かせて表現したり鑑賞したりする授業を設定する。 ○心や体を使って触れたり感じたりする体験や、人との関わりを通してよさや価値を実感する活動の重視。		

【図画工作科の目標】

表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成することを目指す。

【図画工作科を通してめざす児童像】

- (1) 造形的な視点で対象や事象を捉え、自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や場所の特徴を生かしたり、適切に用具を用いたりして、表し方を工夫して創造的に表すことができる子。
- (2) 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や考え方を深めたりすることができる子。
- (3) つくりだす喜びを味わうとともに、感覚や感性を磨き、楽しく豊かな生活を創造しようとする子。

【研究主題】「学ぶ」を楽しむ教育活動の展開 —子どもが本気になる学びのビジョン

学びを自ら選ぶ

考えを表現する

対話を通して新たな価値を創造する

知識・技能を身に付ける

【研究主題に迫るための図画工作科における重点と5つの視点】

『あそび的まなび』の視点を重視した造形活動

「自発的・主体的」「過程に価値がある」「自由に想像し、つくり出す楽しさ」「ルールのもとで工夫する面白さ」「模倣・比較・競争・挑戦・動き・スピード・変化・偶然性の面白さ」など遊びの要素を造形活動に取り入れる。

視点1

児童が学習や生活の経験を生かして新たな発見や挑戦する楽しさを味わえる

指導計画

6年間を見通して資質・能力が向上するよう、楽しく挑戦し続けられるような学習指導計画によって、児童自ら造形活動に取り組むようになる。

視点2

共通のテーマや、材料や技法などの設定がありながら、児童にとって自由度が高い題材設定

資質・能力の育成をふまえて、造形活動での選択の幅を広げ、自由度の高い題材設定によって、多様な表現が生まれ、造形的なものの見方・考え方が広がる。

視点3

児童が材料・道具・場所・表し方などを自ら選択し工夫して、表現・鑑賞したくなる環境設定

材料や道具、活動場所、資料等の選択や配置、人的構成など、環境設定を工夫することで、表現や鑑賞の活動が促され、造形的なものの見方・考え方が広がり、深まる。

視点4

児童が表現や鑑賞を楽しみながら対話し、造形的な見方・考え方を広げ深める学習展開

材料や空間、人の構成の工夫、導入やふりかえりの活動の充実など、学習展開を工夫することで、意欲が継続し、造形的な見方・考え方が広がり深まる。

視点5

次の造形活動や児童の生活につながる知識・技能の獲得と、価値の創造を促す学習内容

知識・技能を高め、学習経験や生活と関連させて新たな見方・考え方、意味や価値を創造する学習内容によって、つくり出す喜びを味わい、生活を豊かにする。

【あそび的まなびを重視した中学年の実践事例】

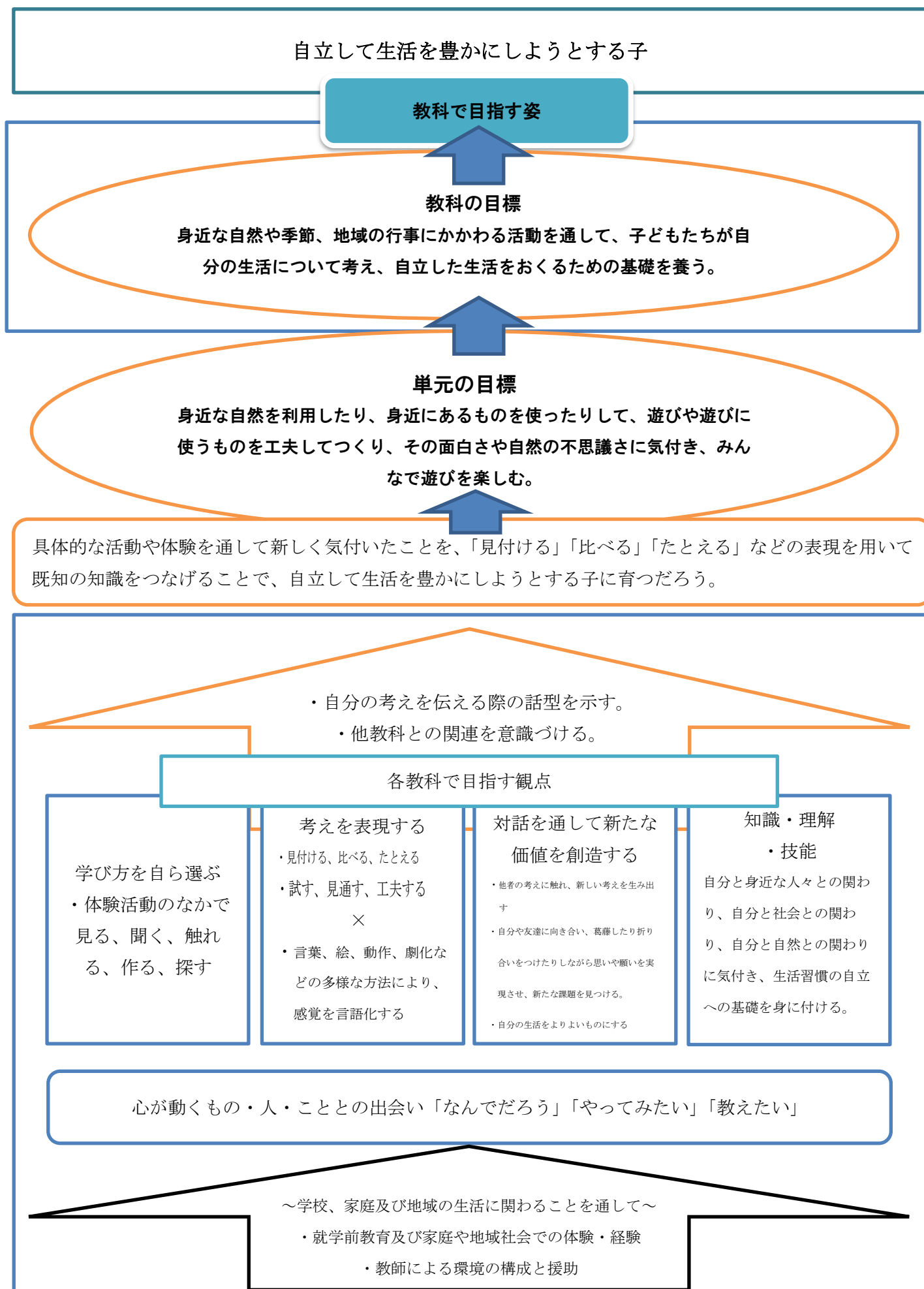
①「ファッションショーをしよう」A表現(2)ア、イ B鑑賞(1)

基本のドーム型から帽子、さらに服などをつくり、なりたい自分に変身する。ファッションショーを開催して、効果的に見せる工夫と見る楽しみを味わう。ファッション誌の1ページをつくる。ファッションやエディトリアルデザインとの関連。

②「居心地のいい場所」A表現(1)ア、イ B鑑賞(1)

材料となる段ボールの感じを十分に味わい、これまでの学習経験を生かしてイメージを広げたり、表し方を考える。友だちと関わり合いながら多様な表現をつくり出し、全身の感覚を通して味わう内容。形や色による空間の変容、住環境へ気づき。

子 ど も	① 何ができるようになるか（資質・能力の整理）		
	知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性等
	活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。	身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。	身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。
	② 何を学ぶか（見方・考え方） 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする事 ③ どのように学ぶか（学習指導の改善・充実）		
教 師	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
	・ 子どもの思いや願いを実現する体験的活動を充実させる。 ・ 学習活動の成果や過程を表現し、振り返ることで得られた手応えや自信を得られるようにする。	・ 他者との協働や伝え合い交流する場の設定。 ・ 表現活動を工夫し、体験活動と表現活動とが豊かに行き来する相互作用を重視する。	・ 気付いたことを基に考え、新たな気付きを生み出し、関係的な気付きを獲得するようにする。 ・ 自分自身の実感の伴った言葉にして表したり、様々な事象と関連づけて捉えようとしたりすることで気付きの質を高める。
	④ どのように支援するか（子どもの発達を踏まえた指導） ○ 具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自分との地域の人々、社会及び自然との関わりが具体的に把握できるような学習活動を行う。 ○ 動物や植物への関わり方が深まるような、継続的な飼育、栽培を行うようにする。 ○ 2年間を見通し、他教科との関連を積極的に図り、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間の設定を行う。		
	⑤ 何が身に付いたか（学習評価の充実） ○ 自分と身近な人々、社会及び自然との関わりについて考えることができ、それらのよさやすばらしさ、自分後の関わりに気付いたり、安全で適切な行動をしたりすることができる。 ○ 工夫したり楽しんだり、活動のよさや大切さに気付き、自分たちの遊びや生活をよりよくすることができる。 ○ 自分の生活や成長、身近な人々の支えについて考えることができ、自分のよさや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活することができる。 ⑥ 実現に何が必要か（資質・能力の実現に向けて必要なもの） ○ 具体的な活動や体験を試行錯誤して繰り返していく学習過程の工夫。 ○ 伝え合い交流する場の工夫。 ○ 言葉などで振り返り表現する機会を設けること。 ○ 子どもが示す多様性を生かし、子どもの学びを豊かにすること。		



子 ど も	① 何ができるようになるか（資質・能力の整理）		
	知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性等
	各種の運動の特性に応じた 行い方及び身近な生活にお ける健康についての理解を 図るとともに基本的な動き や技能を身に付ける。	運動や健康についての自己 の課題を見付け、その解決 に向けて思考・判断し、他 者に伝える力を養う。	運動に親しむとともに健康 の保持増進と体力の向上を 目指し、楽しく明るい生活 を営む態度を養う。
	② 何を学ぶか（見方・考え方） 体育や保健の見方・考え方とは、運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽し さや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた「す る・見る・支える・知る」の多様な関わり方と関連付けることである。		
教 師	③ どのように学ぶか（学習指導の改善・充実）		
	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
	運動の楽しさや健康の意義 等を発見し、運動や健康に ついての興味や関心を高め、 課題の解決に向けて粘り強 く自ら取り組み、それを考 察するとともに学習を振り 返り、課題を修正したり新 たな課題を設定したりする。	運動や健康についての課題 の解決に向けて、児童が他 者（書物等を含む）との対 話通して、自己の思考を広 げ深めていく学びの過程、 自他の運動や健康について の課題の解決を目指して、 協働的な学習に取り組む。	自己の運動や健康について の課題を発見し、解決に向 けて試行錯誤を重ねながら、 思考を深め、よりよく解決 する。
	④ どのように支援するか（子どもの発達を踏まえた指導） ○学習したことを実生活や実社会に生かし、豊かなスポーツライフを継続することが できるよう、系統性のある指導ができるようにする。 ○各学年に応じた「体育的な見方・考え方」を身に付けさせるための学習過程を組む。 ○全ての子どもが、楽しく、安心して運動に取り組むことができるようにし、その結 果として体力の向上につながるよう指導する。 ○運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童への指導の在り方について配慮する。		
教 師	⑤ 何が身に付いたか（学習評価の充実）		
	○各種の運動の特性に応じた行い方及び身近な生活における健康についての理解を図 るとともに基本的な動きや技能。		
	○粘り強く意欲的に課題の解決に取り組むとともに、自らの学習活動を振り返りつつ 仲間とともに課題を解決し、次の学びにつなげる主体的・協働的な学習過程を工夫 する。		
	○運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考・判断し、他者 に伝える力。		
教 師	○運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を 営む態度。		
	⑥ 実現に何が必要か（資質・能力の実現に向けて必要なもの）		
	○資質・能力の三つの柱を確実に身に付けるために、その関係性を重視した学習過程 を工夫する。		
	○粘り強く意欲的に課題の解決に取り組むとともに、自らの学習活動を振り返りつつ、 仲間とともに課題を解決し、次の学びにつなげる主体的・協働的な学習過程を工夫 する。		

生涯にわたって心身の健康を保持増進するための豊かなスポーツライフの実現のための体育

教科で目指す姿

愉しさを追究しながら自ら身体を動かす児童

愉しさを追求するための単元・授業サイクル

領域の目標

単元の目標

愉しむ

広がる → 教える

する

つかむ

知る

(領域によって事前に領域・単元目標を知らせる場合もあり)

上記のサイクルにのっとり目指す観点??

学び方を
自ら選ぶ

知識
理解
技能

「知る」「する」

対話を通して
新たな価値を
創造する 「する」
「つかむ」「広がる」

考えを表現
する
「広がる」

- ① エンジョイ (楽しむ)
- ② タクティクス (コツ・作戦)
- ③ ライバル (二人で競う)
- ④ ストイック (技能向上)

技能を知る
試す
時間の設定

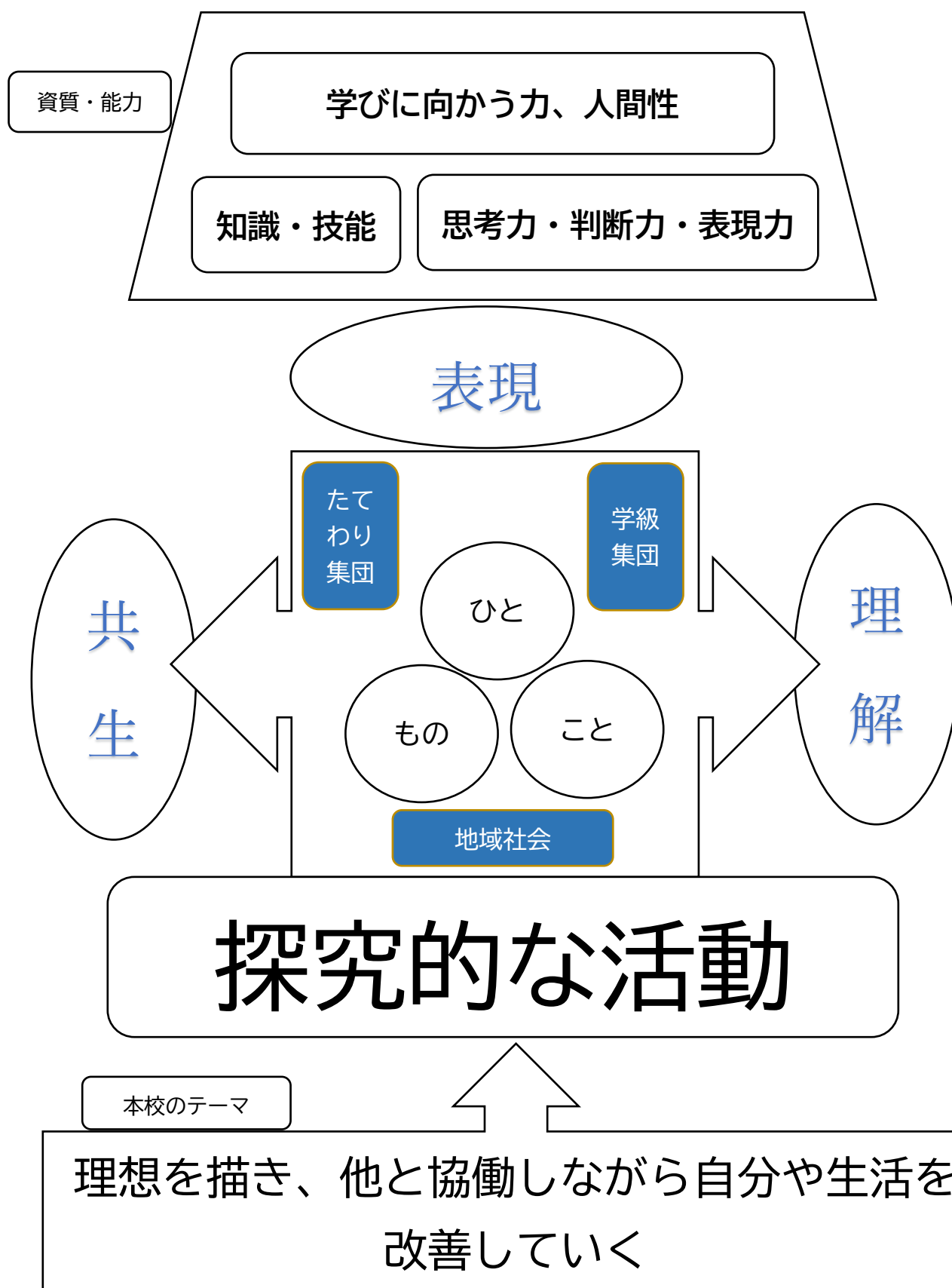
(タブレット端
末で調べる?)
(くりかえし
試し、練習で
きる時間の設定)

する→つかむを
繰り返し行う時
間の確保の中で
グループ内で技
能や作戦を話し
合いをする時間
の確保

どのような
練習・取り
組みをした
か個人でグ
ループで発
表する時間
の確保

総合的な学習の時間の指導

子 ど も	① 何ができるようになるか（資質・能力の整理）		
	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
	・課題について横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して獲得する知識（及び概念）・技能。 ・探究的な学習の良さの理解	探究的な学習を通して身に付ける課題を見いだし解決する力 ・課題設定 ・情報収集 ・整理・分析 ・まとめ・表現 など	・主体的な探究活動の経験を自信につなげ、次の課題へ進んで取り組もうとする態度を育てる。 ・協働的な探究活動の経験を実社会・実生活への興味・関心へとつなげ、進んで地域の活動に参加しようとする態度を育てる。
	② 何を学ぶか（見方・考え方） 各教科等における「見方・考え方」を総合的に働かせて、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会や実生活の文脈や自己の生き方と関連付けて問い続けること。 ③ どのように学ぶか（学習指導の改善・充実）		
	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
	・課題設定と振り返りを重視 ・自分事として課題を設定し、解決の見通しをもった学習活動を設定。 ・振り返りは、自己変容を自覚し、次の学びへと向かうようにする。	・多様な他者と協働的に探究活動に取り組み、生きて働く知識や技能を習得、他者からの多様な情報を得る、新たな知を創造する場を構築 ・自己との対話・文献・ＩＣＴ機器等を通しての様々な対話	各教科等に応じた「見方・考え方」を総合的に働かせて探究することで、個別の知識や技能は関連付けられて概念化し、能力は実際の活用場面と結び付けて汎用的となり、多様な文脈で使えるものとなる。
教 師	④ どのように支援するか（子どもの発達を踏まえた指導） ○子どもの課題意識を連続発展させること ○魅力的な教材を開発すること ○教科等の学習が活用され、探究的に発展していく学習活動にすること ○他者と協働して取り組む活動にすること ○学習の蓄積を活用し、個に応じた適切な指導を行うこと		
	⑤ 何が身に付いたか（学習評価の充実）多様な評価 ○年間を通した見通しと時間の確保・運用 ○発達の段階に合わせた適切な支援 ○エピソードの蓄積、子どもの綴り、ポートフォリオ等を用いた見取りをもとに評価指標に照らし合わせ、長期的な評価 ○個と集団の在り方や子どもの姿は日々変化するので、一面的、一時的な評価と指導ではなく、多面的、長期的な支援と評価を行う。 ⑥ 実現に何が必要か（資質・能力の実現に向けて必要なもの） ○年間を通した見通しと時間の確保・運用 ○発達の段階に合わせた適切な支援		



【生活単元学習とは】

生活単元学習は、児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的・体系的に経験することによって、自立や社会参加のために必要な事柄を実際・総合的に学習するものである。生活単元学習では、広範囲に各教科等の目標や内容が扱われる。

単元で目指す姿

- ◎個々の児童生徒の自立と社会参加を視野に入れ、個別の指導計画に基づき、計画・実施
- 児童生徒が目標への意識や期待をもち、見通しをもって、単元の活動に意欲的に取り組む。
- 一人一人の児童が力を発揮し主体的に取り組むとともに、学習活動の中で様々な役割を担い集団全体で単元の活動に協働して取り組む。

単元の目標

培ってきた力の整理
単元計画の中で一人一人が培った力を活用する場面を見つける

一人一人が目指す姿

学び方を自ら選ぶ

考えを表現する

コミュニケーション能力

ICT 作成能力
文章作成能力
インタビュースキル

教科・領域の目標

生活科：具体的な活動や体験を通して、生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。（人との関わり、役割、手伝い・仕事、きまり、社会の仕組みと公共施設）

国語科：言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で理解し表現する資質・能力を育成することを目指す。（聞くこと・話すこと、書くこと、読むこと）

算数科：数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を次のとおり育成することを目指す。（図形、測定、データの活用）

自立活動：個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う。（人間関係の形成、環境の把握、身体の動き、コミュニケーション）

一人一人の課題に応じた手立て

一人一人が目指す姿

児童一人一人の
発達段階と課題の分析

実態把握

専門家指導

VI研究实践事例

第1学年 国語科学習指導案

日時 令和6年6月3日(月)
3校時 10時40分～11時25分
授業者 梶川 アヤ子

ねこと ねっこ

<授業の視点>

☆1 楽しみながら自然と学ぶことのできる学習活動の工夫

近年、幼児期の教育が重要視されている。幼稚園や保育園では、幼児期の内面から湧き出る好奇心や探索活動を大切にすることで、学校教育の礎となる「自ら学ぼうとする力」を培うべく、保育者が教育にあたっている。1年生のこの時期は、幼児期との接続期であり、好奇心や探究心に満ち、文字や数字に興味をもち、感じたことや考えたことをすすんで表現しようとする児童が多い。従来の授業では児童の「できる→分かる→楽しい」の流れを重視していたが、幼小の接続期であることを踏まえ、幼児教育に倣って「楽しい→できる→分かる」の流れを重視した学習指導を意識したい。担任が主導して教える時間だけでなく、身体を動かしたり友達と交流したりして楽しんでいるうちに付けたい力が身に付けられるよう、動作化や交流の時間、課題を主体的に選択する場面を取り入れることとした。

また、本単元の指導には「多層指導モデル MIM」を活用する。MIM とは、「通常の学級において、異なるニーズをもつ子どもに対応した指導・支援をしていこうとするモデル」(海津亜希子,「通常の学級における多層指導モデル MIMー読みのつまずきの早期把握・早期支援ー」国立特別支援教育研究所, 2019)である。今回は、「初期の『読み』の指導における最大の難関である『特殊音節』に焦点を当て、文字や語句を正しく読んだり、書いたり、なめらかに読んだりすることをめざす指導モデル」として MIM を取り入れた。促音を正しく読むために、「音の確認→視覚化→動作化→音と文字の対応」の流れを示し、児童が楽しみながら促音の読み書きを身に付けられるようにしていく。MIM を用いた特殊音節のルールを提示することで、今後、児童は表記の確かめを自分の力でできるようになる。それは自立した学び手になるための第一歩になるだろう。

1 本時の目標

促音の表記、助詞の「を」の使い方、句点の打ち方を理解し、文の中で使うことができる。

2 指導計画(全2時間) 本時第2時

第1時 促音の読み方と書き方を確かめる。

第2時 促音のある言葉と助詞「を」を使って、簡単な文を書く。

3 本時の主張

本単元「ねことねっこ」では、促音のある言葉について学習する。促音とは特殊音節の一つである。これまでに児童が学習してきた一音一字の原則と異なり、促音は「つまる音」で

あり音が消えたように聞こえる。そのため、表記する際に小さい「っ」を抜かしてしまうことが多く見られる。本単元では視覚的な支援や動作化を取り入れながら、促音の発音や表記のルールを理解できるようにする。特に、動作化を取り入れることで、書いた言葉を見ただけで正しく表記できたか確かめることが可能になる。

さらに、本時では促音のある言葉を集めるために、2つの課題を設定し選択できるようにした。既に促音のある言葉をたくさん知っている児童にとっては、難易度の高い課題②について試行錯誤しながら取り組む達成感や、自分の考えたクイズに友達が答える楽しさを味わうことができるだろうと考えられる。

4 本時の展開

時間	○学習内容・活動	●留意点 ☆評価
導入 10分	○「ねことねっこ」の唱歌を唱える。 ・範読→追いかけて読み→一斉読み ・声の大きさを変えたり、リズムに合わせて読んだり、色々な読み方で読む。 ・教科書に載っている促音のある言葉を読む。 ○本時の課題を知る。 ちいさい「っ」のつくことばをつかって、ぶんをつくりましょう。	●前時の学習を想起できるようにする。 ●1音1拍手、促音は手をグーにして、動作をつけながら文字数と音の関係を理解できるようにする。
展開 10分	○促音のある言葉を集めてノートに書く。 ・小さい「っ」はマスの2の部屋に小さく書くことを確かめる。 ・①または②のどちらかを選択して取り組む。 ①小さい「っ」がつく言葉を見つけてノートに書く。 がっかつ さっかあ たぶれっと など ②「ねこ」と「ねっこ」のように、小さい「っ」が入ると意味が変わる言葉を探してノートに書く。 ふく・ふっく まくら・まっくら さき・さっきなど	●書き出せない児童には、教科書や本などに出てくる言葉を見つけて書いたり、友達と相談したりするよう助言する。 ●難しい場合はもう一つの課題に変えてもよいこととする。 ☆進んで促音や濁音のある言葉を見つけようとしている。(観察・ノート)
10分	○集めた言葉を発表する。 ・ペアで伝え合う。 ・学級全体に発表する。	●できるだけ多くの言葉を板書し、児童の語彙を増やす。 ●動作化しながら文字と音の関係を確かめる。
10分	○促音のある言葉と助詞「を」を使って、簡単な文を書く。 ・教科書の文を視写する。 ・本時の学習で見つけた促音のある言葉と、助詞「を」を使い、ノートに簡単な文を書く。 ○つくった文を発表する。	●文の終わりには句点「。」を書くことを確かめる。 ☆促音の表記、助詞「を」の使い方、句点の打ち方を理解している。(ノート) ☆助詞「を」を使った語と語との続き方に注意して書いている。(ノート)
まとめ 5分	○学習内容を振り返る。 ・本時の学習で分かったことや、これからがんばりたいことを発表する。	

第2学年 算数科学習指導案

日時 令和6年6月14日(金)
第5校時 13時30分～14時15分
授業者 八木澤 愛乃

3けたの数 100より大きい数を調べよう

<授業の視点>

☆1 見方・考え方を発揮する学習の展開

本時では、数カードを使った学習であり、カードゲームを通して、数のまとまりに着目し、3位数の大きさの比べ方や数え方を考えていく算数的活動である。これまでの学習では、カードやブロック・図等を、数や言葉と関連付けて考えることを通して、10や100のまとまりに着目した見方へ理解を深めてきた。また、1000までの数の構成を多面的に捉え、数の大きさについての感覚を豊かにする学習もしてきた。それらの見方や考え方を数カードのゲームに活用しようとする力を持たせていきたい。

☆2 新たな気づきを生む対話の設定

本時では、ゲームを通して3桁の数についての理解をより一層高め、課題の解決に自信を持たせる。また、ペア学習での対話を通して、「カードでもっと大きい数を出したい」「ゲームに違うルールを入れるとおもしろい」といった新たな気づきを見つけていけると考えた。

1 単元の目標

1000までの数についてその意味や表し方を理解し、数の概念について理解を深め、図や式を用いて考える力を養うとともに、十進位取り記数法の仕組みを、数学的表現を用いて考えた過程を振り返り、そのよさに気づき今後の生活や学習に活用しようとする態度を養う。

- 2 指導計画(全12時間) 本時第10時
第1次 数のあらわし方としくみ(8時間)
第2次 何十、何百の計算(1時間)
第3次 数の大小(2時間)
まとめ 1時間

3 本時の主張

第1次、第2次では数の表し方や仕組み、何十、何百の計算の知識技能を身に付ける学習をしてきた。

本時では、ゲームを通じた活動を通して、既習の知識や、それを生かした児童の見方や考え方が発揮され、気づいたことをペアで対話できるような授業構成とした。ゲームを楽しむだけでなく、楽しさの中から学びを得られるような学習展開をしていきたいと考える。

4 本時の展開(10/12)

・数ゲームを通して、大きな数の比べ方を考えている。(思考・判断・表現)

時間	○学習内容・活動	●留意点 ☆評価
導入 10分	○前時で習った不等号について確認する。 ・2つの3桁の数を提示し、本時では、大きさ比べをすることを伝えながら、前時の復習をする。 ○問題提示	●不等号と数カードを用意し、ゲームでのやり方と同じように黒板に貼っていく。

	大きい数づくりゲームをしよう。 ○ルールの確認をする。 ・0～9、不等号カードを一人1セットずつ用意する。 ・一度置いたカードは動かさない。 ・一枚ずつ引き、引いた順で、百の位から裏返して置いていく。同じようにあと二回ずつカードを引き、十の位、一の位へ置く。できたカードを比べて、不等号カードを置き、大きい数ができた人が勝ち。 ○教師対児童でゲームをする。 ・まずはルール通りにゲームする。次に、教師の7のカードを百の位に置いたところで、児童側は次にどのカードを引きたいかを考えさせる。 ・なぜ8または9を引きたいのか、理由を考えさせ、百の位の大きさで数の大小が決まることに気付かせる。 ○めあての作成 どこでかちやまけがきまるのか、考えよう。	●ワークシートを配布して、ワークシートに書きながら進めていく。
展開 30分	○ペアでゲームをする。 ・ゲームの結果と、どこで勝ち負けが決まったのか、ワークシートに記入する。 ・ペア学習の進み具合を見て、途中でルールを変えたり、追加したりしてみる。 ※積んであるカードから、1枚ずつカードを引き、カードの<u>数字を見てから</u>一の位、十の位、百の位のどこかに置く。 ※<u>一度に3枚引き</u>、引いた数字を見てから、カードを裏返して置く。 ※<u>数カード1セット追加</u>する。 ○どこで勝ち負けが決まったのか（勝ち負けを判断する方法）を共有する。 【共有内容例】 ・3桁の数を比べるときは、百の位→十の位→一の位の順番に比較すればよいこと。 ・百の位の数が同じ場合には、十の位で比べること。 ・大きな数は百の位に置く。 ○めあてに対するまとめをする。 百の位→十の位→一の位のじゅんばんにくらべて、大きなくらいの数でかちまけがきまる。	●ペア学習の際に教師は児童に随時助言をする。「どこで勝ち負けが決まるのか」を考えるために、「勝つためにはどこを見たのか」等と問う。どの数字も百の位から比んでいることや、大きな数を大きい位に置きたいという意見から、大きな位に大きな数がくることが大事だということに気付かせる。 ☆数ゲームを通して、大きな数の比べ方を考えている。（発表・ワークシート） ●どこで勝ちや負けが決まるのか、ペアで話し合ったことを基に、全体で共有する。
まとめ 5分	○学習の振り返りをする。 ・学習感想を全体で共有する。	

第3学年 国語科学習指導案

日 時：令和6年10月4日（金）

第5校時：13時30分～14時15分

授業者：菅野 海都（3年1組）

文章を読んで感じたことを伝え合い、考えを深めよう。

「ちいちゃんのかげおくり」（光村図書「国語 三下 あおぞら」）

＜授業の視点＞

☆学び方を自ら選ぶ（対話や発表の機会は感じ方に違いがあることに気付くために有効であったか。）

国語の学習では、コース選択制で発展コースと定着コースの2展開で授業を行っている。発展コースでは、仲間と協働しながら学習する時間を増やし、自ら考え、多様な意見を取り入れることを大切にしている。本時では、対話したい相手を選択する機会も設けながら、一人一人の感じ方に違いがあることに気付くことができるようにした。

☆考えを表現する（登場人物に共感／読者として感想）

本単元で扱う学習材「ちいちゃんのかげおくり」は小学生になって初めて出会う平和教材である。戦争が起きたことを知っている児童はいるものの、戦争の悲惨さを自分事に考えるのは難しい。そこで、第2次では、学習のまとめとして「ちいちゃんの気持ちをみんなと考えよう」、第3次では「ちいちゃんにお手紙を書こう」というまとめをすることで、ちいちゃんに共感し、ちいちゃんに寄り添って文章を読めるようにする。また、第2次では、ちいちゃんの思いとわたし（読者）の思いを別で考えさせることで登場人物の気持ちを想像することと、自分が感じたことを分けて考えて、表現することができるようにする。

☆対話を通して新たな価値を創造する（学習者同士、登場人物との対話）

初めての平和教材ということ、3年生という学年も踏まえて、教師との対話を軸に近くの席の友達と対話をしながら考えを形成する機会を設けている。また、自分の考えを書き終えた児童同士で話し合う場を設定することで、多様な考え方に触れることのできる機会を創出した。さらには、物語の登場人物に共感し、語りかける形での対話を行うことで、罪のない人も苦しい思いをするという戦争の愚かさをより想像することができるようにした。

1 本時の目標

文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くことができる。（思・判・表①）

2 指導計画（全10時間） 本時第7時

第1次 読後感、物語の時代背景を知る（2時間）

第2次 ちいちゃんの気持ちをみんなと考えよう（6時間）

第3次 ちいちゃんにお手紙を書こう（2時間）

3 本時の主張

本時の学習で取り扱う「ちいちゃんのかげおくり」第4場面は、ちいちゃんの「体がすうっとすき通って、空にすいこまれていく」「小さな女の子の命が、空に消え」る場面である。この場面では、

ちいちゃんが亡くなったと直接的に書かれていない上に、「ちいちゃんは、きらきらわらいだしました。」と書かれているため、亡くなってしまったのにきらきらと笑い出していることに、ちいちゃん と読者の感じ方が相反する場面である。ちいちゃんへの共感として、ちいちゃんに語りかけるように、ちいちゃんの気持ちを考えることと、自分の感想を分けて考えることで、登場人物と読者の視点を明確にしながら考えることができるようにした。

新たな価値との出会いを愉しみながら、登場人物と友達の意見に共感し、根拠をもとに自分の考えを形成できる児童を育成する授業を目指している。

4 本時の展開（全 10 時間中の第 7 時）

時間	○学習内容 ・ 学習活動	□指導上の留意点 ◇「発問」	☆評価規準 (評価方法)
導入 5 分	○めあてと本時流れの確認。 ◆四場面のちいちゃんはどうな気持ちがあったらうか。 ・めあてをノートに書き、本時の学習の流れを確認する。		
展開 30 分	○範読を聴く。 ・範読を聴き、会話文の数を数える。 ・会話文が多いことから想像を広げる。 C：ちいちゃんの会話文が多い。 C：最期の力を振り絞っている。 C：家族に会いたい気持ち・会えた喜びから会話が広がっている。 ○4 場面のちいちゃんについて考える。 ・本文の叙述を根拠に、教師の発問に対する自分なりの考えを文章プリントに書く。 ・学級全体で意見を出し合いながら、読みを深めていく。 ○ちいちゃんの気持ちをノートに書く。 ・きらきらわらいだしたちいちゃんの気持ちについて考え、共感しながらノートに書く。 ・書き終わった人から交流を行う。 C：力が入らなくても、家族に会えたことが嬉しかったんだね。 C：ずっと探していた家族と会えて本当によかったね。 ○ちいちゃんの気持ちを発表する。 ・ちいちゃんの気持ちについて、共感したことを発表する。	□1, 2, 3 場面と比較して、ちいちゃんの会話文が多いことに気付かせ、想像を広げられるようにする。 ◇「これまでの場面と比べて気付くことはありますか。」 □本文の叙述から根拠を見つけるように促す。 ◇「暑いような寒いような」とはどのような状況か。」 ◇「なぜ、一つのかげぼうしが四つになったのか。」 □児童自身が感じたことではなく、ちいちゃんがどう思ったかについて考えることができるようにする。 ◇「なぜ、きらきらわらい出したのか。」 □共有をすることで、一人一人の感じ方に違いがあることに気付くことができるようにする。	☆思・判・表 ①（ノート、発言）
まとめ 5 分	○感想をノートに書く。 ・読者としての自分はどうか考える、感想を書く。	◇「3, 4 さいの小さな女の子が、苦しさも感じられずに、亡くなってしまったことについてどう思いますか。」	
振り返り 5 分	○感想を発表する。 ・4 場面を読んだ感想を発表し、学習を振り返る。	□一人一人の感じ方に違いがあることに気付くことができるようにする。	

第3学年 社会科学習指導案

日時 令和6年6月5日(水)
第4校時 11時30分～12時15分
授業者 石川 沙也香

はたらく人とわたしたちの暮らし

<授業の視点>

☆1 自分の考えたことを共有する時間の設定

本単元は、販売に携わっている人々の様子について、消費者の願い、販売の仕方、他地域や外国との関わりなどについて着目して、見学・調査したり調べたりしたことを分類して消費者の願いと関連付けて考え、表現することを目標としている。それらを受け、販売の仕事に関する内容については、学習指導要領第3学年内容(2)の「ア(イ)販売の仕事は、消費者の多様な願いを踏まえ売り上げを高めるよう、工夫して行われていることを理解すること、(ウ)見学・調査したり地図などの資料で調べたりして、白地図などにまとめること」、「イ(イ)消費者の願い、販売の仕方、他地域や外国との関わりなどに注目して、販売に携わっている人々の仕事の様子を捉え、それらの仕事に見られる工夫を考え、表現すること」と関連して指導する。

3年生になって社会科の授業が始まり、意欲的に取り組んでいる児童が多い。また、自分の考えを話したり書いたりするのが好きな児童が多い。さらに話し合い活動を活発にしていくために、自分の考えを共有する時間を多く設ける。そのためにも、まずは自分自身で考える時間をしっかりと確保する。話し合い活動をするときには、なぜそのように考えたのかを明確にして話すよう指導する。

☆2 地域とのつながりを意識した単元のまとめ

3年生の学習は、身近な地域(区内)を扱った内容が中心となっており、学習指導要領にもその旨が記載されている。実際に販売店に見学に行くことで、そこで働く人々の仕事内容や消費者の願いについて感じるができるようにする。さらに、本校で行っている屋上農園と連携を図り、調べた事柄を活かして実際に商品を販売することの難しさ、商品をアピールすることの大切さなどについて理解を深める。

1 本時の目標

家庭の買い物に関心をもち、毎日の生活必需品がそれぞれに適した場所で購入されていることに気付くことができる。

第6次 品物はどこから(1時間)

第7次 お店のひみつを紹介しよう(2時間)

2 指導計画(全10時間) 本時第1時

第1次 買い物調べ(2時間)

第2次 買う人の願いや工夫(1時間)

第3次 お店の人たちの工夫(1時間)

第4次 スーパーマーケットの様子 (2時間)

第5次 スーパーマーケットでの買い物 (1時間)

3 本時の主張

本時では、自分たちの身の回りには毎日使う生活必需品が数多くあることに気付かせる。それらがどこで購入されているのか自分で予想を立てて実際に調べる活動につなげていく。

生活必需品についてなかなか出てこない児童がいることが予想されるため、初めは教師とともに行き途中から個人での活動時間にする。ことで、どの児童も迷うことなく活動に取り組むことができる考える。

4 本時の展開

時間	○学習内容・活動	●留意点 ☆評価
導入 10分	○新宿区には多くの店があることを復習する。 ・なぜたくさんのスーパーマーケットがあるのかという疑問から学習課題を設定し、本時のめあてを確認する。	●前単元で行った「わたしたちのまちと新宿区」のまとめから新宿区には多くの店があることを捉える。 ●店といってもさまざまな種類があり、中でもスーパーマーケットが数多くあることに気付かせる。
	めあて「毎日の生活でひつようなものを、どこで、どのようにして買っているのだろうか」	
展開 25分	○毎日の生活に必要なものは何か考える。 ・自分だけでなく、家族も利用するものはどんなものがあるか確かめる。 ○どのような店で購入することができるのか確かめる。 ○生活必需品をどこで購入しているのか予想する。 ・自分の家庭はどうか個人で予想する。 ・周りの意見を取り入れてどこで購入しているのか改めて予想する。	●一日の流れを全体で共有し、その中で必要なものは何か考えさせる。 ●自分が行ったことのある店や見たことのある店を想起させる。 ●数商品は教師とともに活動を行い、活動の見通しをもたせる。 ●自分で予想した後、ペアになり意見を交流する。 ☆家庭の買い物に関心をもち、毎日の生活必需品がそれぞれに適した場所で購入されていることに気付くことができる。(発言、観察、プリント)
まとめ 10分	○学習内容を振り返る。 ・自分の予想した考えを発表する。 ○次時の予告 ・家庭で買い物調べをしてくることを確認する。 ・多くの人が利用する理由を考えることを知る。	●発表で聞いた意見ももとに、どこで購入されることが一番多いのか考えさせる。 ●多くの人が集まる販売店には、どのような工夫があるのか考えることを伝える。

第3学年 音楽科学習指導案

日時 令和6年6月12日(水)
第2校時 9時35分～10時20分
授業者 草深 陽子

こんにちは リコーダー

<授業の視点>

☆1 見方・考え方を発揮する学習の展開

音楽的な見方・考え方…「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素 とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと 関連付けること」

本題材においては、音楽表現をするために必要な器楽(リコーダー)の技術を身に付けるとともに、音楽表現を考えて思いや意図をもち、協働して音楽活動をする楽しさを感じながらより音楽を豊かに表現しようとする態度を養うことを目指す。

リコーダー学習の入門期、基礎的な奏法を正しく身に付けさせていくことは、今後の音楽活動での表現を豊かにしていく上で大変重要である。しかし、技術的なトレーニングに偏らず、自分の作り出す音や楽曲に対して、「こんな音にしたい」「こんな音楽にしたい」と思いをもち、目指す音や音楽にするために「こんな工夫をしたい」と意図をもち、考えながら繰り返し活動をしていくようにする。そのことによって思いを音楽で実現していく力が育っていくものと考ええる。

☆2 夢中になって取り組める学習活動の工夫

入門期だからこそ、リコーダーを使った楽しい活動、自分で音を選んで自由に表現を楽しむ活動を取り入れたい。もともとは、シの音だけで演奏する「笛星人」。ラの音だけでも演奏し、ラの音の習得と同時に調の違いも感じ取らせるようにする。おはよう、さようなら などの言葉をリズムに置き換え、リコーダーで演奏し、自然にタンギングの仕方を身に付ける。シ・ラ・ソの3音を組み合わせ、友達とリレーをしたり、しりとりをしたりする。様々な教材や、活動を工夫しながら、①数少ない音でも、一曲演奏できたという充実感 ②すてきな音を出すこと(リコーダーの音づくり)を体験させていく。

1 本時の目標

曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもつ。

2 指導計画(全7時間)

1 どんな音がするのかな

リコーダーにはいろいろな種類があり、様々な音色で演奏できることを知る。

2 いい音だせるかな(シの音でお話しよう)

リコーダーの扱い方や奏法を知る。

3 シとラの音で曲を吹こう

○シ、ラの指使いに慣れ、イメージに合わせた演奏の仕方を考え、演奏する。

♪にじ色の風船 【本時】

○シラソの3音をつかって、4分音符のリズムで即興的に表現する。

3 本時の主張

5月中旬よりリコーダーの学習を始め、「よい音」にするための4つのポイントを、穴のふさぎ方、息の出し方、姿勢、タンギングとして意識しながら、一つの音を大切につくり出すようにしてきた。一音だけで、演奏できる楽曲にも挑戦し、ピアノ伴奏に合わせてノリノリで演奏することができた。

本時は、シとラの2音を使って「にじの風船」を演奏する。ペアで「〇〇色の風船」と題名を変え、情景をイメージして演奏の仕方を考える。また3パターンの雰囲気の違いの違うピアノ伴奏も提示し、選択させ、自分たちのイメージに近づけるようにする。思いや意図をもって音楽表現をすることを意識させたい。

4 本時の展開

時間	○学習内容・活動	●留意点 ☆評価
導入 5分	○学習する雰囲気をつくる。 ・今月のうた ♪雨ふり水族館 を歌う。	●ピアノ伴奏が弾むようなリズムになっていることに意識をむけるように言葉かけをする。
展開 15分	○リコーダーを「よい音」で演奏するために気を付けることを確認する。 穴のふさぎ方 息の出し方 姿勢 タンギング ・シとラの音を「よい音」を意識しながらロングトーンで演奏する。 →ペアで確認する。 ・シの音で♪笛星人を演奏する。 ・ラの音で♪笛星人を演奏する。 ・旋律の特徴に合ったタンギングの仕方を確認する。 ・シとラの音で「にじ色の風船」を演奏する。	●前時までの学習を想起できるようにする。 ●児童の発言を板書し、意識しながら演奏できるようにする。 ●「よい音」を意識しながら演奏するように声かけをする。
20分	「〇〇色の風船」風船の色を決めてイメージに合った演奏の仕方を考えよう ○自分たちのイメージする「〇〇色の風船」の演奏の仕方を考える。 ・3つの伴奏に合わせて「にじ色の風船」を演奏する。 ・ペアで「〇〇色の風船」曲名とイメージを決める。 ・自分たちのイメージする演奏に近い伴奏を3つの中から選び、演奏の仕方を考える。 ・選んだ伴奏に合わせて演奏する。 ・それぞれのペアで決めた曲名とイメージ、選んだ伴奏、演奏の仕方ではついていることを発表する。	●3つの伴奏それぞれの速さや雰囲気を捉えやすいように演奏する。 ●演奏の仕方を考える際に、息づかいやタンギングに意識を向けさせる。 ☆【思②】曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもつ。 (発言・演奏聴取)
まとめ 5分	○学習内容を振り返る。 ・本時の学習で分かったこと、難しかったことを発表する。	●児童の発表した内容に補足をして、次時につながる助言をする。

第4学年 図画工作科学学習指導案

令和6年6月27日(木)

13:35～14:35

第4学年2組 児童数 25名

指導者 新宿区立柏木小学校

竹内 とも子

1 題材名 「居心地のいい場所」A表現(1)ア、イ

2 題材の目標

他者と関わり合いながら進んで造形活動を行うことを通して、材料の段ボールの感じが分かり、表したいイメージや表し方を考えて工夫してつくる活動を通して、造形的な見方や考え方を広げ、自分たちの生活をふりかえり、新たに創造しようとする態度を養う。

3 題材の評価規準

【知識・技能】段ボールの板を切ったり、形を変えたり、組み合わせたりするときの感覚や行為を通して、段ボールの感じが分かっている。段ボールカッターなどの道具を適切に扱って、手や体全体の感覚を働かせて活動を工夫してつくっている。

【思考・判断・表現】段ボールの板や組み合わせた形や、自分のイメージから、どのように活動するか、何をどのようにつくるか等について考えている。全身の感覚を働かせて活動することを通して、造形的な見方や考え方を広げている。

【主体的に学習に取り組む態度】つくりだす喜びを味わい進んで段ボールなどの材料や場所、他の人と関わり合いながら思い付いたことを工夫してつくる活動に取り組もうとしている。

4 題材設定の理由

(1) 児童の実態

段ボールを材料としたものとしては、第3学年の工作「段ボールで何つくろう」で、児童一人一人が材料の感じから思いついたものをつくる造形活動の学習経験がある。折る、切る、丸める、穴を開ける、ちぎる、ライナーを剥がして中芯紙の波型を出す、のりしろを付けて立てて接着する、それらを組み合わせるなど、多様な技法が見られた。自分が思い描いているイメージに合わせてアクリル絵の具で着色している。個人の表現であることと展覧会への展示もあって、大きさの制限がある活動であった。【写真1～3】



【写真1】



【写真2】



【写真3】

その前の題材「とびらを開けて丸めて立てて」では、八つ切り色画用紙と台紙の板目紙1/2の共通の材料と、カッターで扉を開け、分割後台紙に丸めるなどして立体に再構成する内容である。児童にとって、切ったり、折ったり、接着したりする際に、段ボールほど抵抗感はなく、薄い紙を丸めるなどしてのりしろを付けて接着すると、立体として立ち、丈夫になることを理解し、道具の扱いや技法についての学習経験ができている【写真4】。



【写真4】

共同してつくる経験については、第2学年で図工室の椅子や木切れ、材木などを並べる、積むなどの活動によって、新しい形が生れたり、図工室の風景が変容することを味わったりしていることが挙げられる【写真5】。

また、第3学年では、大型モニターが入っていた梱包材の柱状の段ボールに、みんなで花をテーマに絵を描き、それを展覧会会場で前述の「とびらを開けて丸めて立てて」と共に街のように構成している【写真6】。



【写真5】



【写真6】

（2）題材観 ～あそび的まなびの視点で～

以上の児童の実態を踏まえ、材料となる段ボールの感じを十分に味わい、これまでの学習経験を生かしてイメージを広げ、友だちと関わり合いながら多様な表現をつくり出していく題材を設定した。本題材は、遊びの本質を生かした学び（「あそび的まなび」）の五つ視点に重点を置いた造形活動によって、児童が遊んでいる時のように、主体的に学ぶ活動が促されると考えた。【写真7】



【写真7】

①テーマや、材料や技法などの制限がありながら、児童にとって自由度が高い題材設定

【あそび的まなびの視点】

- ①テーマや、材料や技法などの制限がありながら、児童にとって自由度が高い題材設定
- ②児童が学習経験や生活経験を生かして新たな発見や挑戦する楽しさを味わえる指導計画
- ③児童が材料・道具、表し方などを自ら選択・工夫して表現し、鑑賞したくなる環境設定
- ④児童が次の造形活動や自分の生活につなげたいと感じる「ふりかえり」
- ⑤児童が表現や鑑賞を楽しみながら造形的な見方・考え方が広がり深まる学習展開

遊びには、自分や自分たちにとってやりたいことのイメージや、使うもの、ルールのようなものがあるかもしれないが、それは楽しみを制限するものではなく、楽しみを共有したり増幅させたりする要素となると考えた。その上で自分たちが活動を決めたり変えたりできる自由度の高さは、児童の創造性を促す重要な要素であると考えた。

本題材では、基本となる材料・用具は段ボール類、段ボールカッター、木工用ボンド、補助的に布テープと至ってシンプルであり、いつもの図工室で自分にとって「居心地のいい場所」にな

るような造形活動ができればよいというものである。今回は一人ではできないことをやってみようという提案したが、座席に関係なく活動し、メンバーも途中で加わるなど流動的でよいと考えている。これまで、この題材ほどの自由度高い活動を設定したことがないので、どこまで自由とするのが創造的な造形活動にとってよいのか評価しながら計画を修正していく可能性もある。

②児童が学習経験や生活経験を生かして新たな発見や挑戦する楽しさを味わえる指導計画

模倣やごっこ遊びなど生活の中にあるものを再現しようとしたり、何者かになりきったりすることは遊びの重要な要素である。元となるものがあり、そこに自分らしさを加える造形活動が考えられる。また、これまでの経験を生かしてさらにアレンジを加えて工夫しよう、少し難しいことに挑戦しようとすることも、遊びの面白さに含まれる。この題材では、前述の(1)の児童の実態のような学習経験があることで、未知の内容ではあるが自分の力で表現できそうだと感じる適度の困難さや緊張感を得られるように指導計画を行っている。

③児童が材料・道具、表し方などを自ら選択・工夫して表現し、鑑賞したくなる環境設定

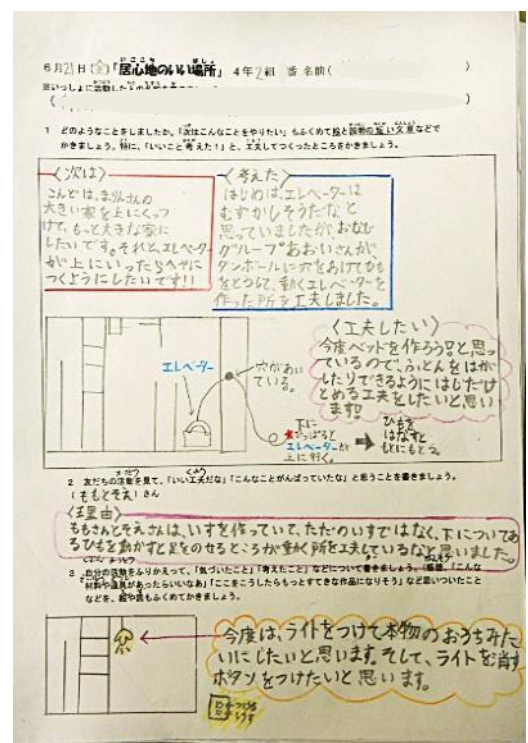
大小の段ボール箱、板、片面巻き段ボール、紙バンド、紙紐など、選択できる材料を準備する。場所は図工室内ではあるが、座席に関わらず活動しやすいところを選ぶ。「居心地のいい場所」という題材のテーマからも、児童が自分たちのつくったものの中に入ったり、新たな方法を試したりして自然に鑑賞しながら、次の表現を行う環境自体も児童がつくっていくことを目指している。

④児童が次の造形活動や自分の生活につなげたいと感じる「ふりかえり」

主にふりかえりの時間やワークシートを生かして、さらにどのようなことをどのような方法で実現したいか、どのような材料や道具があるとよいかなどについて考える。また、自他のグループの友だちの工夫しているところなど、活動のよさに着目したり、生活の中で経験していることとのつながりを発見したりしながら、新たな発想につなげていく。さらには、本題材での学習を通して、実生活の中で「住まうこと」や空間の「居心地のよさ」について改めて意識するようになり、よりよく生きようとする資質を自ら育む児童の育成を目指す。

⑤児童が表現や鑑賞を楽しみながら造形的な見方・考え方が広がり深まる学習展開

雨降りや高温の日が多い季節であり、休み時間に校庭に出られない児童らは、教室から近いとは言えない図工室に休み時間のたびに足繁く通って来ることもあった。遊びの延長に造形活動があり、友だちと造形活動を通して遊びながら、さまざまに工夫してつくったり、友だちとの人間関係を紡いだりしていくと考えた。



5 指導計画（6時間・本時＜3・4時間＞）

【準備するもの】

児童＝筆記用具・タブレット端末

教師＝段ボール箱・板、巻き段ボール、紙バンド、紙紐、木工用ボンド、段ボールカッター、カッターナイフ、カッターマット、はさみ 等

【共通事項】

・自分の感覚や活動を通して、材料や場所の感じやその形の変化などをとらえ、イメージをもつ。

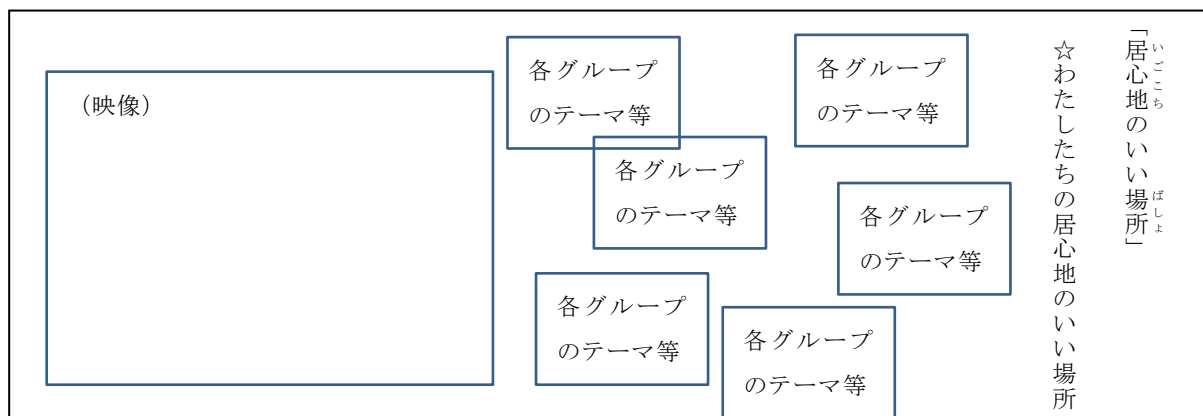
【題材全体の指導計画】

	○主な学習活動	◇指導上の留意点
1 次 (1・2 時)	○段ボールという材料と、「居心地のいい場所」というテーマからこれまでの造形経験や想像したことをもとにして、やってみたいことつくりたいものを考え、試す。 ○段ボールという材料に全身の感覚をはたらかせてかわりながら、つくりたいもののイメージをもち、友達と共有できるようにする。 ○自分たちの活動をふりかえり簡単な絵や図・言葉などに表す。 ○タブレット端末を用い、オクリンクに、お気に入りの視点から写真を撮り、記録する。	◇共同して活動するものであっても、一人一人が自分の考えをもつことを大切にする。 ◇友だちとの関りがうまくできない理由で一人になる児童がいないよう、配慮し、声掛けなど対応する。 ◇安全指導については、カッターナイフの使用は、作業台の上のみとする。使用しないときは、刃を出さない、戻すなど。段ボールカッターや、はさみも、自分の手だけでなく、段ボールの向こう側にいる人の動きなどにも配慮するよう注意を促す。 ◇自分のつくりたいもののイメージをもつようにワークシートを活用し、絵や図・言葉などで表すようにする。
2 次 (3・4 時) 本時	○自分たちの表現を見ながら前回の活動をふりかえり、さらにどのようなことをしていきたいかつくりたいか考え、グループで話し合う。 ○新しい発想を取り入れ、工夫して造形活動を行う。 ○自分たちの活動をふりかえり、次の活動への見通しをもつ。	◇技能については必要に応じて示したり、考えるヒントを提示したりし、材料や技法についての児童からの発見を大切にする。 ◇一人一人の子どもの思いや考えを大切にし、話し合いの内容を造形活動に生かせるよう、多様な考えを促すような発問を工夫する。 ◇ワークシートを活用してつくりたいもののイメージや表し方を明確にし、グループで共有できるようにする。
3 次 (5・6 時)	○途中の作品を全身で味わいながら、さらにどんな工夫が考えられるか話し合う。 ○実現したいこと合わせて、材料や表し方を選び工夫してつくる。 ○互いのグループの表現を見合う活動を通して、発想や表し方のよさを自分たちの作品に生かそうとしながらさらに工夫してつくる。 ○自分たちの造形活動をふりかえり、関連した自分たちの生活のなかの造形について考える。	◇よりよい表現活動につながるように、居心地のよさはどこにあるか、発想の面白さ、材料の使い方の工夫のよさ、など鑑賞の視点を促す ◇鑑賞活動などを通して、一人一人の考えや活動がみんなで作る力になっていることに気付かせる。 ◇造形的なよさや工夫などについてだけでなく、生活の中の住まうことや、心地よい環境について気付いたり、考えたりするきっかけとなるよう助言する。

6 本時の展開

	○学習活動・予想される児童の活動	◎評価の観点◇指導上の留意点★かかわり
導入	○「自分たちの活動をふりかえって、今日はどんなことをするか話し合おう」 ・前回までの表現を様々に見て味わう。 ・離れて、近くで、中に入って見る。 ・計画の図を確かめたり、新たな考えを付け加えたり、変更したりする。	◇ただ見るだけでなく、様々な方向から見たり、中に入って全身で感じ取ったりすることを促す。 ◇ワークシートなどをもとに話し合い、つくりたいもののイメージを共有できるように促す。 ★多様な見方・考え方を促し、創造的な造形活動するために、友達の考えが自分とは違っていても否定せずに、理解しようとしながら聞いたり、違いやよさを生かすように話したりすることを促す。(導入時から終末までを通して)
展開	○「つくった途中のものを味わったり、話し合ったりしたことから、新たな発想し、工夫してつくろう。」 ○導入時同様、鑑賞活動と表現活動をくりかえしながら、考えを出し合い、よりよいものにしていくとする。 ・友達との視点の違いから発見したり、発想につなげたりする。 ・つくりながら、自分や友達の発想や表し方の工夫のよさに着目して見たり、課題を明らかにして、よりよい表現に生かそうとしたりする。	◇構造上の課題などがあるグループには、資料を提示したり、考え方を促す発問を工夫したりして支援する。 ◎段ボールの板を切ったり、形を変えたり、組み合わせたりするときの感覚や行為を通して、段ボールの感じが分かっている。段ボールカッターなどの道具を適切に扱って、手や体全体の感覚を働かせて活動を工夫してつくっている。【知・技】 ◎段ボールの板や組み合わせた形や、自分のイメージから、どのように活動するか、何をどのようにつくるか等について考えている。全身の感覚を働かせて活動することを通して、造形的な見方や考え方を広げている。【思・判・表】 ◎つくりだす喜びを味わい進んで段ボールなどの材料や場所、他の人と関わり合いながら思い付いたことを工夫してつくる活動に取り組もうとしている。【主学態】
まとめ	○「自分たちのグループの活動を紹介しよう。」 ・工夫のよさなどに着目して発表したり、みたりする。 ・どうしたらよりよい表現になるか考えながら見る。 ○オクリンクに写真を提出する。	◇自分たちの活動を発想の面白さや工夫のよさに着目したり、課題を明らかにしたりしながら、よりよい活動になるような視点で見るよう促す。 ★鑑賞活動などを通して、一人一人の考えや活動がみんなでつくりだすときの力になっていることに気付くようにする。 ◇自分が一番すてきと感じられるような視点から撮影するよう提案する。

7 板書計画



8 環境設定 ※活動の状況によって作業台など移動する。広い空間も確保する。



【協議会での話題にしたいこと】

- ◎「あそび的なまなび」の視点を、造形活動に取り入れることによって、児童の造形活動はどのように変化するか。
- ◎造形活動における自由度の高さと指導の関係について、など。



第5学年 体育科学習指導案

日時 令和6年5月30日(木)

第1校時 8時45分～9時30分

授業者 小林 周平

陸上運動

<授業の視点>

☆1 体育のコース別学習にのっとった授業設定

体育科学習指導要領のC陸上運動は、「短距離走・リレー」「ハードル走」「走り幅跳び」及び「走り幅跳び」で構成され、一定の距離を全力で走ったり、バトンの受渡しをしたり、リズミカルにハードルを走り超えたり、リズミカルな助走から踏み切って跳んだりして、記録に挑戦したり、相手と競争(走)したりする楽しさや喜びを味わうことができる運動であるとされている。また、陸上運動を楽しく行うために、自己やグループの課題を見付け、その解決のための活動を工夫するとともに、約束を守り助け合って運動をしたり、勝敗を受け入れたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に気を配ったりできるようにすることが大切であるとなっている。

教科担任制に伴い、体育でもコース別学習を取り入れているが、とても苦慮している。年度初めの初めの「体づくり運動」では、①技能向上コース ②思考創造コース と分けたが、人数が5:1の割合となり、人数に偏りが出てしまった。そのため安全に懸念があり、活動内容も制限されてしまった。そこで、今単元では、①スティックコース ②ライバルコース ③タクティクスコース ④エンジョイコース の4つのコースを設定し、人数の分散を試みた。人数の割合は、2:7:3:2の割合となったので、①③④の合同コースを作って人数を均等化した。しかし、趣旨の違うコースを同時刻同時に見ることはかなり難しいと感じている。45分の展開を1. エンジョイコースのための陸上遊び→2. スティックコースのためのスキルアップドリル→3. タクティクスコースのためのグループで短距離走の4局面を見合う時間といった様に、それぞれのコースで希望しそうな活動を順番にしていこうとしているが、それぞれの活動が短時間ゆえにどれも中途半端な活動で終わっている気がする。

そこで、今回の授業では、まずゲーム・ボール運動領域の基本的な流れ「試し→思考→試合」の流れにのっとって授業を展開する。その上で、思考の場面で

①局面別の場 ②ドリルの場 ③ゲームの場

といった場を作り、課題別や気分別？に選んで活動することとした。また、試し→思考→試合どの場面も教師が考えたスリー・トリプル編成で取り組ませる。ペア学習だとペアによって体育的なものの見方・考え方の幅が狭くなり、グループだと活動に入れない児童がいることが懸念されるからである。

1 本時の目標

より速く走るために、3人で考えて練習しよう。

2 指導計画(全4時間) 本時第3時

第1次 50m走の自己タイムを知る。
(1時間)

第2次 4つの局面と
多様な練習方法を知る。(1時間)

第3次 練習方法を工夫する。(1時間)

まとめ 練習後のタイムを計る。(1時間)

3 本時の主張

本単元の技能の最終目標は、「(前の自分よりも)いかに速く走れるようになるか」であるように思う。速く走れるようになった感覚は、そのまま「気持ちよさ」＝「楽しさ」に直結しているようにも思う。速く走れるようになる、そのために、練習の工夫を考えたり、友達同士で競ったり、アドバイスをしあったり、見て学んだりすることが手立てとなる。まずは興味本位でよいので、教師側が用意した手立てを児童が選択して試していくことから始め、単元修了後は、手立てそのものを工夫できる児童にしたい。

4 本時の展開（場所 体育館）

時間	○学習内容・活動	●留意点 ☆評価
導入 5分	・あいさつ、準備運動 ○めあての確認 めあて より速く走るために、3人で考えて練習しよう。	
展開 リレー 5分	○パシュート型のリレーのタイムを知る。 (試しの運動)	●パシュート型なので、2チームが違うスタートラインに立ち、つないだ3人の合計タイムを計る。 ●リレーは安全面に配慮し、コーンを置き、外を走らないように事前指導する。 ●他チームとの競争ではなく、あくまで自己の事前と事後を比べるための材料だということを強調する。
練習 20分	○各場で練習する。(思考) ※それぞれの場の説明5分 ①局面別学習の場 1. スタート～スタート直後の前傾姿勢 2. 中間疾走の姿勢とももあげ ②速く走れるようになるためのドリル講座 【教師が立つ】 ③陸上遊びゲーム 3ステップ集め	●3人一組でリレーも練習もさせる。練習は、①実行 ②手助け③観察をさせる。 ※局面別学習のみ
リレー 5分	○パシュート型のリレーのタイムを知る。(試合)	
まとめ 10分	○片付け ○整理運動 ○学習内容を振り返る。 ・ワークシートに記入し、発表する。	●書く視点は、 ①言われた・した はげましボイス おたすけボイス ②練習内容と結果 ③結果からの考察 (自分が考えたこと 感じたこと) を書く。 ●比べるのは前と今の自分を比べることを伝える。 ●話型を用意する。

第6学年 社会科学習指導案

日時 令和6年5月24日(金)
第5校時 13時30分～14時15分
授業者 6年1組 矢沢 悠子
6年2組 田辺 莉奈

ともに生きる暮らしと政治

<研究主題に迫る手立て>

☆1 児童の興味・関心を大切にしたい課題別のコース設定

本単元では、自分たち(国民)と国や身近な地域の政治に関わる事柄の決定がどのように行われるかを調べることを通して、政治に積極的に参加していくことの意義を捉え、主権者としての公民的資質を育成していくという内容である。しかし、小学生である子どもたちにとっては、普段の生活でなじみが薄い内容のため、興味・関心をもちづらい学習になりがちだと言えるのではないかと考える。そこで、高学年では、第一時にオリエンテーションとして「ともに生きる暮らしと政治」というキーワードから、思い浮かぶ言葉をあげてもらい、それぞれの言葉への関心別にグループを組み、子どもたち自ら課題を設定させた。そして、課題別にコースを振り分ける設定にした。そのことにより、なじみの薄い学習内容でも、興味・関心をもち、自ら考えて学習を探究してくれるのではないかと考えた。

☆2 調べたことを共有する時間の設定

興味・関心別に課題を設定して調べ学習をした後に、グループごとにパネルディスカッション方式で調べたことを共有する時間を設定した。自分以外のグループの発表を聞くことで、知識や考え方の幅を持たせ、本単元の目標に迫れるのではないかと考えた。

☆3 社会とのつながりを意識させる振り返りシート

本単元では、共有後に①今回の学習で学んだことは何か ②学んだことが今後の自分にどのように生かしていくかどうか、どのように社会に生かせるかどうかを振り返り、ワークシートに記入させる。そのことにより、ただの知識の獲得で終わらずに、実生活とのつながりや社会参画の意識につながっていくのではないかと考えた。

1 単元の目標

日本の政治の考え方と働きについて、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、日本の将来を担う国民としての自覚を養う。

2 指導計画(全15時間) 本時第11時

第1次 オリエンテーション(1時間)

第2次 課題別調べ学習とまとめ(8時間)

第3次 共有と振り返りとまとめ(6時間)

3 単元の主張

研究の柱①を受け教科書を使わず、暮らしと政治が身近に感じ、課題が設定できるように子どもたちに関係のある社会的事象の資料を主に校内から集めて提示する工夫をした。それを、児童自身が明らかにしたいことを課題とした。

今回のグルーピングは課題別に振り分け、発表ツールも選択させた。

また、学習するだけで終わるのではなく、政治に興味・関心をもちこれから関わっていこうとする態度を育めるように単元構成をした。

そして、社会参画の一歩としてこれからの日本の在り方を考えた提言書を作成することをゴールとする。

4 本時の展開（11/15）

社会的事象を通して自らの課題を基盤に人々の願いを実現する政治の働きについて気付き、自分たちの生活が政治と密接にかかわっていることを理解することができる。

時間	○学習内容・活動	●留意点 ☆評価
導入 5分	○ともに生きる暮らしと政治というテーマから、自分が知りたいと思う発表を選んで聞きに行く。 ○選択した場所での流れを伝える。 ① 友達の調査内容を聞く。（質問含む） ② そのグループから出された課題について対話する。 ③ 発表と対話を通して、自分の考えをワークシートにまとめる。 ○本時のめあてを確認。	●対話に時間をとるために、事前に友達の調査内容を全体に周知しておき、スムーズに移動できるようにする。 ●対話やふりかえりに必要なホワイトボードやワークシートは各ブースに事前に設置。
展開 20分	めあて 「ともに生きる暮らしと政治」について様々な視点から考えて深めてみよう 【全体】 プロセス1：課題に対する予想の提示 プロセス2：事実と根拠 プロセス3：交流と再構築 各グループの課題に対する予想や根拠を聞く。 発表を聞いて、気付いたことや大切なことをメモする。 気付いたことを小グループで共有する。 プロセス4：理解と解釈 発表者の課題（願い）に対しての自分の考えをもつ。 発表者から掘り下げたい話題について、理解したことをもとに、自分の考えを交えて対話する。	●発表の視点はめあてと共に確認し、ホワイトボードに掲示しておく。 ☆人々の願いを実現するために政治があることに気付き、よりよい社会の実現のために政治はなくてはならないものであることを理解することができた。（ワークシート・発言） ★対話を通して積極的に発言したり、考えを深めたりすることができた。（発言・観察）
展開 15分	○本時の授業を通して、自分が学んだこと、課題に対する自分なりの答え、自分の取り組んでいる課題と繋がるところはないかなど比較検討しながらふり返る。 ○考えを全体で聞き合う。	●個人作業 ●対話で書いた紙をホワイトボードに貼り、互いの意見を参考にして考えを発表する。 ★政治が身近であることを様々な立場の視点から見つける。（ノート・発言）
まとめ 5分	プロセス5：結論 ○次時の予告 提言書を書くことを伝える	●キャッチコピーを考える。

特別支援学級 算数科学習指導案

日時 令和6年11月7日(木)

第4校時 11時30分～12時15分

授業者 高野 裕久(T1) 寺内洋子(T2)

重さをはかるう

<授業の視点>

☆1 見方・考え方を発揮する学習の展開

本単元は、特別支援学校小学部学習指導要領に示された第2段階のC「測定」のA「身の回りにある具体物の大きさに注目し、量の大きさの違いが分かるとともに、二つの量の大きさを比べることについての技能を身に付けるようにする。」、イ「量に着目し、二つの量を比べる方法が分かり、一方を基準にして他方と比べる力を養う。」に基づいている。また、内容について、C(ア)「長さ、重さ、高さ及び広さなどの量の大きさが分かること。」とある。そこで本単元では、実際に触れたり、持ったりする活動を多く取り入れ、ものを持ったときの感覚で重さの見当ができる量感をもたせるとともに、「重さ」への興味・関心を高めていきたい。

長さの概念と同様、重さの概念を形成するためには、段階的な指導が重要である。本単元では、直接比較、任意単位による比較、普遍単位による測定の3段階で指導を行う。てんびんを用いた直接比較では、数多くのものの重さを一度に比較できないことを経験させ、数値化の必要感から任意単位を導入し、さらに、より一般性のある数値化の必要感から普遍単位を導入し、量の単位への一般化を図る。すなわち、基にする重さの単位を積み木から1円玉、グラム(g)へと一般化する過程で、普遍単位や重さの測定方法に着目し、長さやかさの学習と総合的にとらえながら、適切な重さの表し方について考えられるようにする。

☆2 夢中になって取り組める学習活動の工夫

知的障害のある児童にとって、重さの概念や量感をつかむことが難しい場合がある。そこで、てんびんによる比較やはかりによる測定など、具体的な活動を多く経験させることで、基本的な重さの感覚を養っていく。

1 本時の目標

身の回りのものの重さについて、道具や基にする大きさを定め、比較する方法を考え、説明することができる。

2 指導計画(全11時間) 本時第1時

第1次 重さのくらべ方(3時間)

第2次 はかりの使い方(6時間)

第3次 まとめ(2時間)

3 本時の主張

てんびんを用いて重さを比較する場面は、傾きに注目すれば比較できること、てんびんが釣り合った場合は2つの量が同じ重さであると判断できることをおさえる。具体物の操作を通して、実感を伴いながら理解できるようにする。

導入では、目に見える情報のみに左右されないよう、大きさが同じでも重さが違う多様なものをはかり、見た目では重さは判断できないこと、重さを比べるには基準となるものや単位が必要であることを十分に理解させたい。

4 本時の展開

時間	○学習内容・活動	●留意点 ☆評価
導入 10分	本時の課題をとらえる。 重さくらべをしよう ○重さへの関心を高め、疑問をもつ。 ・ソフトボールとスポンジボールを手で持って重さを比べる。	●大きさと重さは関係ないこと、手に持って比べる困難さを確認する。
展開① 10分	○具体物の重さを手で持って重さを比べる。 〈具体物〉はさみ、のり、定規、コンパス、スポンジ ○8名が、それぞれペアになって、具体物の重さを比べ、重さの順位をワークシートに書き込む。	●児童の身近にあるものについて、予想を立てながら手で持って重さを比べることで、重さの比べ方に対する興味・関心を高めるようにする。 ●ペアの構成は、児童の発達段階や情緒面を考慮したものとする。
展開② 20分	学習課題をつかむ。 重さをくらべるにはどんな方法があるだろうか ○重さの比べ方を考える。 ○てんびんを使って具体物の重さを比べ、ワークシートに記入する。	☆身の回りのものの重さについて、比較する方法を考え、説明している。(観察)
まとめ 5分	○てんびんを用いて重さを比較する方法をまとめる。 かたむきにちゅうもくすると、下がっている方が重いことがわかる。 ○重さを詳しく調べるにはどうすればよいかを考え、次時への見通しをもつ。 ○学習感想を発表する。	●どのくらい重いかを調べるにはどうすればよいか問いかけることで、長さやかさの学習を想起し、重さを数値化する必要感をもつことができるようにする。 ●学んだことを自分の言葉で振り返ることができるよう支援する。

VII 起業型探究学習 ライブ実践事例

1・2年 生活科【1・2年生なかよし交流会】

テーマ 「柏木ミニフェスティバルを開こう」

1 活動について

3年前まで、本校では「柏木フェスティバル（以下柏フェス）」という児童主催のお祭りが開かれていた。2年生以上の児童が学級・学年ごとに話し合ってお店の内容を決め、校内の各教室や体育館を使っておもちゃ遊びやゲーム、お化け屋敷などのお店を開いて楽しむものである。学校公開日に開催したため「大江戸ダンス」や「カポエイラ」などの地域主体の活動も披露され、盛り上がりを見せた。しかし、コロナ禍を経て、柏フェスに替えて「まなびのマルシェ」「柏木ライブ」が始まったことにより、代表委員会から提案される自治的な文化的行事としての柏フェスはその役目を終えた。低学年においては「柏木ライブ」に参加しないため、児童が主体的に計画し、力を合わせて個々の役割や責任を果たしながら学校生活の充実と向上を図るための機会は主に学級における集会活動に限られている。柏フェスを体験したことのある高学年の児童から、「柏フェスはなぜ終わったのか。どうなったのか知りたい」という声が聞かれることもある。

本校は併設の子ども園と長年交流活動を続けている。近年は、近隣の保育園も加わり、年長児が安心して小学校生活のスタートを切ることができるように幼小接続カリキュラムを設定している。そのため、1年生は就学前から現2年生と生活科や特別活動の学習を通して関わる機会があった。入学後、1年生と2年生がペアになり、2年生が校内の特別教室を紹介する「学校たんけん」から交流活動が始まった。10月には2年生が1年生を招待し、生活科で作ったおもちゃと一緒に遊ぶ「おもちゃランド」を開いた。1学期の学校探検を振り返り、「招待状を書きたい」「感想カードを書きたい」「クラスのマスコットキャラクターを描いたカードを配りたい」というアイデアが出され、自主的に活動することができた。一方、1年生は12月に子ども園・保育園の年長児を招いて「秋のおもちゃで遊ぶ会」を開いた。その際、2年生に招いてもらった「おもちゃランド」の様子を思い出し、「招待状があった方がいいね」「お店の看板があった方が、何のお店か分かりやすい」「ルール説明をしたい」などのアイデアが出された。交流を通して「楽しかった」という満足感・達成感をもつことができた一方、「もう少しお客さんが来てくれるようにするには、どうしたらよかったのか」という意見もあった。そこで、児童の振り返りを基に、3年生から始まる柏木ライブに向けたプロジェクト学習の入門として、1・2年生が既に経験した「お店を出す」という実践と、かつて柏木小の児童が主体的に企画できる行事として楽しみにしていた柏フェスを結び付け、各学年で実施した「おまつり」の改善を図り、今年度の交流活動の集大成としたいと考えた。

「柏木フェスティバル」の規模を縮小し、「柏木ミニフェスティバル」として1・2年生の交流活動に位置づけ開催することで、楽しみ、夢中になって取り組みながら自らの生活をよりよくしよう、主体的に社会に参画しようとする態度を育てていく。自分たちの考えたお店で近隣の保育園・子ども園の園児や、保護者、地域の方が喜んでくれている姿を見ることで、達成感を味わうことができるよう、人との関わり方についても考えさせたい。

2 活動計画

国語科、生活科、図画工作科、 学級活動に関わる時数	ねらい	○主な学習活動・児童の反応
【出会う】 4月 第1～4時 1年「なかよしいっぱいこうたんけん」 2年「春だ今日から2年生」	自分をとりまく人々と進んでかわり、意欲的に学習したり、楽しく生活したりしようとする（他者と関わる力・協働する力）	○学校の施設とそこで働く人や、学校生活の楽しさについて2年生に教えてもらうことを通して、生活を支えてくれる人や上級生の存在に気づく。 ○学校の施設とそこで働く人や、学校生活の楽しさを教える活動を通して、1年生と関わろうとする。
【関わる】 第5～25時 10月 2年「うごくくわたしのおもちゃ」 おもちゃランド 11月～12月 1年「あきとともだち」 あきのおもちゃであそぶかい	・友達と力を合わせ、生活経験や調べたことなどを使って課題解決をしようとする（他者への気づき、集団とのかかわり） ・活動を振り返り、改善を図りながら繰り返し取り組み、自分の考えや思いを実現して満足感や達成感を得る（自己実現、自立心）	【おもちゃランド】 ○見本のおもちゃで遊び、作りたいものを決める。 ○おもちゃを作る。 ○作ったおもちゃで遊び、より楽しく遊べるように改良する。 ・壊れないおもちゃにするにはどうしたらよいか ○1年生を招待するための準備をする。 ・招待状を作ってみよう。 【あきとともだち】 ○自然の変化に気づく。 ○集めた自然物から、どんなおもちゃを作りたいか考える。 ○おもちゃを作って遊ぶ。 ○より楽しく遊べるようにおもちゃを改良する。 ・こまを回すために、ようじをまっすぐ刺そう。 ○年長児を招待し、楽しむ。 ・お礼の手紙をもらえて、うれしいな。
【広げる】 第26～32時 1月（生4、図2、学1） ③「柏木ミニフェスティバルをひらこう」	・自分の良さや自分にできることを理解し、それをいかして活動に取り組む（自尊感情、自己有用感の向上） ・活動を通して自分自身の成長等を振り返り、今後の生活に生かそうとする。（自分自身や他者への気づき、集団とのかかわり）	【柏木ミニフェスティバルをひらこう】 ○1・2年生の混合グループで、お店の内容を話し合っ - て決める。 ○お店に必要なものを考えたり作ったりする。 ○地域の方に柏木ミニフェスティバルに参加してもらう。 ・ポスターを作って貼り出そう。 ・お店の宣伝に出かけてお客さんを呼び込もう。
【深める】 第33～34時（生2） 柏木ミニフェスティバル	・体験した楽しさや達成感を言語を用いて表現する（思考力、表現力の向上）	○柏木ミニフェスティバルや今年度の1・2年生の交流活動を通して、自分がどのようなことができるようになったかを振り返る。 ○振り返ったことを発表する、文章に書くなどして伝え合う。
【ふりかえる】 第35時 （国1）		

3 活動の流れ

出会う

学校のことをいろいろ教えるよ。
なかよくなろうね。



関わる（見つめる）

おもちゃを作って遊びたいな。
どんなおもちゃを作ろうかな。

木の実や葉っぱで遊ぼう。
きれいにこすり出すには……。



広げる（関連付ける）

去年の2年生みたいに、1年生を
招待して遊んでもらおう。

年長さんと秋のおもちゃで一緒に遊
びたいな。招待状を書くのはどう。



看板を作って、何のお店
か分かるようにしよう。

1年生が遊ぶから、
ルールを簡単にしよう。

説明の仕方が分かりや
すいね。

どんなお店があるか、
紹介します。

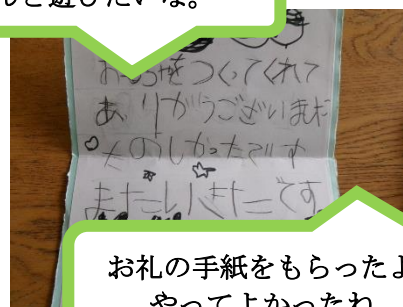
何て声を掛けたら、
来てくれるかな。



深める（振り返る）

1年生が楽しそうに遊
んでくれて嬉しいな。

また年長さんと遊びたいな。



お礼の手紙をもらったよ。
やってよかったね。

柏木ライブ【新宿駅・柏木地区再開発プロジェクト】

テーマ「新宿・柏木の地域を自分たちの力でもっと魅力あるまちにしよう」

1 活動について

本校児童の生活圏である新宿駅とその直近地区は、現在大規模な再開発工事が進んでいる。プロジェクト第一弾として、東京都都市整備局の方から新宿駅の歴史と再開発についての貴重な映像と共に、再開発の考え方や今後の展望について伺った。次の回では、徒歩で駅前のデッキや新宿駅西口広場を見下ろす高層ビルから現場を見学した。それを受け、VRやARの作品を制作・体験できる空間プラットフォームのSTYLYの方にご指導を受け、新宿駅西口前の空間に児童の絵が入り込むAR（拡張現実）の作品づくりに参加した。工事現場の囲いの塀にQRコードが貼られ、一般の方も新宿西口の実際の風景の中で児童の作品を楽しめるとのことである。その後、児童は、街の魅力にもなる大変美しい駅や、特色ある駅とその周辺について興味をもち、調べ発表した。

その後、プロジェクト第2弾として、新宿駅再開発について学んだことを基に、柏木地区を中心に自分たちの身近な地域を見直し、魅力を再発見して、児童の視点でより住みたくなる街にする提案をしようと取り組んできた。新宿駅再開発にあたっては、東口と西口の移動が不便であること、人が滞留する空間が不足していること、駅・駅ビルの老朽化が進んでいることなどの課題を解消し、より魅力ある地区にするランドデザインによって進められているとのことであった。同様に、児童にとって身近な地域の課題や資源を発見し、より魅力的にする提案をする取り組みを行っている。3年生から6年生までの児童は、①神田川チーム、②（成子天神社を中心とした）気になるスポットチーム ③街並みチームの3つに分かれ、現地を歩き、課題を見付け、よりよくなる提案をする。本プロジェクトを通して、児童が自分たちの住む地域への愛着をもち、よりよくしようとする思いや考え、行動力を身につけていくよう、次のように児童と共に活動計画を立て、推進している。

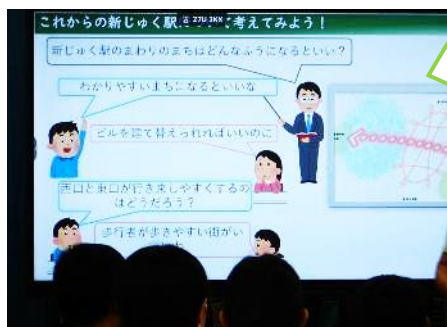
2 活動計画

	ねらい	○主な学習活動・児童の反応		
9月課題設定	- 新宿駅の再開発や自分の地域に関心をもつ。 - 地域の再開発はどのような考えや方法で、どのように進められるのか知識を得て、理解する。	○東京都都市整備局の方から新宿駅の歴史と再開発について、時代背景や人の思いや考え、今後の展望について知る。 ・「新宿駅は、昔こんなだったのか」「広場のオブジェみたいのは機能があったのか」「ずっと工事中だと思っていたけど、工事の理由が分かった」「東口に行きやすくなる」「まだまだ工事終わらない」など、新たな気付きを得る。		
10月活動	新宿駅再開発の現状を実際に見て、場所やその変化を感じたり、そのようになっていくか想像したりする。	○徒歩でカリヨン橋やLタワービルから再開発工事の現場である新宿駅西口広場を見下ろして見学する。 ・「景色いい。ドコモタワーだ」「こんななのか」「向う（東口）が見える」「橋ができて」「グルグル回る道、あれだ！」		
12月情報収集・計画↓実行	- 大がかりな工事の中の新宿駅を訪れた人を楽しませる絵を発想し、表すとともに、場所の感じを生かして自分たちの作品を楽しむ構成する。 - 国内外の他の駅とその周辺の再開発について美しさを感じ、特徴を捉える	○新宿駅西口前の空間に合わせ、AR（拡張現実）の作品をつくることを想定して、自分が思いついたことを絵に表す。 ・「コクーンタワーにのっけたい」「（西口と東口をつなぐ）橋の途中に座って休むところが欲しい」「空に飛ばしたい」「ここにこんなものがあったら面白い」など、場所から発想して絵に表す。 ・VRやARの作品を制作・体験できる空間プラットフォームのSTYLYの方にご指導を受けながら、6年生を中心に新宿の西口前の風景の中に自分たちの作品を配置する。 ・地域の特色を生かした駅になっていることがわかる。 ・「行ってみたい」駅が素敵だと、訪れる人が増える。		
1月～3月実行「改善」ふりかえ	新宿駅再開発について学んだことを基に、柏木地区を中心に自分たちの身近な地域を見直し、魅力を再発見する。児童の視点でより住みたくなる街を考え、提案する。	【神田川チーム】 ・春のサクラ、秋の紅葉・鷹（ツミ）、鶯、鴨、フナなどの生き物、神田川の歌碑など魅力発見したり、遊歩道をもっと素敵にしたり、提案する。	【（成子天神社）気になるスポットチーム】 ・成子神社や、咳止め地蔵など、いつも通って見ているけれど、気になるスポットを調べて、魅力を発信する。	【街並みチーム】 ・日頃友だちと持ち合わせをしたり、遊んだりしている公園や、街の一角の気になる課題を発見し、解決する提案をする。
	プロジェクトを通して、児童が自分たちの住む地域への愛着をもち、よりよくしようとする。	○二つのプロジェクトを通じて、どのようなことを感じ、地域について考え、自分にできることを行えるようになったかふりかえる。		

3 活動の流れ

知る

東京都都市整備局の方から新宿駅の歴史と再開発について、時代背景や人の思いや考え、今後の展望について知る。



これからの新宿を考える。
「課題は何か？」

- ・東口と西口の移動が不便
- ・人が滞留する空間が不足
- ・駅・駅ビルの老朽化が進んでいる

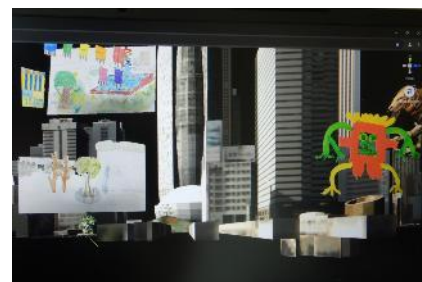
「解決するための再開発なんだな。」



徒歩で駅前のデッキや新宿駅西口広場を見下ろす高層ビルから現場を見学。



VRで未来の新宿駅前の空間を体験する。



新宿駅西口前の空間に児童の絵が入り込む AR (拡張現実) の作品づくり。工事現場の囲いの塀に QR コードが貼られ、一般の方も新宿西口の実際の風景の中で児童の作品を楽しめるようになる。

課題設定

情報収集・活動内容の決定



神田川の遊歩道に鷹(ツミ)の姿が！



満開の桜の神田川



成子天神社



きたしん公園

新宿駅再開発について学んだことを基に、柏木地区を中心に自分たちの身近な地域を見直し、魅力を再発見する。児童の視点でより住みたくなる街を考え、①神田川チーム ②気になるスポットチーム ③街並みチーム で提案する。

実行・ふりかえり・改善へ

柏木ライブ【アートプロジェクト】

テーマ「新宿・柏木地域を子どもたちの力でもっと魅力あるまちにしよう」

1 活動について

アートプロジェクトは「自分たちでデザインしたものを世間に発表したい」という思いをもって活動を開始した。6年生から3年生まで合計40名という大所帯で活動が始まり、各学年から「作りたいもの」や「どこで売ってみたいか」などの意見が多く出されたが、何かを作り出すためには、まず資金が必要なことを協力者の山口典子さんから助言を受けた。そこで、6年を中心に活動計画を話し合い、以下のように進めることにした。

- ① バザーを開き、活動資金を集める
- ② 山口典子さんによるワークショップ（バザー準備と並行して実施）
- ③ 資金が確保できたら、アート活動開始（2月のオープンスクールに向けて）

- ① では、「SDGs」を意識し、保護者に協力をお願いして家庭で不要になったアイテムやリサイクルできる物品を呼びかけ活動を実施。バザーの準備は「販売、会計、ロゴデザイン、広告」に役割分担をしてそれぞれ準備を進め12月の学芸会保護者鑑賞日と個人面談期間にバザーを実施。合計1万3000円を売り上げた。
- ② では、実際に子どものアイデアが、環境や人々のためになるアート活動に繋がった世界的な事例を実際に体感するワークショップを行ってもらい、アートプロジェクトの児童たちの視野が広がるきっかけとなった。そして、ついに③「自分たちで作る」段階に入り、オープンスクールでは、「参加者を巻き込んで作品を作ること」、「自分たちの作品を販売して手に取ってもらうこと」の両柱でアートを楽しんでもらいながら、大テーマの達成を目指している。併せて、作品は人の心に残るように、「マスク、キーホルダー、髪留め」などの身に付けられるものから、「バスボム、ステッカー」などのインパクトのあるものまで児童同士が学年を超えて意見を出し合い、各班に分かれて作成に励んでいる。柏木ライブの活動自体は始まったばかりで、教員が主導する場面も多い。しかし、安全や人権、時間や予算に配慮しながらも児童の声に寄り添う姿勢を大切に、①挑戦を通して活動を調整する姿 ②得意分野に応じて作業を分担する様子 ③身近な人と力を合わせて問題を解決する姿勢を積極的に褒め、良さをみんなで共有していくことで、主体性が育つことを期待している。

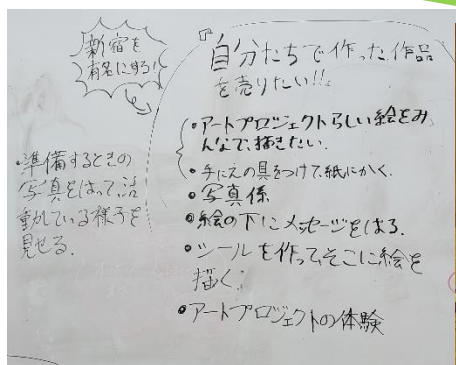
2 活動計画

	ねらい	○主な学習活動・児童の反応
9月課題設定	- 大テーマを達成するために、アートプロジェクトとして何ができるか考えを出し合う。（問題解決発見力） - まずは挑戦することを意識し、これまでの経験からアイデアを出してみる。（批判的思考力）	○テーマを達成するために自分たちにできるとは何かを考える ・資金を集めるためにバザーをしてみよう。
10月～1月活動 情報収集・計画↓実行↓ふりかえり↓改善	- 身近な人と力を合わせ、調べた手段や方法を使って課題解決をしようとする（他者や集団/問題解決発見力） - 活動を振り返り、考えたことを関連付けた工夫や新たな発想で、その後の活動を調整する（想像的思考力・メタ認知） - 自分の良さや自分にできることを理解し、それをいかして活動に取り組む（自分自身） - これまでの経験や、各教科の学びを生かし、活動している。	【バザー】 ○バザーを開くために必要なことは何か話し合う ・保護者をお願いして不用品の回収をしよう ・全校朝会で前項に知らせる・ポスターを作る・放送で知らせる ○買ってもらえるようにできる工夫を何か考える ・実際に服を着て写真を撮る。コーディネートを示す ・物品が綺麗に見えるように配置する ○実際にいつ販売するのか ・保護者がたくさん来る学芸会や個人面談日にしよう ・交代で店番をして、宣伝しよう ○オープンスクールに向けてアート製作を進める 【展示作品】 ・みんなで楽しめる作品がいい ・一人一人が描いてみてもらうのはどうか ○どのような作品なら納得できるか話し合う ・みんなも自分も楽しめるように、一つの大きな作品にする ・素晴らしい作品が作れる学校だと知ってもらえる 【販売物】 ○どのような商品を作りたいか話し合う ・イラスト、身に付けられるもの、捨てられないもの ・バザーで残った商品を再利用して別の商品に作り替える ○物販物や作品をどう展示するのか考える ・自分たちで考えたり、のんちゃんに聞いたりしてアレンジしてみる
3月ふりかえり	活動を通して学んだことや、自分自身の成長等を振り返り、今後の生活に生かそうとする。（他者や集団/メタ認知）	○今年のライブを通じて、自分がどのようなことができるようになったかをふりかえる。

3 活動の流れ

課題設定

このプロジェクトで何がしたいか、何ができるのかテーマに沿って考えてみよう！



アートで人を楽しませたい！

何か作りたい！作ったものを多くの人に見てほしい！

★自分たちのやりたいことのために、まずは資金集め開始！★

情報収集・活動内容の決定



資金が無いとみんなが出した作品が作れないね。どうしよう。のんちゃんがバザーを提案してくれているよ。

バザーを開くために必要な準備は何だろう？

学校中の人に再利用できる商品を探してもらおう。呼びかけは、私がやるよ！

実行・ふりかえり・改善

★バザーにもアートを生かした展示・掲示・広告を作成！★



たくさん買ってもらえるように、どんな工夫ができる？

たのしい飾り付けをするよ！

実際に服を着て、良さを伝えよう！

私たちのことが伝わるように、商品を入れる袋にオリジナルのロゴ RPJ(アートプロジェクト)を入れてみよう！



オリジナルロゴ完成

★バザーで1万3000円の売り上げがあった！ここから、ついに作品作りスタート★



柏木小を知ってもらいたいから、どこかに「かしうさ」は入れたいね。

バザーで残った商品を違う商品に作り直せないかな？誰かに得意な人に協力してもらえないかな？



柏木ライブ【エンタメプロジェクト】

テーマ「新宿・柏木地域を子どもたちの力でもっと魅力あるまちにしよう」

1 活動について

本プロジェクトの児童は「自分たちの考えるエンターテインメントで、柏木小学校や様々な人を明るく元気に盛り上げよう！」という思いから活動の内容を考えてきた。各学年の話し合いで挙げたのが、「ダンス」、「歌」、「和太鼓」、「TikTok 配信」、「YouTube 配信」などをやりたいという提案が多く出された。では、それをどのような場所、時間に行うのが効果的なのか話を進めた。その中で、自分たちがただやりたいという気持ちだけで大勢の人を盛り上げることができるのか。また、エンタメプロジェクトの発表を見てもらうだけで盛り上がるにつなげるのか。という観点に着目し、まずエンタメプロジェクトの存在を様々な人に知ってもらいたいという思いから、運動会の休憩時間を活用し、様々な人を巻き込んでダンスを踊ろう！という企画を実践した。運動会でのパフォーマンスを終えると多くの保護者、地域の方からエンタメプロジェクトの子ども達がいきいきと活動している姿がとてもよかった、エンタメプロジェクトの存在を知ることができてよかった。など嬉しいお言葉をたくさんいただくことができた。この企画を通じて、自分たちの考えるエンターテインメントで、元気や勇気を与える喜びや楽しみを実感している姿が見られた。

オープンスクールでは、新たに伝統グループ、創作グループに分かれ、柏木小学校の伝統として取り組んでいる和太鼓の演奏や、児童が考案したオリジナルの楽曲に振り入れを行い、パフォーマンスをお見せする準備を行ってきた。エンタメプロジェクトの活動を通して、様々な方が喜んでくれている姿を見ることで、達成感を味わうことができるよう、声の掛け方や説明の仕方など地域の方との関わり方について考えさせたい。

2 活動計画

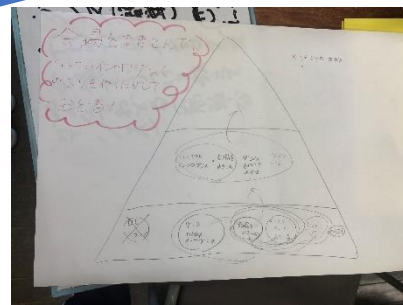
	ねらい	○主な学習活動・児童の反応
9月 課題設定	- 大テーマを達成するために、エンタメプロジェクトとして何ができるか考えを出し合う。(問題解決発見力) - 出し合った考えを元に、からアイデアを出してみる。(批判的思考力)	○班の活動テーマについて話合う ○テーマを達成するために自分たちにできるとは何かを考える。
10月～2月 活動情報収集・計画→実行→ふりかえり→改善	- 身近な人と力を合わせ、調べた手段や方法を使って課題解決をしようとする(他者や集団/問題解決発見力) - 活動を振り返り、考えたことを関連付けた工夫や新たな発想で、その後の活動を調整する(想像的思考力・メタ認知) - 自分の良さや自分にできることを理解し、それをいかして活動に取り組む(自分自身) - これまでの経験や、各教科の学びを生かし、活動している。	【みんなで盛り上がりよう大作戦】 ○多くの人を明るく元気に盛り上げるために何をしたい。 ・ダンス・歌・和太鼓 ・TikTok 配信 ・Youtube 配信 ○実現するための場所や時間はどこで、どんな準備が必要か、考えを出し合う。 ・運動会の休憩時間に様々な人を巻き込んでダンスや歌をうたう。
3月 ふりかえり	活動を通して学んだことや、自分自身の成長等を振り返り、今後の生活に生かそうとする。(他者や集団/メタ認知)	【伝統グループ、創作グループ発表会】 ・伝統グループでは、毎年5年生が柏葉学級との交流学习で行っている和太鼓を伝統として、実際に体験しながら多くの人に伝えていく。 ・創作グループでは、楽曲制作、ダンス振り入れを1から行い、オリジナルのパフォーマンスを作り上げる。
		・1年間のエンタメプロジェクトの活動を通して、自分がどのようなことをできるようになったかを振り返る。

3 活動の流れ

課題設定

自分たちの考えるエンターテインメントで、
柏木小学校を明るく元気に盛り上げよう！

学年ごとに盛り上げる
ための提案をしよう！



情報収集・活動内容の決定

保護者や地域の人も巻き込んでみ
んなで盛り上げられるといいよね！



運動会で何かを仕掛ける
ことができるんじゃない
かな？！

実行・ふりかえり・改善

「みんなで盛り上げよう大作戦！」

大好きな野球の応援歌をみ
んなでできて嬉しいな！



「伝統グループ&創作グループ」



柏木小で昔から引き継
いできた和太鼓を力強
く表現しよう！



Katokatone のアプリを使っ
て、楽曲を制作していくよ！



柏木ライブ【マスコミプロジェクト】

テーマ 「新宿・柏木地域を子どもたちの力でもっと魅力あるまちにしよう」

1 活動について

大テーマをもとに話し合う中で、本プロジェクトの児童は『柏木小学校を有名にしたい』という思いを共通してもっていることが見えてきた。また、柏木小学校を有名にすることにより柏木小学校に子どもを入学させたい、柏木の地域に住みたいという思いを多くの人に感じてもらうことを最終的なゴールとして挙げている。

このテーマをもとに本プロジェクトでは柏木小学校の魅力が伝わる動画を作り、地域に発信することを活動の軸にした。6年生を中心に6つのグループに分け、各グループ一つの動画を作ることにした。

まず初めに各グループ、柏木小学校のよさについて話し合った。「給食がおいしいところ」「屋上に農園があるところ」「放課後部活動があるところ」「先生が優しいところ」などが挙がった。

企画書の段階ではただ面白さだけを求める企画ばかりだったが、もう一度今回のテーマを振り返ることで自分のグループが動画を通して何を伝えたいのかを意識するようになった。その上でどのような企画にすれば自分たちの伝えたいことが伝わり、かつ興味を引く動画になるのかを考えた。教員は事前に六年生と次の時間で何を明らかにする必要があるのか現段階で困っていることはないか話し合う時間を設けた。そのようにすることで授業時間内に子ども自身で話し合いを進めることができるだけでなく、見通しを持って活動することができるため子どもの意欲が高まると考えた。台本作りの段階では、どの場所で行うのか、どのようなインタビューをするのか、事前に用意する必要があるものはなにかなど具体的な流れを紙に起こした。また、協力者のアドバイスで伝えたいことを詰め込みすぎてしまったり、動画の時間が長かったりすると視聴者が飽きてしまうということを学び、話し合いの結果、約5分の動画を作成することにした。また、児童が出演してもらいたい人に出演依頼を行い、実際のテレビ作成と同じような手順で撮影を行うことにした。教員は、児童の「〇〇先生にインタビューしたい」「この場所で撮影したい」という声に寄り添い、事前にアポを取るようにした。協力者との話し合いでは、どのような順番・日時で撮影をしていくのか、細かく設定していった。撮影の際にはグループ内で役割を分担し

説明の仕方や見せ方を考え、オープンスクールでは、地域の方が喜んでくれている姿や柏木小学校に興味を持つ姿を見ることで、達成感を味わうことができるようにしていく。

2活動計画

	ねらい	○主な学習活動・児童の反応
9月課題設定	・実生活や実社会に目を向け、課題を見付け、課題解決するための見通しをもつ（問題解決発見力） ・これまでの経験を振り返り、よりよい活動内容を考える（批判的思考力）	○プロジェクトの活動テーマについて話し合う ○テーマに合わせてグループごとに伝えたい柏木小学校の良さについて話し合う
活動情報収集・計画 ↓ 実行 ↓ ふりかえり ↓ 改善	・身近な人と力を合わせ、適当な方法を使って課題解決をしようとする（他者や集団/問題解決発見力） ・活動を振り返り、考えたことを関連付けた工夫や新たな発想で、その後の活動を調整する（想像的思考力・メタ認知） ・活動のゴールを見通し、計画的にプロジェクトを進めていく ・自分の良さや自分にできることを理解し、それをいかして活動に取り組む（自分自身） ・これまでの経験や、各教科の学びを生かし、活動している。	○各グループで企画書の作成 ・学校で鬼ごっこことかしたらおもしろそうだね。 ・どうやったら柏木小学校の良さが伝わるかな？ ・屋上農園のことは絶対に入りたいね。 ○台本の作成 ・副校長先生に話を聞いたらもっと詳しくわかりそうだね。 ○撮影 ○編集 ○オープンスクールに向けて ・動画だけでは思いが伝わらないかもしれないから、口でも説明したほうがいいのかもね ○地域の方に作成した動画の目的を伝え、動画を見てもらう。 ・柏木小学校の良さを多くの人に伝えよう
ふりかえり	活動を通して学んだことや、自分自身の成長等を振り返り、今後の生活に生かそうとする。（他者や集団/メタ認知）	○今年の柏木ライブを通じて、自分がどのようなことができるようになったかをふりかえる。

3 活動の流れ

課題設定



柏木小学校にはたくさんいいところがあるね！

柏木小学校の良さを伝えるにはどんな動画にすればいいかな？

情報収集・活動内容の決定



虹の間は昼もあって居心地がいいから紹介したいな！

すべての教室に大きなテレビがついているところもいいところだと思うな！



たくさんの人がこの動画を見て入学したいって思える動画にしたいね。



放課後部活動を知ってもらうために担当の先生だけでなく子どもにも聞きたいな！

実行・ふりかえり・改善



副校長先生にインタビューをしたら校長先生の優しさがもっとわかったよ。



放課後部活動の魅力が伝わるようにインタビューをしよう。

柏木ライブ【野菜の森プロジェクト】

テーマ「新宿・柏木地域を子どもたちの力でもっと魅力あるまちにしよう」

1 活動について

ライブのテーマをうけ、【野菜の森プロジェクト】でできることは何か。プロジェクト立ち上げの6年生は、「学校で育てた野菜を地域の人に食べてもらいたい」「たくさん売りたい」「たくさん売って売り上げを上げたい」といった具体的な思いをもってのはじまりであったが、3年生から5年生は、なかなか具体的な目標を見付けることが難しいようだった。そこで、まずは「たくさん野菜を育てて、たくさん売ろう!」ということとなり、目標は、「売上50万円」でのスタートとなった。

40人あまりの大所帯のプロジェクト。6年生は、地域のお店に売り込みに行くなどする営業部と学校の畑の仕事を担当する栽培部に分かれ、3年生から5年生は、栽培部員となった。

定例の活動日は、営業部は戦略会議、栽培部は土づくりに始まり、種まき、間引きなどの作業を行った。

販売活動は、主に休日に有志で出かけて行った。

- ・10/19 ファンモアタイム新宿（都庁広場）
- ・11/2 柏木地区避難所訓練（柏木小学校）
- ・11/17 新宿かしわまつり（柏木地域センター）
- ・12/7 学芸会（柏木小学校）
- ・12/21 まちの先生見本市（新宿中央公園）

販売の活動をしていく中で、子供たちは、柏木地域を離れての販売の難しさ、野菜を売って「売上50万円」の目標を達成することの大変さに気付いたようである。

今年度10回目の活動日。今後の活動について、話し合いの場をもった。

「何のためにこの活動をしているのか」「野菜を育てて売る活動が、ライブのテーマにどうつながっていくのか」活動中目標に立ち返ることがあまりなかったせいか、とまどう児童も多かったが、5年生から、これからの目標を「柏木小学校の野菜で地域を元気にしよう」としてはどうかとの提案があった。

ようやく、目的意識をはっきりと見付けたような瞬間であった。そこから、3・4年生の児童からも私たちに何ができるのか。何をしたらよいのか、意見がたくさんでてくるようになった。

「もっと宣伝をしよう」「ポスターをつくって地域のいろんな施設に貼ってもらおう」「インターネットで宣伝はできないか?」「もっといろんな野菜を育てたい」「もっときれいな野菜に育てたい」「野菜をつかったレシピを開発して、おまけにつけてあげたらどうだろう」「売り上げを高めて、来年度に向けて種や苗をもっと買って循環していけるようにしたい」これからの活動につながり、生かされていく活動の種が新たにまかれたところである。

2 活動計画

	ねらい	○主な学習活動・児童の反応	
9月課題設定	・実生活や実社会に目を向け、課題を見付け、課題解決するための見通しをもつ（問題解決発見力） ・これまでの経験を振り返り、よりよい活動内容を考える（批判的思考力）	○班の活動テーマについて話合う ○テーマを達成するために自分たちにできるとは何かを考える	
情報収集・計画・実行・ふりかえり・改善 10月～1月 活動	・身近な人と力を合わせ、調べた手段や方法を使って課題解決をしようとする（他者や集団/問題解決発見力） ・活動を振り返り、考えたことを関連付けた工夫や新たな発想で、その後の活動を調整する（想像的思考力・メタ認知） ・自分の良さや自分にできることを理解し、それをいかして活動に取り組む（自分自身） ・これまでの経験や、各教科の学びを生かし、活動している。	【営業部】 ○どのように営業をしているか話合う ・買ってもらえそうな店はあるかな ・飲食店を調べよう ○野菜を持って、営業に行く ・あべよしこのおうちごはん（渋谷区恵比寿のお弁当屋） ・ずらたん（西新宿の飲食店） ○オープンスクールにむけて準備	【栽培部】 ○土づくりをする ○よい野菜にするために ・間引きをしよう ・雑草抜きをしよう ○オープンスクールにむけて準備
オープンスクール		○地域の方に野菜の森プロジェクトの取組みを知ってもらう ・プレゼンテーションをつくって、発表しよう ・野菜の販売をしよう	
ふりかえり 3月	・活動を通して学んだことや、自分自身の成長等を振り返り、今後の生活に生かそうとする。（他者や集団/メタ認知）	○今年のライブを通じて、自分がテーマにむかってどのようなことに取り組み、実現してきたのかをふりかえり、今後の活動について考える。	

3 活動の流れ

課題設定

情報収集・活動内容の決定



活動のテーマを決めよう！

野菜を売って
売上 50万円を目指そう！！

6年生は…営業部と栽培部
3・4・5年生は…栽培部

実行・ふりかえり・改善



おいしい野菜を育てよう！
雑草は抜かなくちゃ！栄養を取られちゃう
野菜と野菜の間を開けるように間引きます！

販売の日は、朝から収穫
きれいに整えて、袋に入れて
商品にします



抜いた雑草もコンポストに
入れて、肥料にするよ



学校から少し離れた所にある
新宿中央公園
売れだすまでに時間がかか
ったよ
もっと、宣伝が必要かな？

販売会場へ
運びます

柏木地域センター
地域のみなさんが楽しみに
待っていてくれました



柏木ライブ 広告代理店プロジェクト

テーマ「新宿・柏木地域を子どもたちの力でもっと魅力あるまちにしよう」

1 活動について

新宿を拠点に活動している「クリアソン新宿」というサッカーのクラブチームがある。しかし、どのような活動をしているのかはあまり知られていない。それどころか新宿にクラブチームがあることを知っている人が少ないというのが現状として挙げられた。そこで、「新宿・柏木地域を子どもたちの力でもっと魅力あるまちにしよう」というテーマを受けて「クリアソン新宿というクラブチームを宣伝していくことで新宿を有名にしていけることができるのではないか」と考え、プロジェクトの目標を『クリアソン新宿を有名にしよう!』と設定した。

まずはクリアソン新宿とは普段どのようなことをしているのか情報を得るために、実際にクリアソン新宿の方に来ていただいてプレゼンしていただいた。そのプレゼンを受けて広告代理店という立場からクリアソン新宿を有名にするためにできること考えた。「他のプロジェクトと協力してオリジナルグッズを作製する」「紹介動画を作製する」などさまざまな案が出たが、作製に金銭が発生したり時間がかかったりするなど自分たちだけでは難しいという問題に直面した。限られた時間の中で、尚且つ自分たちの力だけで作り上げることができるものはないかと再度考え、「ポスターを作製して配布すること」「オリジナルの応援歌を作製すること」の二案に絞り活動を進めてきた。ポスターの作製は何を伝えたいのか、アピールしたいことは何かを出し合い、それぞれが作製したものを持ち寄って一つのを完成させることとした。応援歌作製はどのようなワードを入れたいかを出し合い曲に当てはめながら考えていった。どちらも教員は、児童の声に寄り添う姿勢を大切にした。また、毎時間クリアソン新宿の方にも来校していただき、アドバイスをいただきながら活動を進めてきた。

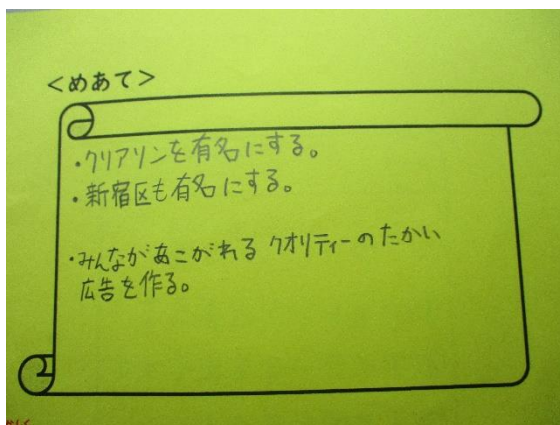
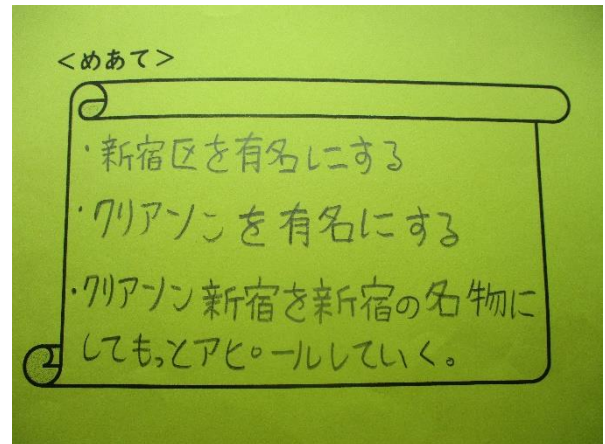
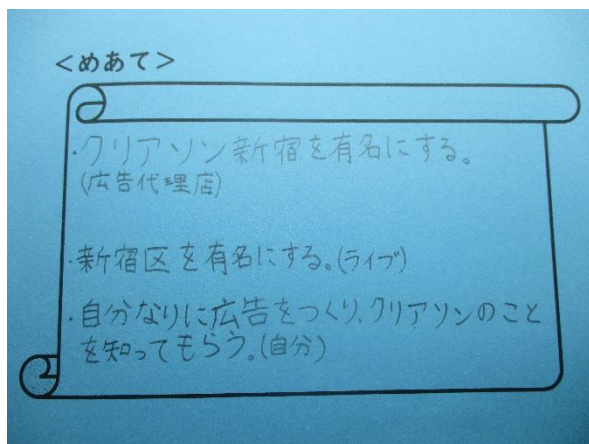
発表時には、モニターで応援歌の動画を流す、校門で作製したポスターの配布を行うだけでなく、実際にサッカーを体験してもらい、老若男女問わずサッカーの楽しさや魅力を肌で感じてもらいたいと考えている。自分たちの作製物やイベントで地域の方が喜んでくれている姿を見ることで、達成感を味わうことができるよう、声の掛け方や説明の仕方など地域の方との関わり方について考えさせたい。

2 活動計画

時	ねらい	○主な学習活動・児童の反応	
9月課題設定	- 現状を把握し、課題を見付け、課題解決するための見通しをもつ（問題解決発見力） - これまでの経験を振り返り、よりよい活動内容を考える（批判的思考力）	○広告代理店としてのテーマを考える ○テーマを達成するために自分たちにできるとは何かを考える	
活動 情報収集・計画↓実行↓ふりかえり↓改善 10月～1月	- 収集した情報をもとに、課題解決をしようとする（他者や集団/問題解決発見力） - 活動を振り返り、考えたことを関連付けた工夫や新たな発想で、その後の活動を調整する（想像的思考力・メタ認知） - 自分の良さや自分にできることを理解し、それをいかして活動に取り組む（自分自身）	【ポスター作製】 ○ポスターで伝えたいことやアピールしたいことを話し合う ・リーグ表を入れよう ・QRコードを張り付けて動画などを見られるようにする といったこと ○実際にポスターを作製して改善点について話し合う ○ポスター掲示に向けて作製を進める	【応援歌作製】 ○応援歌で使用する曲について話し合う ・みんなが知っている曲がいいと思う ・童謡ならみんなが知っているのではないかな ○応援歌の中に入れたいキーワードについて話し合う ・勝つぞとかどうかな ・力を合わせてもいいと思う ○応援歌作製を進める
発表・オープニング 2月		○多くの人にサッカー体験をしてもらうことで、サッカーの楽しさを感じてもらう ○ポスターを配布して宣伝する ・たくさんの人の目に触れるようにそれぞれの門で配布しよう	
ふりかえり 3月	活動を通して学んだことや、自分自身の成長等を振り返り、今後の生活に生かそうとする（他者や集団/メタ認知）	○ライブを通して、自分がどのようなことができるようになったかを振り返る	

3 活動の流れ

課題設定



【課題設定】

プロジェクトの目標として

- ① クリアソン新宿を有名にする
- ② 新宿区を有名にする

の二つを設定し、その他に個人のめあてをそれぞれで考えてから活動を始めた。

情報収集・活動内容の決定



毎週クリアソン新宿の方に来ていただき、アドバイスをいただきながら6年生を中心に活動を進めてきた。

〈活動内容〉

- ・ポスター作製
- ・応援歌作製
- ・試合会場での応援

<メモ>

・けいじ*反にチラシ(ポスター)をはる。
 ・会場で試合を見たら何かもらえるきかくをつくる。
 ・子どもがクリアソンのことを知れば親に
 「クリアソンの試合見たい」と言って大人も知れる?
 ○宿題…チラシ作り

実行・ふりかえり・改善

今日はボーリングの実演をしました。条件を変えて色々試してみるというのは、理科の学習の実験と同じなので、活かすことができました。長さも色々決めるなど、実際にやるというのも一つの手だなと思いました。次からは打ち合わせを事前に済ませます。

・今日じっさいにボーリングをためしてみても、きよりは3m50と決まって、楽しかったし、うれしかった。
 ・サッカーはとくいじゃないわたくしでさえ当てられたから、たぶん大人(初心者)でも、できると思う!

毎時間振り返りを行い、次回活動をよりよくしていく手立てとした。
 身近な事象と関連付けることで他教科とのつながりも意識することができた。

柏木ライブ【はくよーちゅーぶ】

テーマ「新宿・柏木地域を子どもたちの力でもっと魅力あるまちにしよう」

1 活動について

日常生活の中で、タブレットの動画を見ている児童が多く、動画コンテンツは今や生活の一部となっている。児童の中には、本単元が始まる前から、動画作成を行っている者もいる。今回はそれを自分の楽しみのためだけでなく、「相手に伝えたいことを考えながら動画を作成する」という目的を見失わないことを繰り返し児童とともに確認をしてきた。「伝えるということはどういうことなのか」「どうすれば、伝わったということになるのだろうか」というところまで掘り下げて考えるように促した。特別支援学級には多様な発達段階の児童がおり、どの発達段階の児童にも主体性をもって取り組んでもらえるためにはどのような手立てを用意すればよいのかの工夫が大変難しい。発達段階が進んだ児童であれば、「取材した場所に、動画を見た人が行きたいと思ってくれたらいい」と目的を自分なりにとらえることもできる。しかしそこまで発達段階が進んでいない児童でも、見ている人が分かりやすいように、並んだ商品をゆっくりカメラを動かしながら撮影する者もいれば、インタビューした人の話を聞きながら、必要な場所や物を選んで撮影する者もいた。そして、動画制作というデジタル技術にとられず、インタビュー先の方に元気よく挨拶をする、自分なりのかかわり方で相手と関わろうとするなどの様子も見られ、子供たちそれぞれができることを生かして取り組んでいる様子が見られた。

そうして集められた動画を、次に動画を繋げる、効果（テロップ、BGM、ナレーション）などを入れる作業に入る。自分たちの作業が、日常視聴している動画に近づく工程は、はじめはデジタル技術を使うことそのものを楽しむ様子が見られ、「自分はこうやりたい」というアイデアも徐々に始まった。それをもとにそのアイデアが自分たちが楽しむだけのものになっていないだろうか、出来上がったものが「かしわぎの まちを みんなに してもらおう」という目的にあったもの、観た人が「ここに行ってみたいな」と思えるものになっているだろうか、という「なぜこの活動をするのか」という視点を常にもって作業を行ってきた。

動画取材の当初、撮影モードを間違えて、コマ送りになってしまう事象が発生した。それに気が付いたのが帰校後だったために、はじめはこのままの画像にアフレコでインタビュー音声を付けることを検討したが、動画作成のプロ（元テレビCM制作経験者）に相談したところ、「間違いは仕方がない。でもそれをデジタルでごまかし、他の取材場所が通常動画で流れているところを1か所だけ静止画にするのは、取材先に対してとても失礼である。また、「失敗してもごまかせばよい」ということを教師自らが子供たちに教えてしまっているのか。」とお叱りの声をいただき、我々教員も大いに反省した。このことを貴重な体験としてここから子供たちにも「人と関わりながら社会生活を送ることの基本中の基本」を学んでもらいたいと思い、児童にここまでの経緯を話し、どうすべきかを一緒に考える機会を作った。

今回は、まず作業の様子を実際に見ていただく。作業が子供たちの興味関心につながるものであると同時に、相手意識をもったものになっているかどうかを見ていただき、ご指導いただければと思う。

また、オープンスクールでは、完成した「はくよーちゅーぶ」を見ながら今までの活動を振り返り、これからの学習や生活にどんなことが活かそうかを考え、実践できるようにしていきたいと考える。

2 活動計画

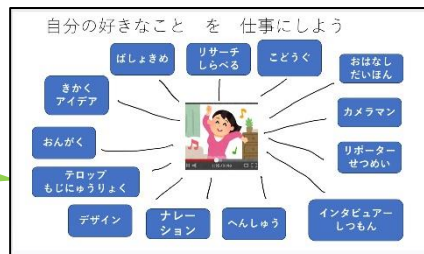
時	ねらい	○主な学習活動 ・児童の反応
9月 課題設定	- 自分たちのまちについて知り、まちのいいところを他の人に伝えたいという気持ちをもつ。 「町の動画を作成する」という活動に向けて主体的に取り組む意欲をもつ。 - 活動の流れや自分の役割について見通しをもち、自分のできることを考えながら参加する。	○他の学校で作成された動画を見て、「自分たちのまちを紹介する動画を作る」ことを知る。 ○活動内容を知る。動画作成までの流れやそれぞれの役割について知る。 ①まちを探索する ②どんな動画を撮るか計画を立てる（絵コンテの作成） ③動画を撮る ④動画を編集する ・インタビュアーになりたい ・動画編集がやりたい ・お話は苦手だから、カメラマンがやりたい

	ねらい	○主な学習活動・児童の反応
活動 10月～11月 情報収集・計画→実行→ふりかえり→改善	・友達と協力し、ともに活動を進めようとする態度を養う。 ・自分の得意なことや良さを理解し、それを生かして活動に取り組むと同時に、自分のペースや特性を理解し、安心して楽しみながら取り組む。 ・活動の振り返りを通して、友達や教師の意見を取り入れながら、自分の工夫や改善点を見つけ、次の活動に生かそうとする態度を養う。	○まちにはどんな場所があるかを Google earth のストリートビュー機能を使って調べ、オクリンクで友達と情報交換をする。 ・いつも通っている学童をみんなに教えたいな。 ・このお店でお買い物したことあるよ。 ・知っている場所を教師に見せる。 ○教師が提示した絵コンテのサンプルを参考にしながら、取材場所ごとにチームを作り、「どんな映像を撮りたいか、どんな質問をしたいか」「何を伝えたいか」を話し合い絵コンテを作成する。 ・どんなものが売っているかを撮影したいな ・一番人気のあるものは何かを聞きたいな。 ○取材場所にチームで出かけ、撮影を行う。撮影したものを全員で視聴し、よかった点や工夫したい点を考え、発表する。 ・分かりやすい話し方で質問をする。相槌を打つ。 ・どんなものがあるかわかりやすいようにゆっくりカメラを動かしたよ。 ・元気な声であいさつをする。 ○教師が動画編集の手順を簡単に説明し、基本的な操作を児童に教える。 ○各班で話し合いながら、伝えたい内容に合うように映像をつなげる。 ○仮編集した動画にBGM、ナレーション、テロップを追加する。 ・うまくつながれるようになったよ。 ・流したいBGMを一覧から選ぶ ・インタビューの声が聞こえるようにここはBGMを小さくしよう。
オープンスクール 2月	活動を通して学んだことや、自分自身の成長等を振り返り、今後の生活に生かそうとする。	○完成した動画をクラスで上映する。 ○自分の取り組みを振り返り、自分ができたこと、これからに生かしたいことを考える。 ・自分が作った動画が、出来上がってうれしいな。 ・今度は他のテーマで作ってみたいな。 ・みんなで作ると、一人じゃできないものができるんだな。

3 活動の流れ

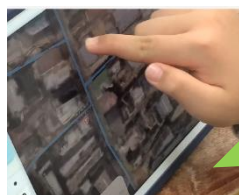
課題設定

カメラマンがやりたいな



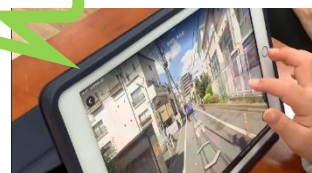
インタビュアーがやりたい

情報収集・活動内容の決定



どちらに進めばいいのかな

ここを見てみよう。
何があるかな。



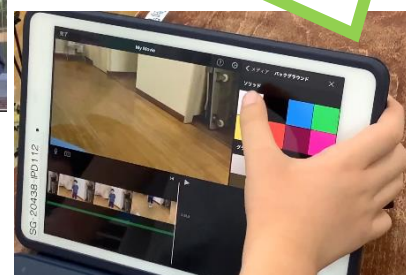
実行・ふりかえり・改善

電気屋さんに来ています。どんなものが売っているでしょう。



この中に児童館があります。
早速入ってみましょう！

ここを押せば、色の画面が出てくるよ。



VIII 成果と課題

本年度の研究の成果と課題

教育は未来への最大の投資である。

本校は、これからの実社会や実生活につながる資質・能力の育成に取り組んできた。まずネックとなったのが、教員の授業に対する意識改革の必要性である。子どもたちが習い教師は教えるという構造を壊し、子どもが着想し、それが力不足であれば教師とともに何を行うのかという方向性を決め、様々な取材を通して授業に生かしていくことを主眼とした。様々な材料をもちより、それを使ってあたかもライブキッチンのようにみんなで授業を創り出していくことが理想である。

これからの世の中を生きていくのも、よりよく変えていくのも子どもである。私たちの都合で、授業のあり方を考えるのではなく、より効力を発揮する改革が必要となることを認識したところから本研究は歩み始めた。教師が出過ぎず、学び方を学ばせ、子ども自身の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて臨んでいるが、私たち指導者側に必要だったのは、子どもたちが動き出すことを待つ辛抱強さと、これまでの枠を飛び越える思い切りの良さだったと思う。子どもたちの良さが出て来るまでにとっても時間がかかった。しかし、そこで教師が誘導してしまうと、この活動の意義が失われてしまう。とはいえ、ただ待つのではなく、きっかけやヒントとなる要素をさりげなく助言するタイミングとさじ加減を配慮した。また、子どもたちのアイデアが多岐に渡ると、それを実現させてあげるために様々なサポートをする必要がある。地域の方との連携、企業の協力等、今まで指導者側が計画してこなかった分野にも呼び掛け、準備をする中で、枠を広げなければいけなかった。この活動の中で、子どもたちは大きく変化した。教室や他の授業では見られなかった一面を発揮したり、他学年と関わることで互いに影響を受けたりした。そのことで自信をもち、生き生きし始めた子どもがたくさんいる。その姿は、「自分の存在意義をたしかめられた」と感じている様にも見える。

一方で「まなびのマルシェ」の後を引き継いだ「ライブ」は、全くの手探り状態からのスタートで、何をしたらよいか、どう進めればよいか悩み、葛藤した。子どもたちも、今まで経験したことのないことから「どうするの?」という疑問がとびかっていた。それでも、この取り組みの「柏木の町とくらしを豊かにしていこう」という目的と意義についての説明をし、時間を惜しまず話し合い、納得いくまで考えている子どもたちの姿を見ていると、少しずつ活動が動き始める手応えを感じた。また、サポートをいただいている外部人材の方々にも、尽力していただいた。はじめはゆっくりだった進捗状況も、少しずつ加速度を増していき、最終的には、子どもたちにとって教科書のない創り出す活動である「ライブ」が、一番本校のめざす授業に近いものに思えてきた。

本校の研究は、まだ道半ばであるが、指導者側も子どもたちも授業に対する認識が変わってきている様に思う。子どもたちにとっての授業が「受けるもの」から「切り開いていくもの」へと変わりつつある。指導者にとっての授業が「教えるもの」から「ヒントを与え、見守り、軌道修正するもの」へと変わりつつもある。

本年度たくさんの視察を全国各地からいただいた。本校の自律した学びを参考にされて来られたようであるが、授業自体の進め方ではなく、子どもたちの授業での自由闊達さと発想の豊かさに関心が集まっていた。その声を聴き、私たちが進めてきた教育活動は、着実な成果をあげていると実感した。

今後の社会はさらに急速な勢いで変化することが予想される。私たちの求めているのは冒頭に掲げたように「子どもたちを生涯にわたって幸せにする」ことにある。そのためには、これまで大切にしてきた文化や価値を大切にするとともに、これからの社会に順応しようとするだけでなく、新たな価値を創造し、他者と協働しながら未来を開いていかなければならないと考えている。

成 果

- 「教える」から「学ぶ」授業へのシフト、「なぞる」学習を否定し、「創り出す」学びへの移行は、子どもたちに学ぶ意欲を喚起してきている。
- コース別学習の選択を子ども自身の意思で決めさせたことは、学ぶ方向性の意識と自覚を促し、学力の向上につながっている。
- 実体験を重視した活動や地域の人材を生かした授業、さらには、起業型探究学習のプログラムを学習に位置づけたことで、現実社会との接点や社会を見ようとする視点を開き、これからの生き方に関しての見方や考え方を育てる機会となった。
- 主体的な学び、対話的な学び、深い学びを目指したことで、子どもが課題に追究する姿、友だちと 試行錯誤する姿が増え、子ども一人一人の良さを見いだせるようになった。それは指導者の目にも、地域や保護者の方の目にも良い変化として映り、評価アンケートでも指摘されていた。
- 子どもが生き生きと活動する姿が多く見られ、授業に活気が生まれるようになったことで、指導者がもっと良い授業をしようという意欲を見せるようになった。子どもが生きる授業を構成しようとする意識が高まっている。子どもの良い変化と、指導者の意欲向上という 相乗効果が生まれた。

課 題

- 子どもたちが発想を豊かにして、様々な見方や考え方を発揮しようとするとき、それを受け止める教師の力量や許容量が、全教員とも十分であるとはいいがたい。校内での研修方法を見直すとともに、先進校や都や国等の研修機会を積極的に活用し、教員個々の力量を高めていきたい。
- 起業型探究活動「ライブ」の取り組みをより活性化していくために、子どもたちの発想を豊かにするための体験やサポートをしてくれる個人や団体関係をさらに構築していく。
- ICT 活用の実践や、地域の人材や連絡先の情報等を、より効果的に授業に生かしていくため、教員間の OJT 推進や、校外での研修も充実していく。また、ノートの活用をさらに進め、より学習を子どもの意識で発展・応用していく必要がある。
- 子どもの変容をどう評価するのか、特に異学年との活動の際、発達段階に応じた評価をどのように工夫するのかなど、評価規準の構築をすすめていく。

□ おわりに 副校長 森田 充

本校では新宿区教育委員会より指定を受け、令和5・6年度新宿区教育委員会研究発表校として、令和6年度は新宿区教育委員会教育課題「教科担任制」モデル校として研究を深めて参りました。

本校の特徴として勤務1校目の教員の割合が高いことから、昨年度の反省を受け、今年度の研究を進めるにあたり全教員を研究推進部に所属することとしました。このことにより、研究に対する教員間の温度差を極力少なくして実践を積み重ねることができたと考えています。

その結果、全教員の授業に対する認識が「教えるもの」から「ヒントを与え、見守り、軌道修正するもの」へと変わり、児童の意識も「受けるもの」「教わるもの」から「共に創り出していくもの」へと変わってきました。生き生きと学び、伸び伸びと活動する児童の姿が多く見られるようになったことは、大きな成果だと考えます。

この2年間の実践の積み重ねにより、その有効性について学校全体で共有できたことは本校の財産となりました。これからも児童のために本研究で得たことを全ての教育活動に生かしていく所存です。

最後になりますが、本校に対してこのような機会を与えていただいた新宿区教育委員会教育長 針谷 弘志様をはじめ、新宿区教育委員会の皆様に感謝申し上げます。そして本校の研究をご指導くださった皆様に深く感謝を申し上げ、より一層の研究実践に取り組んで参ります。

□ ご指導いただいた先生方

明海大学 客員教授 剣持 勉 先生

新宿区教育委員会の皆様

□ 研究に携わった教職員（◎：研究推進委員長）

校 長	竹村 郷	副 校 長	森田 充
1年1組	梶川 アヤ子	柏葉学級	小熊 美樹
1年2組	廣田 航平	柏葉学級	高野 裕久
2年1組	八木澤 愛乃	柏葉学級	森山 美香
2年2組	土橋 恵梨花（矢田貝 麻里）	柏葉学級	山中 宏佳
3年1組	菅野 海都	音 楽	草深 陽子
3年2組	大島 千佳	図画工作	竹内 とも子
4年1組	石川 沙也香	算数少人数	矢田貝 麻里
4年2組	高橋 克徳・宇野 郁虹	養 護	原 里美
5年1組	小林 周平	日本語指導	宇野 郁虹
5年2組	高橋 優人	特別支援教室専門員	草場 勇樹
6年1組	◎矢沢 悠子	学習指導支援員	池本 明子
6年2組	田辺 莉奈	学習指導支援員	渡邊 美紀
時間講師	田中 桂子	栄 養 士	松永 有花
【令和5年度に携わった教職員】			
1年1組	中野 遥子	養 護	寺崎 裕子
2年1組	江袋 華織	特別支援教室専門員	宮下 洋子
4年1組	持田 哲郎	栄 養 士	岡庭 大毅